

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第130集

川本町

し た ん ぶ
四反歩遺跡

川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅳ—

1993

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



四反歩遺跡遠景（北から）



縄文時代擦糸文期の住居跡



縄文時代草創期の遺物



縄文時代撚糸文期のスタンプ形石器

序

首都圏に位置する埼玉県では、近年における開発にめざましいものがあります。県の北部に位置する川本町もこの例外ではなく、おしよせる開発の波に対して、地域との調和が望まれているところであります。

周知のごとく、秩父連峰を背に荒川を抱き自然の景観に恵まれた川本町は、鎌倉時代の武将で知られる畠山重忠の本拠地としてつとに有名な場所であるとともに、歴史的遺産である遺跡が多く存在している地域でもあります。

このたび、この地に川本工業団地の造成が実施されることになりましたが、事業地内にも数多くの遺跡が存在しており、その扱いについては埼玉県企業局と埼玉県教育委員会との間で慎重に協議が重ねられてまいりました。

その結果、7ヶ所の遺跡について当事業団が埼玉県企業局の委託を受けて発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることになりました。

本書は平成2年度に調査された四反歩遺跡の報告書であります。四反歩遺跡からは、約9千年前である縄文時代早期初頭の住居跡が8軒発見されました。遺物は約2万点余りの土器や石器が出土しました。また、弥生時代、歴史時代を通じても多くの足跡が残されていました。特に本遺跡の縄文時代早期初頭の撚糸文期の集落遺跡は、規模が大きくほぼ全体像が把握された、県の内外を問わず有数の遺跡であることが明らかになりました。

本書が学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の保護思想の普及・啓蒙及び教育機関の参考資料として、少しでも資するところがあることを望み、広く活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行にいたるまで多大な御協力を賜りました埼玉県企業局土地開発第二課、同北部土地開発事務所、川本町教育委員会、江南町教育委員会、嵐山町教育委員会、花園町教育委員会ならびに地元関係者各位、発掘・整理作業に携われた方々に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井修二

例 言

1. 本書は埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩3,003番地1他に所在する四反歩遺跡の発掘調査報告書である。四反歩遺跡群は当初南遺跡、東遺跡、北遺跡に分割されていたが、調査の結果、性格上一つの遺跡として判断されたため、四反歩遺跡として統合し、それぞれ地区別の遺跡として報告することにした。

四反歩遺跡 南地区	所在地	埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩3003番地1他
STNBM (南遺跡)	平成2年11月15日付	文化庁指示通知 委保第5の1187号
四反歩遺跡 東地区	所在地	埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩3008番地他
STNBH (東遺跡)	平成2年11月15日付	文化庁指示通知 委保第5の1189号
四反歩遺跡 北地区	所在地	埼玉県大里郡川本町大字本田字四反歩2999番地1他
STNBK (北遺跡)	平成2年11月15日付	文化庁指示通知 委保第5の1186号

2. 発掘調査は、川本工業団地建設事業に伴うものであり、埼玉県教育局指導部文化財保護課が調整し、埼玉県企業局土地開発第二課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理、報告書作成作業も引き続き、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が受託し、実施した。

3. 発掘調査は金子直行、川口 潤が担当し、平成2年4月1日から平成2年10月31日まで実施した。整理、報告書作成作業は金子が担当し平成4年4月1日から平成5年3月31日まで実施した。なお、発掘調査・整理作業の組織は4ページに示した。

4. 出土遺物の実測及び作図は金子が、草創期の石器群を西井幸雄、歴史時代の遺物を岡本健一が担当し、また、遺物のコンピューター処理については宮井英一、西井の協力を得た。

5. 写真撮影は発掘調査時の撮影を金子、川口が行い、遺物撮影を金子が行った。

6. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局文化財保護課が、歴史時代の遺物を岡本が行い、他を金子が担当した。

7. 本書の編集は資料部資料整理第1課の金子があたった。

8. 本書に掲載した資料は、平成5年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

9. 遺跡の基準点測量、航空写真撮影は株式会社パスコ、土器の胎土分析は第四紀地質研究所にそれぞれ委託した。グラビア写真は折原基久氏に依頼した。

10. 本書の作成にあたり、下記の方々から御教示、御協力を賜った。(敬称略)

新井 端 石井 寛 植木 弘 奥野麦生 小林 茂 小林達雄 中島 宏 早川 泉
原田昌幸 村松 篤 森田安彦

凡 例

1. 遺跡におけるX・Yの座標表示は国家標準直角座標を示しており、本遺跡は第IX系内に位置し、それに基づく座標値を表記している。また、挿図における方位は全て座標北を示している。

2. 本書に掲載した挿図内では遺構の名称を次のように表記した。

S J…住居跡 S K…土壇 F P…炉穴 S S…集石土壇

3. 本書に掲載した遺構図版の縮尺は、各時代の住居跡・土壇ともに1/60を原則とした。集石土壇は1/30である。また、例外的なものについてはスケールで指示した。

4. グリッドラインは縮尺如何にかかわらず30mメッシュで表示してあり、グリッドの呼称も30mのメッシュを基準に大グリッドで表記した。

5. 海拔標高の表示は、遺構の土層断面図及び断面図の水平表示線に表記した。指示のないものについては、同一挿図内にある標高指示と同値であることを示している。

6. 遺物の縮尺は以下の通りであり、例外的なものはスケールで指示してある。

縄文・弥生土器の拓影図 1/2 縄文・弥生土器の実測図 1/3・1/4

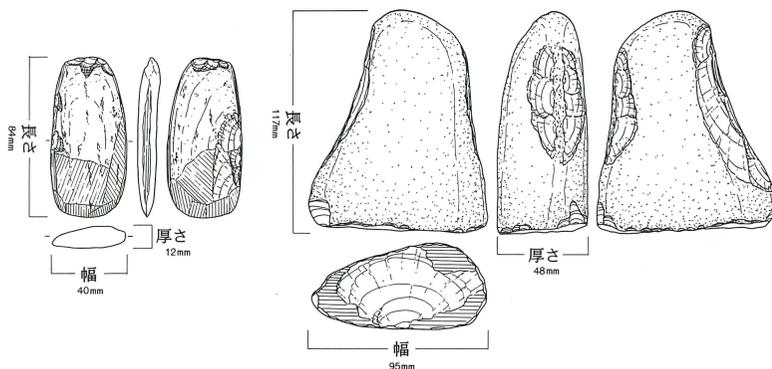
石器の実測図 草創期の石器群及び石鏃 2/3 小形石器 1/2 大形石器 1/3

なお、遺物分布図中の遺物の縮尺は不同である。

7. 遺構の遺物分布図におけるドットマークは、●は土器を、■は石器を表している。それ例外のものについては、そのつど明示してある。

8. 土器拓影図の下部に示した英数文字は、出土した地点の大グリッドを表記したもので、石器は文末に一覧表にして示した。

9. スタンプ形石器実測図の底面にみられる網掛は、使用痕の観察される範囲を示しており、摩滅している部分とは限らない。なお、計測値は以下のように測定した。



10. 本報告にあたり、発掘調査時の遺構ナンバー等を尊重したが、縄文時代早期撚糸文期の住居跡のみ、番号を振り替えた。新旧の対応は以下の通りある。

S X 1 → S J 8 S X 2・3 → S J 9・10 S X 4 → S J 11 S X 5 → S J 12

S X 6 → S J 13 S X 7 → S J 14 S X 8 → S J 15

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

I. 調査の概要	1
1. 調査に至るまでの経過	1
2. 調査の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理作業	3
(3) 発掘調査及び報告書刊行事業の組織	4
II. 遺跡の立地と環境	5
III. 遺跡の概要	11
IV. 四反歩遺跡南地区の調査	13
1. 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 草創期の遺物	13
(2) 撚糸文期の遺構と遺物	16
(3) 沈線文期の遺構と遺物	54
(4) 条痕文期の遺構と遺物	56
(5) 前期の遺構と遺物	69
2. 弥生時代の遺構と遺物	84
3. 時期不詳の遺構	101
4. 包含層出土の遺物	103
(1) 出土土器	103
(2) 土製品	163
(3) 出土石器	169

V.	四反歩遺跡東地区の調査	220
1.	縄文時代の遺構と遺物	221
2.	弥生時代の遺構と遺物	224
3.	歴史時代の遺構と遺物	228
4.	包含層出土の遺物	241
	(1) 出土土器	241
	(2) 出土石器	263
VI.	四反歩遺跡北地区の調査	264
1.	縄文時代の遺構と遺物	267
2.	歴史時代の遺構と遺物	271
3.	包含層出土の遺物	282
	(1) 出土土器	282
	(2) 出土石器	286
VII.	四反歩遺跡出土土器胎土分析	300
1.	X線回折試験及び電子顕微鏡観察	300
2.	土器分類と胎土分析について	307
VIII.	発掘調査の成果と課題	311
1.	撚糸文系土器群の検討	311
2.	夏島式及び稻荷台式土器の細分について	326
3.	撚糸文期の石器群の検討	332
4.	スタンプ形石器の検討	336
5.	奈良時代の土器と集落について	345

挿図目次

第1図	グリッド呼称図	2	第34図	第14号住出土土器	40
第2図	埼玉県の地形図	5	第35図	第14号住出土石器(1)	41
第3図	周辺の遺跡	6	第36図	第14号住出土石器(2)	42
第4図	遺跡周辺の地形図	8	第37図	第15号住居跡	43
第5図	遺跡全体図	10	第38図	第15号住遺物分布図(1)	44
第6図	四反歩遺跡南地区全体図	12	第39図	第15号住遺物分布図(2)	45
第7図	草創期の遺物(1)	14	第40図	第15号住出土土器(1)	46
第8図	草創期の遺物(2)	15	第41図	第15号住出土土器(2)	47
第9図	撚糸文期の遺構	16	第42図	第15号住出土石器(1)	47
第10図	第8号住居跡	17	第43図	第15号住出土石器(2)	48
第11図	第8号住遺物分布図	18	第44図	第15号住出土石器(3)	49
第12図	第8号住出土土器	19	第45図	撚糸文期の土壌	51
第13図	第8号住出土石器	19	第46図	撚糸文期土壌出土土器	52
第14図	第9・10号住居跡	20	第47図	撚糸文期集石遺構	53
第15図	第9・10号住遺物分布図(1)	22	第48図	第1号住居跡	54
第16図	第9・10号住遺物分布図(2)	23	第49図	第1号住出土土器	54
第17図	第9・10号住遺物分布図(3)	24	第50図	第9号土壌	55
第18図	第9・10号住出土土器	25	第51図	第9号土壌出土土器	55
第19図	第9・10号住出土石器	26	第52図	沈線文期の遺構	55
第20図	第9号住P i t出土遺物	27	第53図	条痕文期の遺構	56
第21図	第11号住居跡	29	第54図	条痕文期の炉穴	57
第22図	第11号住出土土器	29	第55図	条痕文期の土壌(1)	58
第23図	第11号住遺物分布図	30	第56図	条痕文期の土壌(2)	60
第24図	第12号住居跡	31	第57図	条痕文期の土壌(3)	61
第25図	第12号住遺物分布図	32	第58図	条痕文期の土壌(4)	62
第26図	第12号住出土土器	33	第59図	条痕文期土壌出土土器実測図	63
第27図	第12号住出土石器	33	第60図	条痕文期炉穴・土壌出土土器(1)	64
第28図	第13号住居跡	34	第61図	条痕文期土壌出土土器(2)	65
第29図	第13号住遺物分布図	35	第62図	条痕文期土壌出土土器(3)	66
第30図	第13号住出土土器	36	第63図	縄文時代の土壌出土石器(1)	67
第31図	第13号住出土石器	36	第64図	縄文時代の土壌出土石器(2)	68
第32図	第14号住居跡	38	第65図	前期の遺構	69
第33図	第14号住遺物分布図	39	第66図	第5号住居跡	70

第67図	第5号住遺物分布図	71	第103図	グリッド出土土器(4)	112
第68図	第5号住出土土器(1)	72	第104図	グリッド出土土器(5)	113
第69図	第5号住出土土器(2)	73	第105図	グリッド出土土器(6)	114
第70図	第5号住出土石器	74	第106図	グリッド出土土器(7)	115
第71図	第6号住居跡	76	第107図	グリッド出土土器(8)	116
第72図	第6号住遺物分布図	77	第108図	グリッド出土土器(9)	117
第73図	第6号住出土土器	78	第109図	グリッド出土土器(10)	118
第74図	第6号住出土石器	79	第110図	グリッド出土土器(11)	119
第75図	第7号住居跡	81	第111図	グリッド出土土器(12)	120
第76図	第7号住遺物分布図	82	第112図	グリッド出土土器(13)	124
第77図	第7号住出土土器	82	第113図	グリッド出土土器(14)	125
第78図	第7号住出土土器	83	第114図	グリッド出土土器(15)	126
第79図	弥生時代の遺構	84	第115図	グリッド出土土器(16)	127
第80図	第2号住居跡	85	第116図	グリッド出土土器(17)	128
第81図	第2号住出土土器	86	第117図	グリッド出土土器(18)	129
第82図	第3号住居跡	87	第118図	グリッド出土土器(19)	130
第83図	第3号住遺物分布図	88	第119図	グリッド出土土器(20)	131
第84図	第3号住出土土器	88	第120図	グリッド出土土器(21)	132
第85図	第3号住出土石器	89	第121図	グリッド出土土器(22)	133
第86図	第4号住居跡	90	第122図	グリッド出土土器(23)	134
第87図	第4号住遺物分布図	91	第123図	グリッド出土土器(24)	135
第88図	第4号住出土土器(1)	91	第124図	グリッド出土土器(25)	136
第89図	第4号住出土土器(2)	92	第125図	グリッド出土土器(26)	137
第90図	第4号住出土石器	92	第126図	グリッド出土土器(27)	138
第91図	弥生時代の土壌(1)	94	第127図	グリッド出土土器(28)	139
第92図	弥生時代の土壌(2)	96	第128図	グリッド出土土器(29)	140
第93図	弥生時代の土壌(3)	97	第129図	グリッド出土土器(30)	141
第94図	弥生時代土壌出土土器(1)	98	第130図	グリッド出土土器(31)	142
第95図	弥生時代土壌出土土器(2)	98	第131図	グリッド出土土器(32)	143
第96図	時期不詳の土壌	100	第132図	グリッド出土土器(33)	144
第97図	遺物分布全体図	102	第133図	グリッド出土土器(34)	146
第98図	出土土器全体図	104	第134図	グリッド出土土器(35)	147
第99図	撚糸文系土器群口縁部分分布図	105	第135図	グリッド出土土器(36)	148
第100図	グリッド出土土器(1)	109	第136図	グリッド出土土器(37)	150
第101図	グリッド出土土器(2)	110	第137図	グリッド出土土器(38)	151
第102図	グリッド出土土器(3)	111	第138図	撚糸文系土器群実測図	152

第139図	沈線文・条痕文系土器群分布図	154	第174図	スタンプ形石器(3)	195
第140図	グリッド出土土器(39)	155	第175図	スタンプ形石器(4)	196
第141図	グリッド出土土器(40)	156	第176図	スタンプ形石器(5)	197
第142図	前・中・後期土器群分布図	158	第177図	スタンプ形石器(6)	198
第143図	グリッド出土土器(41)	159	第178図	スタンプ形石器(7)	199
第144図	グリッド出土土器(42)	161	第179図	スタンプ形石器(8)	200
第145図	グリッド出土土器(43)	162	第180図	スタンプ形石器(9)	201
第146図	土製円盤分布図	164	第181図	スタンプ形石器(10)	202
第147図	土製円盤(1)	165	第182図	スタンプ形石器(11)	203
第148図	土製円盤(2)	166	第183図	スタンプ形石器(12)	204
第149図	ミニチュア土器	166	第184図	スタンプ形石器(13)	205
第150図	石器分布全体図	168	第185図	スタンプ形石器(14)	206
第151図	剝片分布図	170	第186図	磨石(1)	207
第152図	石鏃・石錐・石槍	171	第187図	磨石(2)	208
第153図	搔器(1)	172	第188図	磨石(3)	209
第154図	搔器(2)	173	第189図	磨石(4)	210
第155図	搔器(3)	174	第190図	磨石(5)	211
第156図	搔器(4)	175	第191図	磨石(6)	212
第157図	石錘・有溝砥石(1)	176	第192図	磨石(7)	213
第158図	有溝砥石(2)	177	第193図	磨石(8)	214
第159図	石斧・礫器分布図	179	第194図	石皿(1)	215
第160図	磨製石斧(1)	180	第195図	石皿(2)	216
第161図	磨製石斧(2)・打製石斧(1)	181	第196図	石皿(3)	217
第162図	打製石斧(2)	182	第197図	石皿(4)	218
第163図	打製石斧(3)	183	第198図	石皿(5)	219
第164図	打製石斧(4)	184	第199図	四反歩遺跡東地区全体図	220
第165図	礫器(1)	186	第200図	第1号住居跡	222
第166図	礫器(2)	187	第201図	第1号住出土土器	222
第167図	礫器(3)	188	第202図	縄文時代の集石土壇	223
第168図	礫器(4)	189	第203図	第4号住居跡	224
第169図	礫器(5)	190	第204図	第4号住遺物分布図	225
第170図	敲石	191	第205図	第4号住出土土器	226
第171図	スタンプ形石器・磨石・ 石皿分布図	192	第206図	第4号住出土石器	227
第172図	スタンプ形石器(1)	193	第207図	第2号住居跡	228
第173図	スタンプ形石器(2)	194	第208図	第2号住遺物分布図	229
			第209図	第2号住出土土器	230

第210図	第3号住居跡	231	第246図	第5号住出土石器	269
第211図	第3号住遺物分布図と出土土器	231	第247図	第1号集石土壇	270
第212図	第5・6号住居跡	232	第248図	第1号住居跡	271
第213図	第5・6号住遺物分布図	233	第249図	第1号住遺物分布図	272
第214図	第5・6号住出土土器	233	第250図	第1号住出土土器	273
第215図	第7号住居跡	235	第251図	第2号住居跡	274
第216図	第7号住遺物分布図	235	第252図	第2号住遺物分布図	275
第217図	第7号住出土土器	236	第253図	第2号住出土土器	276
第218図	第8号住居跡	237	第254図	第3号住居跡	277
第219図	第8号住遺物分布図	237	第255図	第3号住遺物分布図と出土土器	277
第220図	第8号住出土土器	238	第256図	第4号住居跡	278
第221図	歴史時代の土壌	239	第257図	第4号住遺物分布図	279
第222図	歴史時代の道跡	240	第258図	第4号住出土土器(1)	280
第223図	グリッド出土土器(1)	242	第259図	第4号住出土土器(2)	281
第224図	グリッド出土土器(2)	243	第260図	グリッド出土土器(1)	283
第225図	グリッド出土土器(3)	244	第261図	グリッド出土土器(2)	284
第226図	グリッド出土土器(4)	245	第262図	グリッド出土土器(3)	285
第227図	グリッド出土土器(5)	246	第263図	グリッド出土石器(1)	287
第228図	グリッド出土土器(6)	247	第264図	グリッド出土石器(2)	288
第229図	グリッド出土土器(7)	248	第265図	グリッド出土石器(3)	289
第230図	グリッド出土土器(8)	249	第266図	三角・菱形ダイアグラム 位置分類図	301
第231図	グリッド出土土器(9)	250	第267図	三角・菱形ダイアグラム	302
第232図	グリッド出土土器(10)	251	第268図	Qt・P1相関図	304
第233図	グリッド出土土器(11)	252	第269図	他遺跡との分析比較図	305
第234図	グリッド出土土器(12)	253	第270図	群馬県中棚遺跡の分析土器	305
第235図	グリッド出土石器(1)	257	第271図	胎土分析資料	308
第236図	グリッド出土石器(2)	258	第272図	縄文・撚糸文施文土器分布図	318
第237図	グリッド出土石器(3)	259	第273図	条線文・無文 異方向施文土器分布図	319
第238図	グリッド出土石器(4)	260	第274図	四反歩遺跡土器変遷図(1)	322
第239図	グリッド出土石器(5)	261	第275図	四反歩遺跡土器変遷図(2)	323
第240図	グリッド出土石器(6)	262	第276図	四反歩遺跡土器変遷図(3)	324
第241図	四反歩遺跡北地区全体図	264	第277図	スタンプ形石器形状図(1)	338
第242図	第5号住居跡	265	第278図	スタンプ形石器形状図(2)	339
第243図	第5号住遺物分布図	266	第279図	スタンプ形石器の接合例	343
第244図	第5号住出土土器	267			
第245図	第5号住出土土器実測図	268			

表 目 次

第1表 土製円盤一覧表 ……………167	第6表 土器群のグルーピング表 ……………315
第2表 石器一覧表 ……………290	第7表 石器分類表 ……………333
第3表 胎土性状表 ……………302	第8表 スタンプ形石器分類表 ……………337
第4表 分析土器観察表 ……………304	第9表 スタンプ形石器石質分類表 ……………340
第5表 施文別分類表 ……………312	第10表 スタンプ形石器属性別分類表 ……………343

写真図版目次

四反歩遺跡南地区

図版1 四反歩遺跡全景（東から）
四反歩遺跡全景（北から）

図版2 第8号住居跡
第8号住遺物出土状態

図版3 第9号住居跡
第10号住居跡

図版4 第9号住遺物出土状態
第9・10号住周辺の遺物出土状態

図版5 第11号住居跡
第11号住遺物出土状態

図版6 第12号住居跡
第12号住遺物出土状態

図版7 第13号住居跡
第14号住居跡（南西から）

図版8 第14号住居跡（南東から）
第14号住遺物出土状態

図版9 第15号住居跡
第15号住遺物出土状態

図版10 F2J1区遺物出土状態近景
F2J1区遺物出土状態遠景

図版11 第1号集石遺構
第2号集石遺構

図版12 第3号集石遺構
第4号集石遺構

図版13 縄文時代の土壇

図版14 第1号住居跡
第5号住居跡（南東から）

図版15 第5号住居跡（北東から）
第5号住炉体土器

図版16 第6号住居跡
第7号住居跡

図版17 第2号住居跡
第3号住居跡（北東から）

図版18 第3号住居跡（南東から）
第3号住遺物出土状態

図版19 第4号住居跡
第4号住遺物出土状態

図版20 弥生時代の土壇

図版21 第8号住出土遺物
第9・10号住出土土器

図版22 第9号住P i t出土遺物
第9・10号住出土石器

図版23 第11号住出土土器
第12号住出土土器

図版24 第13号住出土土器

第14号住出土土器
図版25 第14号住出土土器
第14号住出土土器
図版26 第15号住出土土器
第15号住出土土器
図版27 第15号住出土土器
第15号住出土土器
図版28 撚糸文期土壙出土土器
第24号土壙出土土器
図版29 第26号土壙出土土器
第37号・第38号土壙出土土器
図版30 第5号住出土土器
第5号住出土土器
図版31 第5号住出土土器
第6号住出土土器
図版32 第6号住出土土器
第6号住出土土器
図版33 第7号住出土土器
第7号住出土土器
図版34 縄文時代前期の住居跡出土土器
図版35 弥生時代の住居跡出土遺物
図版36 弥生時代の遺構出土遺物
図版37 グリッド出土土器(1)
図版38 グリッド出土土器(2)
図版39 グリッド出土土器(3)
図版40 グリッド出土土器(4)
図版41 グリッド出土土器(5)
図版42 グリッド出土土器(6)
図版43 グリッド出土土器(7)
図版44 グリッド出土土器(8)
図版45 グリッド出土土器(9)
図版46 グリッド出土土器(10)
図版47 グリッド出土土器(11)
図版48 グリッド出土土器(12)
図版49 グリッド出土土器(13)
図版50 グリッド出土土器(14)

図版51 グリッド出土土器(15)
図版52 グリッド出土土器(16)
図版53 グリッド出土土器(17)
図版54 グリッド出土土器(18)
図版55 グリッド出土土器(19)
図版56 グリッド出土土器(20)
図版57 グリッド出土土器(21)
図版58 グリッド出土土器(22)
図版59 グリッド出土土器(23)
図版60 グリッド出土土器(24)
図版61 グリッド出土土器(25)
図版62 土製円盤
図版63 グリッド出土土器(1)
図版64 グリッド出土土器(2)
図版65 グリッド出土土器(3)
図版66 グリッド出土土器(4)
図版67 グリッド出土土器(5)
図版68 グリッド出土土器(6)
図版69 グリッド出土土器(7)
図版70 グリッド出土土器(8)
図版71 グリッド出土土器(9)
図版72 グリッド出土土器(10)
図版73 グリッド出土土器(11)
図版74 グリッド出土土器(12)
図版75 グリッド出土土器(13)

四反歩遺跡東地区

図版76 第1号住居跡
第2号住居跡
図版77 第2号住遺物出土状態
第3号住居跡
図版78 第4号住居跡
第4号住遺物出土状態
図版79 第5・6号住居跡
第5・6号住遺物出土状態
図版80 第7号住居跡
第7号住遺物出土状態

- 図版81 第8号住居跡
第8号住遺物出土状態
- 図版82 道跡
集石土壇・土壇
- 図版83 住居跡出土遺物(1)
- 図版84 住居跡出土遺物(2)
- 図版85 住居跡出土遺物(3)
- 図版86 住居跡出土遺物(4)
- 図版87 グリッド出土土器(1)
- 図版88 グリッド出土土器(2)
- 図版89 グリッド出土土器(3)
- 図版90 グリッド出土土器(4)
- 図版91 グリッド出土石器

四反歩遺跡北地区

- 図版92 第5号住居跡
第5号住居跡
- 図版93 第1号住居跡
第2号住居跡
- 図版94 第3号住居跡
第4号住居跡
- 図版95 第5号住居跡土器
第5号住居跡出土石器
- 図版96 住居跡出土土器(1)
- 図版97 住居跡出土土器(2)
- 図版98 住居跡出土土器(3)
- 図版99 グリッド出土土器
- 図版100 グリッド出土石器



I. 調査の概要

1. 調査に至るまでの経過

埼玉県では生活環境の整備と県土に合った土地利用計画を進めるため、各種の施策を実施している。その一環として県企業局では工場誘致と適切な工場配置を行うため、大里郡川本町に川本工業団地の造成を計画した。県教育局文化財保護課ではこのような開発事業に対応するため、開発関係部局と事前協議を行い、文化財の保護について遺漏の無いよう調整を進めてきた。

同工業団地の造成計画にあたり、昭和61年12月15日付け企局造第1257号で県企業局宅地造成課長から教育局文化財保護課長あて「川本工業団地造成事業地内における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについて」照会があった。しかし、この時点では環境アセスメントが終了していなかったため所在確認調査は実施できなかったが、川本町教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、三ヶ所の遺物散布地が確認された。

この結果をふまえ、県企業局と文化財保護課の間でその保存について協議を重ねたが、事業計画を変更することは不可能との結論に達した。しかし、周知されている埋蔵文化財包蔵地の範囲確認及び所在確認調査は不可避であり、環境アセスメント終了後実施することを相互確認した。

この結果をふまえ、昭和62年3月30日付け教文第1257号をもって文化財保護課長から埼玉県企業局公営企業管理者あて次のように通知した。

- 1 川本工業団地造成予定地内に所在する円阿弥遺跡ほか2遺跡の埋蔵文化財包蔵地の調査は、昭和62年度の後半に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施する。
- 2 発掘調査の実施にあたっては、事前に文化財保護法第57条の3第1項の規定により、文化庁長官あて埋蔵文化財発掘調査に関する届け出をすること。

昭和62年7月に10日間にわたる所在及び確認調査を実施した。その結果、縄文時代から奈良・平安時代にわたる埋蔵文化財包蔵地5ヶ所を確認した。

文化財保護課では、現地踏査、所在及び確認調査の結果を検討し、県企業局宅地造成課長あて、次のように回答した。

- 1 工業団地造成予定地内には、円阿弥遺跡、竹之花遺跡、白草遺跡、下大塚、四反歩(北・東・南地区)遺跡が所在する。
- 2 上記の埋蔵文化財包蔵地にかかる造成計画の変更が不可能な場合には、記録保存のための発掘調査を実施すること。
- 3 発掘調査の実施にあたっては文化財保護課と協議すること。

その後発掘調査の実施について協議した結果、昭和62年9月16日付けで県企業局と埼玉県埋蔵文化財調査事業団との間に発掘調査に関する委託契約書が締結された。発掘調査は昭和62年9月、竹之花遺跡の調査から開始され、昭和63年度から平成2年度へと引き継がれた。また、昭和62年11月27日付け委保第5—1733号をもって文化庁から埋蔵文化財発掘調査の届けに対する通知があった。

2. 調査の経過

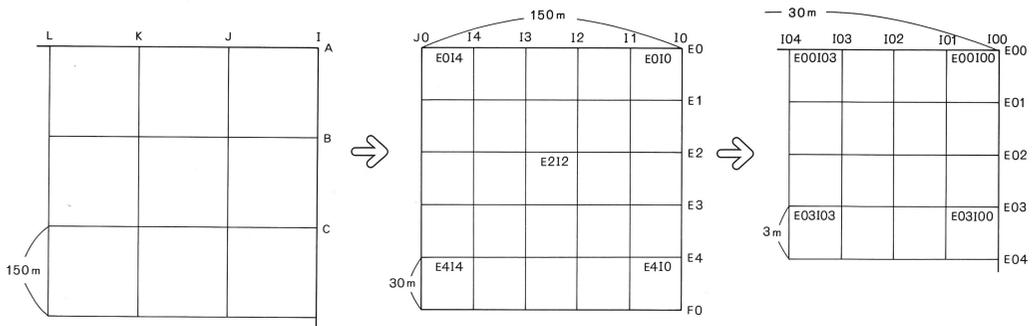
(1) 発掘調査

調査の方法 川本工業団地内における遺跡群の発掘調査の方法とその経過については、当事業団報告書第105集の川本工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告書—I—to詳述されているので、そちらに譲りたい。ここでは、川本工業団地内遺跡群の中で最後の調査であった四反歩遺跡について、報告を行うことにする。

ここで、調査に先だって設定されたグリッドについて説明したい。川本工業団地内遺跡群は範囲が東西約900m、南北約1000mという広範な地域内に存在するため、これらを取り囲む基準の設定が必要であった。そのため、この範囲に国家座標第IX系の座標に沿って1辺150mの大グリッドを設定した。そして、グリッドの基準ラインに南北方向は北からアルファベットの大文字A～H、東西方向は東からI～Oという名称を与え、両者の組み合わせで大グリッドを表記した。次に、150mの大グリッド内を30m毎に分割し、25の中グリッドを設定した。この中グリッドの表記はA 2 I 2という様に2桁の数字の最初に表現した。さらに、中グリッドの中を3m毎に分割し、100の小グリッドを設定して、2桁の数字の後に表記した。従って、グリッドは分割ラインに名称を与えているため、ラインの名称に挟まれた範囲内を6桁の英数字で表記してあることになる。

四反歩遺跡はこれらのグリッドの中で、南北方向E～G、東西方向I～Jの範囲に位置する。調査の進行に合わせて、包含層遺物は北地区、東地区は小グリッド単位で取り上げており、南地区に関しては全点ドット処理を原則としている。本報告における遺物の表記は、南地区に関して大グリッド単位で表記してある。つまり、F 2 J 2といったアルファベットと1桁の数字の組み合わせによる4桁の英数字で表記した。

発掘経過 発掘調査はこのグリッドを基本として、北地点、東地点、南地点の順に行った。第一次調査と表土除去は平成元年度に行っており、平成2年4月から本調査を開始した。以下、経過を述べる。



第1図 グリッド呼称図

4月 初旬より北地区から発掘調査を開始する。中旬まで遺構確認を行い、調査区北側より遺構番号を順次付け、掘り始める。奈良時代の住居跡である1～4号住居跡、縄文時代の後期の住居跡である5号住居跡の全てについて、調査を開始する。また、南地区の包含層遺物を、全点ドット処理でとりあげを開始する。

5月 中旬までに北地区の遺構を掘り終え、遺構の実測図とりを始める。遺構を掘り終えてから、東区の遺構確認を行い、掘り始める。縄文時代の前期の1号住居跡、弥生時代から奈良時代の2～8号住居跡を掘り始める。南地区では包含層の遺物とりあげを継続する。

6月 遺構図面を完了させ、北地区の調査を全て終了する。東地区では、遺構掘りを継続し、南地区では包含層の遺物とりあげを継続する。

7月 初旬に東地区の遺構掘りを終了し、中旬に図面とりを開始する。南地区では、包含層の遺物とりあげを継続するとともに、一部確認調査を開始し、縄文時代擦糸文期の第8～12号住居跡を掘り始める。

8月 東地区の調査を全て終了し、南地区を調査の主体とする。包含層遺物とりあげを継続しながらも、更に遺構確認を進め、縄文時代の第1号住居跡、第5～7号住居跡、弥生時代の第2～4号住居跡を掘り始める。

9月 調査を始めていた遺構を順次終了させ、道を隔てた南側の調査区の遺構確認を開始し、第13～15号住居跡を掘り始める。縄文時代の擦糸文期の住居跡が集中しているF1J1区を更に精査して包含層遺物をとりあげ、条痕文期の炉穴と土壙を掘り始める。

10月 初旬までには全ての遺構を掘り終え、中旬までに図面作成を終了させる。その後、遺跡全面の清掃を行い、航空撮影を行って、無事発掘調査を終了する。

(2) 整理作業

報告書刊行作業は平成4年4月から開始して、平成5年3月で終了した。整理作業は遺物班と図面班に分かれて開始した。まず、遺物班は4月～6月にかけて土器石器の接合を地区毎と遺構毎に分けて行い、7月と8月に土器の復元を行った。その間、図面班は原図の整理と第二原図の作成を行い、7月には遺構のトレースを終了し、版組みをほぼ完了した。

8月～9月は遺物の分類を行い、土器片の拓本取りと裏打ち、断面取りを中心にして行った。また、一部石器の実測も開始し、遺構図版は不備な点を修正しながら完成させた。

10月～12月は拓本の図版作りと、石器の実測に力を注いだ。土器の実測とトレース、図版組、拓本図の作成は11月にほぼ完了し、石器は11月に実測を完了させる。12月は石器のトレースと版組を終了させる。それらと併行して、本文の割り付けを行い、執筆を開始した。

1月に全ての原稿執筆を終了させ、報告書の印刷に入り、3月末に印刷を完了して報告書を刊行した。

(3) 発掘調査及び報告書刊行事業の組織

a. 発掘調査（平成2年度）

理事長	荒井 修二
副理事長	早川 智明
常務理事兼管理部長	古市 芳之
理事兼調査部長	吉川 國男

庶務・経理

庶務課長	高田 弘義
主査	松本 晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主事	本庄 朗人
主事	菊池 久
主事	斉藤 勝秀

発掘調査

理事兼調査部長	吉川 國男
調査部副部長	塩野 博
調査第4課長	鈴木 敏昭
主任調査員	金子 直行
調査員	川口 潤

b. 報告書作成作業（平成4年度）

理事長	荒井 修二
副理事長	早川 智明
常務理事兼管理部長	倉持 悦夫
理事兼調査部長	栗原 文蔵

庶務・経理

庶務課長	萩原 和夫
主査	贄田 清
主事	菊池 久
経理課長	関野 栄一
主任	江田 和美
主事	長滝美智子
主事	福田 昭美
主事	腰塚 雄二

整理

資料部長	中島 利治
資料部副部長兼	
資料整理第1課長	増田 逸朗
主任調査員	金子 直行

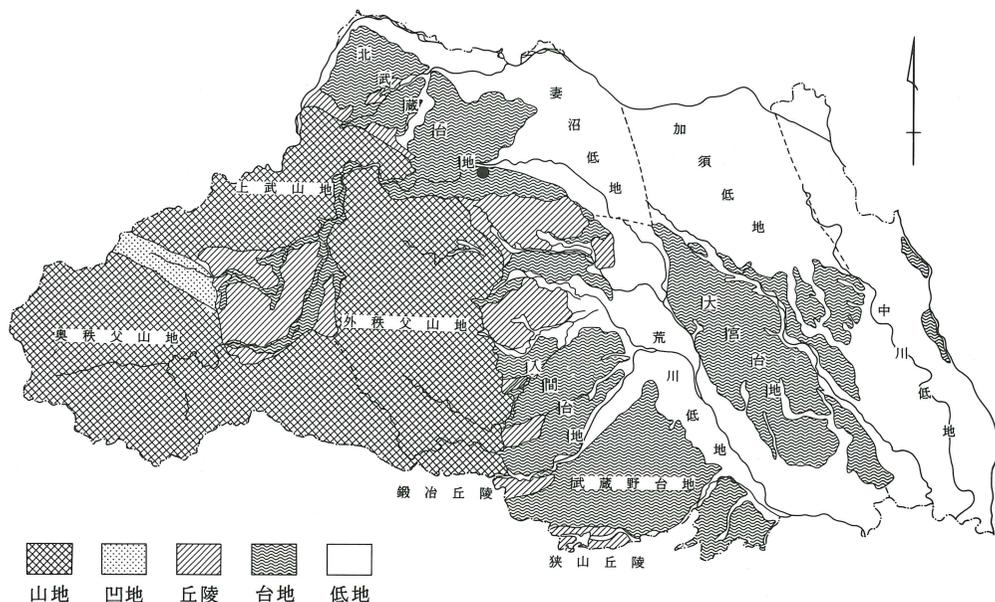


II. 遺跡の立地と環境

埼玉県のほぼ中央部を流れる荒川は雲取山に端を発し、狭隘な山間部を経て秩父盆地を貫流しながら北流し、さらに長瀨町付近で東へと流路を変更する。その後、山地部を経て、四反歩遺跡の存在する川本町付近で幾重もの河岸段丘を形成して台地と出会い、幾つもの大小河川を合流し、台地を侵食しながら下流に広範な沖積低地を形成しつつ、東京湾へと流れ込む。

川本町付近で荒川は東西方向に流れ川幅を増しており、四反歩遺跡はこの荒川右岸の江南台地のやや奥まった小支谷の左岸に存在する。遺跡の西側には吉野川が北東方向に流れるが、遺跡付近で北流し荒川へと流れ込んでいる。遺跡は吉野川と荒川の合流点から1.8km程南に位置し、吉野川へと開く小支谷の奥まった舌状台地上に存在する。周辺は樹枝状に入り組んだ浅い谷が開析されており、遺跡はその中でも南東に張り出した標高70m前後を測る舌状台地上に立地している。谷部からの比高差は約5m前後を測る。台地には南側、東側、北側からそれぞれ小さな谷が湾入し、遺跡は南地区、東地区、北地区に分割されている。

遺跡は、大里郡川本町大字本田字四反歩3003—1他に所在する。荒川右岸の川本町本田地区は遺跡が比較的多く、山林となっている地域でも未検出の遺跡が多く存在している。川本工業団地予定地内でも、新たに5箇所の遺跡が発見され、調査の結果旧石器時代から奈良時代の遺構遺物が検出されている。それぞれ報告書が刊行されているものもあることから、詳細はそちらに譲り、ここで



第2図 埼玉県の地形図



第3図 周辺の遺跡

川本町

江南町

- | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-------------|------------|
| 1. 四反歩遺跡 | 6. 権現堂北遺跡 | 11. 上本田遺跡 | 15. 荒神脇遺跡 | 20. 宮脇遺跡 | 25. 南方遺跡 | 30. 塩前遺跡 |
| 2. 竹ノ花遺跡 | 7. 権現堂遺跡 | 12. 焼谷遺跡 | 16. 天神山遺跡 | 21. 萩山南遺跡 | 26. 本田・東台遺跡 | 31. 板井永川遺跡 |
| 3. 白草遺跡 | 8. 万願寺遺跡 | 13. 春ヶ丘遺跡 | 17. 向原遺跡 | 22. 上前原遺跡 | 27. 切久保遺跡 | 32. 金山遺跡 |
| 4. 北篠場北遺跡 | 9. 船山遺跡 | 14. 沢口遺跡 | 18. 鹿島遺跡 | 23. 東原遺跡 | 28. 宝光寺北裏遺跡 | 33. 姥ヶ沢遺跡 |
| 5. 円阿弥遺跡 | 10. 山ノ腰遺跡 | | 19. 久保遺跡 | 24. 押出遺跡 | 29. 塩西遺跡 | |



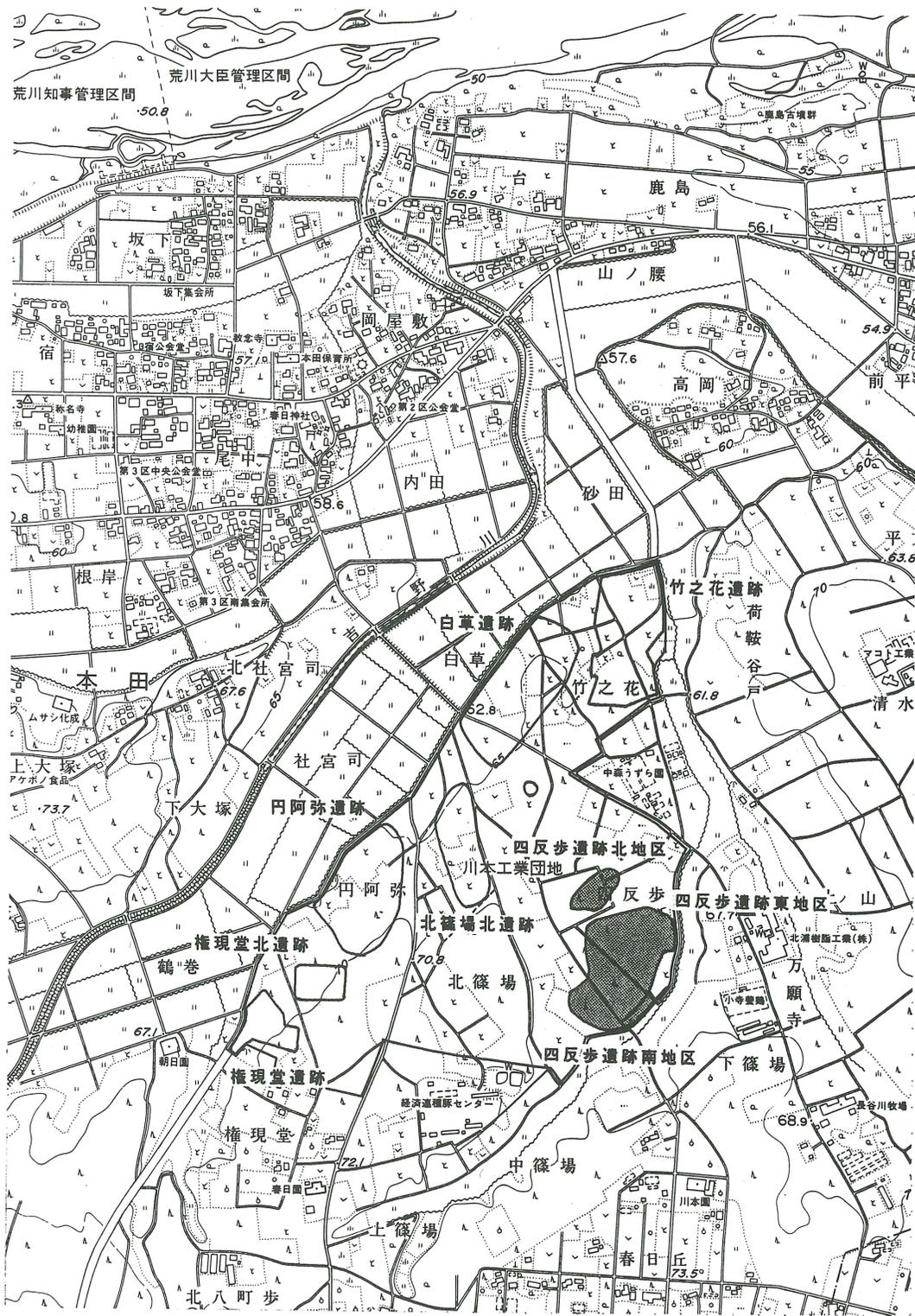
- | | | | |
|-----------|-----------|-------------|------------|
| 嵐山町 | 寄居町 | 花園町 | 熊谷市 |
| 34. 上耕地遺跡 | 38. 庚申塚遺跡 | 39. 台耕地遺跡 | 45. 三ヶ尻林遺跡 |
| 35. 神山遺跡 | | 40. 宮台遺跡 I | 46. 三ヶ尻遺跡 |
| 36. 宮下遺跡 | | 41. 宮台遺跡 II | 47. 万吉西浦遺跡 |
| 37. 日丸遺跡 | | 42. 下南原遺跡 | 48. 万吉下原遺跡 |
| | | 43. 西上遺跡 | |
| | | 44. 宮林遺跡 | |

では川本町周辺における縄文時代早期を中心とした歴史的な環境についてまとめてみたい。

四反歩遺跡からは旧石器時代の遺物は検出されていないが、縄文時代では草創期の石器群と、若干の土器が出土している。早期では遺跡の主体となる撚糸文期の集落が検出されており、他に沈線文期、条痕文期、前期の遺構が若干ではあるが存在している。

四反歩遺跡の周辺で草創期の遺跡は、花園町の宮林遺跡（44）が著名である。宮林遺跡からは爪形文系土器群と多縄文系土器群が竪穴住居跡から出土しており、草創期の多数の遺物が検出されている。なかには表裏縄文土器も含まれており、その編年の位置も検討の要素を多く含むが、四反歩遺跡からも表裏縄文土器が出土している。また、四反歩遺跡からは卓越した技術で製作された、草創期の石槍群が検出されており、東京都秋川市前田耕地遺跡から出土した石器群に近似した石器様相をもっている。今後、それらの草創期石槍群との比較検討の上からも、四反歩遺跡は貴重な遺跡になるものと思われる。

早期の撚糸文期の遺跡は近年発見例が増えつつあり、住居跡を検出した遺跡は先の宮林遺跡、江南町の立正大学熊谷校地内遺跡（18）等が挙げられる。宮林遺跡では夏島式期の竪穴式住居跡が1



第4図 遺跡周辺の地形図

軒、立正大学熊谷校地内遺跡では夏島式から稲荷台式期の3軒の住居跡が検出されている。

川本工業団地内遺跡では四反歩遺跡以外において、殆ど捺糸文土器を検出していない。そのため、四反歩遺跡が純粹に独立した遺跡であり、集落の存在や多量の出土遺物を考慮すると、捺糸文系土器群の各期を通じて拠点的な遺跡であったことが理解される。

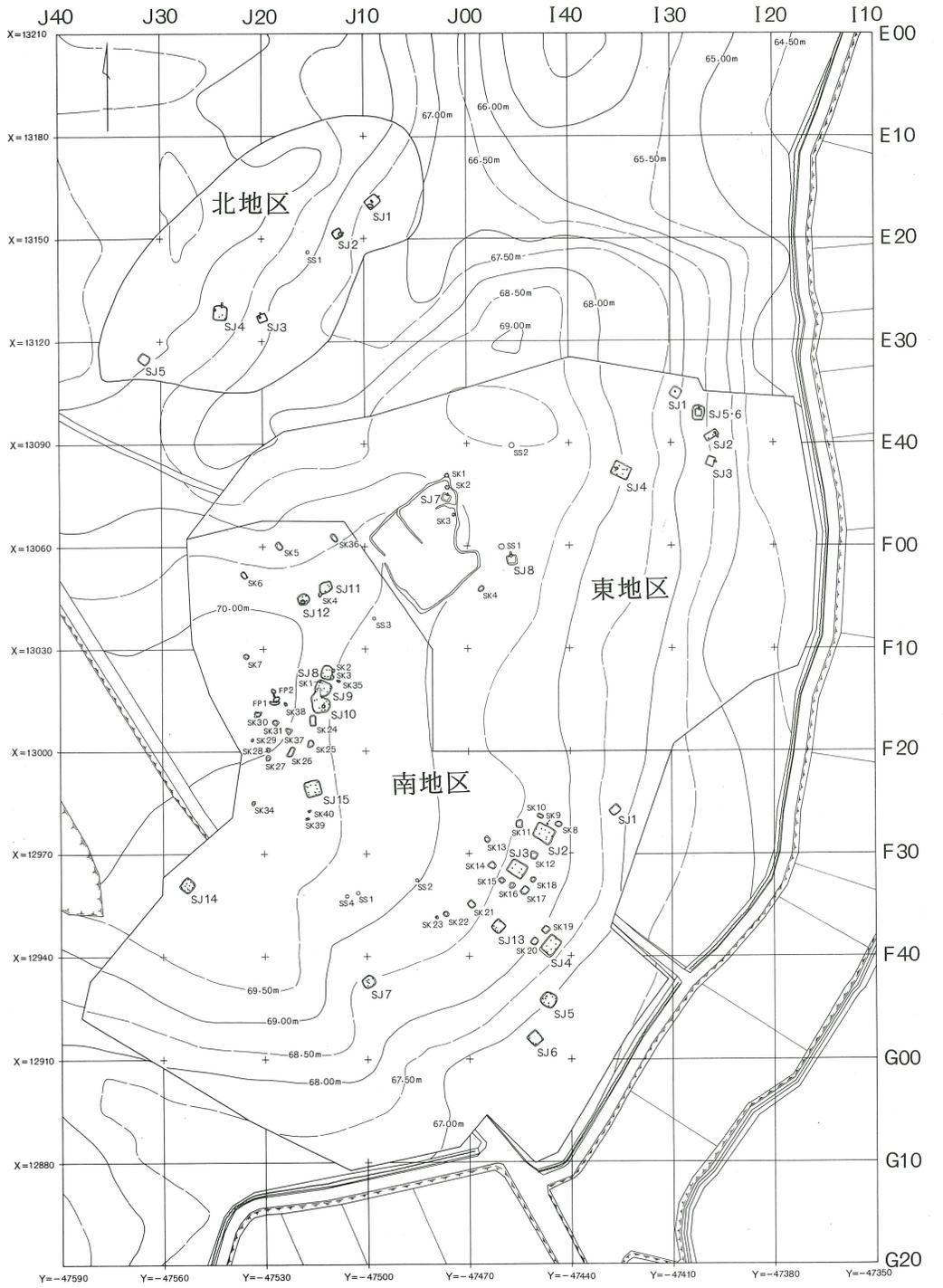
近隣で遺構は検出されないものの捺糸文土器を出土する遺跡は、井草式では宮林遺跡、熊谷市万吉下原遺跡(48)があり、井草Ⅰ・Ⅱ式を含む良好な土器群が検出されている。また、四反歩遺跡の対岸に存在する万願寺遺跡(8)でも採集資料ではあるが、井草式から稲荷台式の大形破片が出土している。遺跡の北方約1.5kmの所に、縄文時代各時期の遺物を出土した船山遺跡(9)が存在するが、捺糸文系土器の出土は極僅かである。川本工業団地関連遺跡の権現堂北遺跡(6)、焼谷遺跡(12)で、若干の夏島式、稲荷台式の捺糸文系土器群が出土している。しかし、捺糸文系土器群を主体とする遺跡はない。江南町の本田・東台遺跡(26)、上前原遺跡(22)からも良好な捺糸文系土器群を中心とした早期の土器群が出土している。捺糸文系土器群最終末の東山式土器は宮林遺跡でやや纏まって出土している以外、殆ど出土例が無く、隣接する白草遺跡(3)で2、3点出土している程度である。

条痕文期は遺跡例を増し、捺糸文系土器群を出土する遺跡では殆どの遺跡で条痕文系土器群が出土している。白草遺跡では炉穴・土壇が環状に配置された遺構群が2グループ検出され、四反歩遺跡でも同様な遺構が1グループ検出されている。特徴的な遺構だけに、今後注目されるものとなる。条痕文期の良好な遺跡として船山遺跡が挙げられ、早期末葉から前期初頭の良好な土器群が出土している。

前期になると集落遺跡が目立ち、この地域では黒浜式期では山間丘陵部を中心に遺跡が展開され諸磯式期になってやや台地を下る傾向にある。荒川の対岸である榎引台地南縁には大きな集落遺跡が存在するとともに、江南台地北縁では本遺跡や円阿弥遺跡(5)に代表されるような小さな集落が点在している。川本町、江南町付近では早期の遺跡は江南台地北縁地域に多く、前期、中期の大集落は榎引台地の南縁に多いことが特徴的である。今後、発掘調査例の増加にともなって、地域間における細かな遺跡動態が把握され、縄文期のテリトリー問題を解決する良好な資料を提供する地域になるものと期待される。

〔参考文献〕

- 利根川章彦 1991「竹之花・下大塚・円阿弥遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第105集
磯崎 一 1992「白草遺跡Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第118集
村松 篤 1991「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」川本町発掘調査報告書第5集
小林 茂他 1989「川本町万願寺出土の遺物」埼玉考古第25号
新井 端他 1988「本田・東台・上前原」江南町文化財調査報告第8集
宮井 英一 1985「大林Ⅰ・Ⅱ・宮林・下南原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第50集
谷井 彪他 1980「船山遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告第9集



第5図 遺跡全体図

III. 遺跡の概要

四反歩遺跡は当初3箇所の遺物散布地が確認されており、それぞれ南・東・北の遺跡名が仮称として付けられていた。しかし、表土除去後の遺構確認の結果、それぞれの遺跡は有機的に関連しており、特に南遺跡と東遺跡は境界が不明瞭で、それぞれを単独の遺跡として扱うに不都合をきたしてきた。調査はそれぞれの遺跡単位で行ってきたが、本報告を刊行するにあたりそれぞれを関連する一つの遺跡群と捉え、単独の遺跡としてではなく、纏まりのある地区として把握した。

四反歩遺跡は大里郡川本町大字本田字四反歩3003—1他に所在し、総面積約3万㎡余りで、南地区が1万㎡、東地区が1万6千㎡、北地区が4千5百㎡である。台地は南東に張り出した舌状台地上にあり、北地区と南地区の間に北から、南地区と東地区との間に東から、南地区の境が南から湾入する浅い谷で区画され、基部を同じくして「楓」状に先端部が分岐する台地の形状を呈する。基本的な層序は第6図に示したごとく、I層表土、II層暗褐色土、III層黄褐色土でソフト化したローム、IV層明褐色土で硬質のローム、V層軟質のロームでA Tがピークとなる層、VI層暗茶褐色土で非常に硬く締まったロームとなる。

南地区 東地区との境界が不明瞭であるが、中央部に入り込む浅い谷によって両者を分けた。南地区では縄文時代から弥生時代の遺構が検出された。

縄文時代では遺構は検出されなかったものの、草創期の表裏縄文土器と石槍、尖頭器、石斧等の石器群が出土した。それぞれは纏まりをもって出土しているわけではなく、遺構確認時に出土しているものが多い。早期の撚糸文期では住居跡8軒、土壇6基、集石遺構4基が検出された。沈線文期では住居跡1軒、土壇1基である。条痕文期では炉穴2基、土壇11基が検出された。前期では黒浜式期の住居跡1軒、諸磯a式期の住居跡2軒が検出されている。遺物は撚糸文期の土器石器が2万点以上出土している。

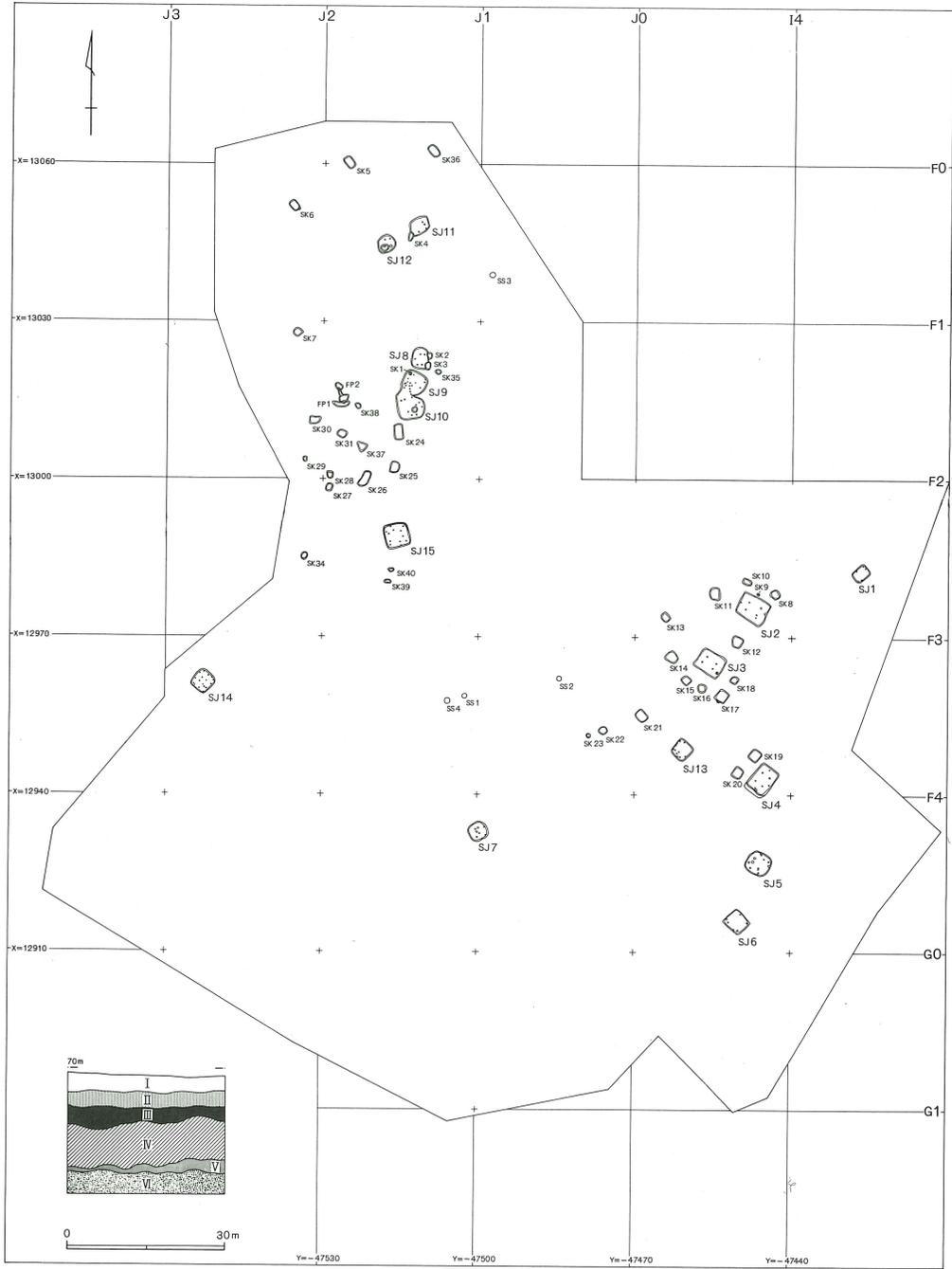
弥生時代では後期吉ヶ谷式期の住居跡3軒、周辺の住居跡に付属する土壇15基が検出されている。遺構からの出土遺物は少ない。他に、時期不詳の土壇5基が存在する。

東地区 北地区との境にやや深い谷が存在する。縄文時代では前期諸磯b式期の住居跡1軒、早期の集石土壇2基が、弥生時代では吉ヶ谷式期の住居跡1軒が検出されている。縄文時代の遺物では、撚糸文系土器群とともに、条痕文系土器群の野島式土器が比較的纏まって出土した。

遺跡の主体は奈良時代の遺構で、重複合わせて住居跡6軒、土壇4基、道跡1基である。住居跡は東西に2群の纏まりがあり、若干時期差があるものと思われる。西の一群は、住居跡と土壇が道跡で繋がれており、道は2、3重巡り、自己完結しているようである。

北地区 3地区の中では一番独立した地形を呈するが、縄文時代早期の集石土壇1基、後期堀之内II式期の住居跡1軒、奈良時代の住居跡4軒が検出された。堀之内II式期の住居跡は、石囲い埋甕炉を持ち、石皿を立てて埋設し埋甕との境にしている。奈良時代の住居跡は北東からの谷に沿って南斜面に列状に存在しているが、カマドの方向が異なる2群がある。出土遺物は、縄文時代の撚糸文系土器群、条痕文系土器群が多い。他に、礫、剥片類も多く出土している。

四反步遺跡南地区



第 6 图 四反步遺跡南地区全体图

IV. 四反歩遺跡南地区の調査

1. 縄文時代の遺構と遺物

四反歩遺跡南地区の縄文時代では、早期の撚糸文期を中心として、沈線文期、条痕文期の住居跡、土壇等が検出されている他、前期の住居跡も検出されている。

早期の遺構としては、撚糸文期の住居跡8軒、土壇6基、集石遺構4基が検出されている。撚糸文期の住居跡はF0J1区～F1J1区にかけて5軒が集中して存在し、他は比較的散在する傾向にある。土壇も住居跡の周辺に存在する傾向にある。集石遺構は下部に土壇を伴わないものと思われ、住居跡とは若干離れた場所に位置している。住居跡の所属時期は夏島式期～稻荷台式期にかけてと、東山式期である。遺物は土器片約12000点、石器類約8000点が出土しており、住居跡群の周辺と、その中間部分に集中する傾向にある。調査範囲が台地の大半を占めているため、実質的に撚糸文期の集落のほぼ全体を調査したことになる。

沈線文期では住居跡1軒と土壇1期を検出した。撚糸文期の遺構とは占地を異にしている。条痕文期ではF1J1区に遺構が集中しており、炉穴2基、土壇11基を検出した。炉穴、土壇は環状に配置されており、ほぼ同時期と認定される。

前期では黒浜式期1軒、諸磯式期2軒の住居跡が検出されている。黒浜式期の住居跡は諸磯a式期に建て替えられており、炉体土器が重複するとともに、柱穴も配置を変えられている。

(1) 草創期の遺物

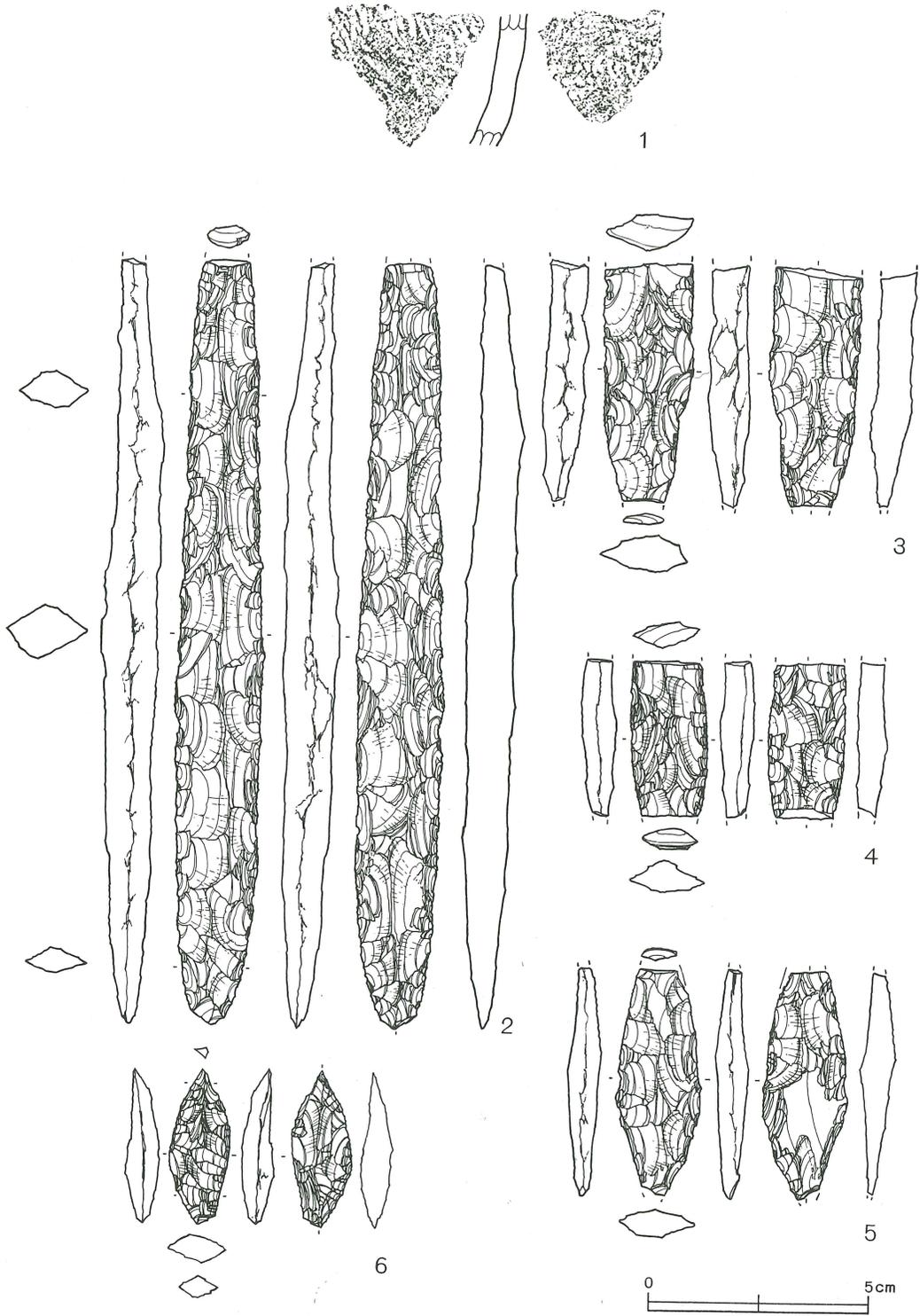
南地区では遺構は検出されていないものの、草創期の貴重な遺物が出土している。まとめて集中する等の特徴的な出土傾向を示さず、遺跡全体から散在的に検出されている。特に、F0J1区からF1J1区はやや出土例が多い。

土器 (第7図1)

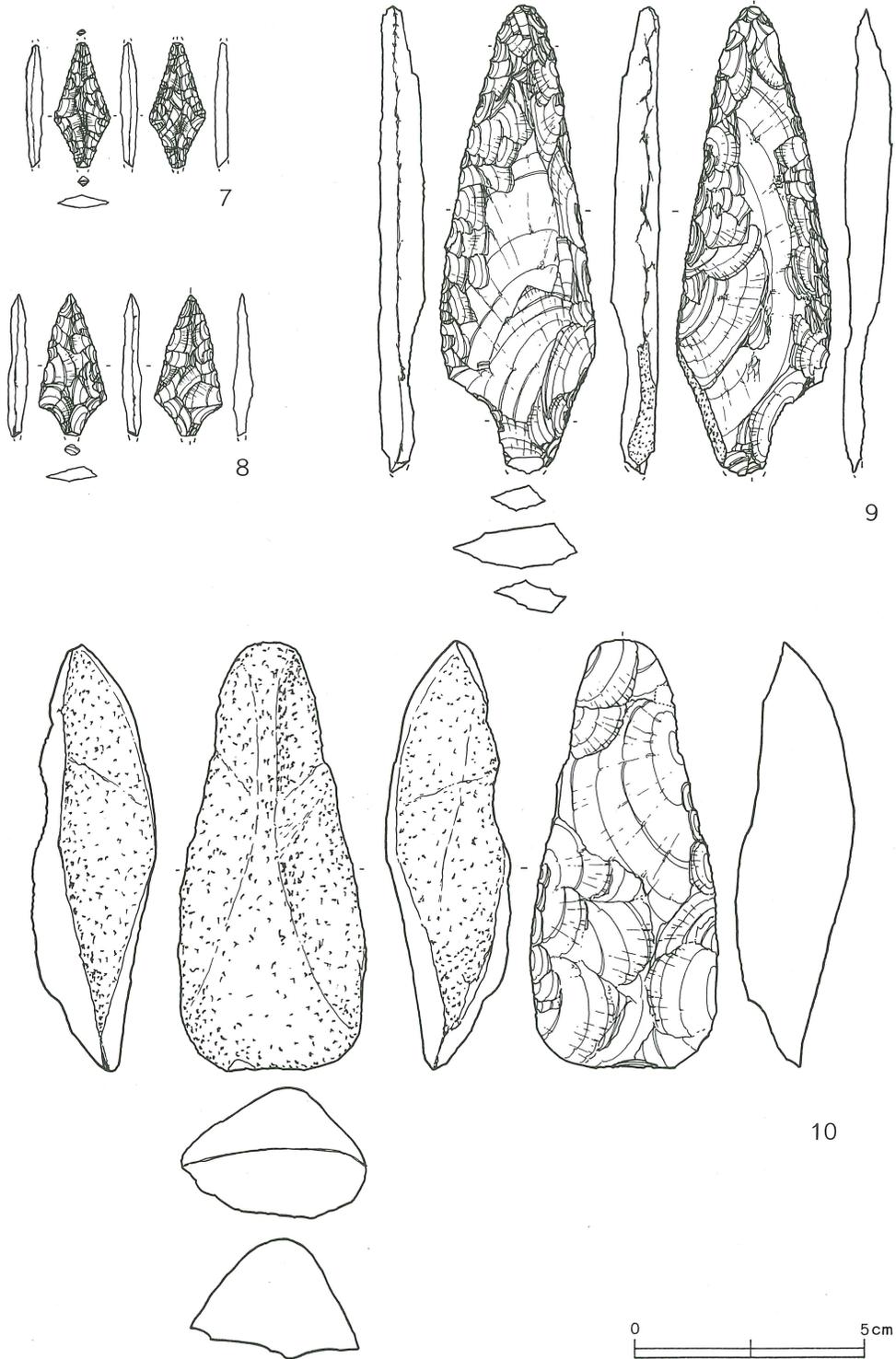
1点のみ出土した。表裏縄文土器である。内外面ともに単節RLを施文しており、内面では施文の末端が窺える。器面に比較的凹凸が残され、器形のコーナー的な屈曲が存在し草創期的な様相を呈している。暗赤褐色を呈し、緻密な胎土である。

石器 (第7図2～6、第8図7～10)

石器は石槍4点、有舌尖頭器3点、尖頭器1点、石槍の未製品1、石斧1点が出土している。石槍は先端が欠損するものの2、5の様な大小の2器種があり、切断された3、4もある。2は長さ17.1cm、幅2cmを測る秀品である。尖頭器は5が木葉形を呈し、6、7が有舌状を呈する。6は赤色のチャート素材とする。石斧は神子柴状を呈するが、甲高の正面には調整剝離は施されず、自然面の形状をそのまま利用し、背面に左右からの調整剝離を施して平坦面を作出している。器面の風化が激しいが、刃部に磨きが施されている可能性もある。



第7図 草創期の遺物 (1)



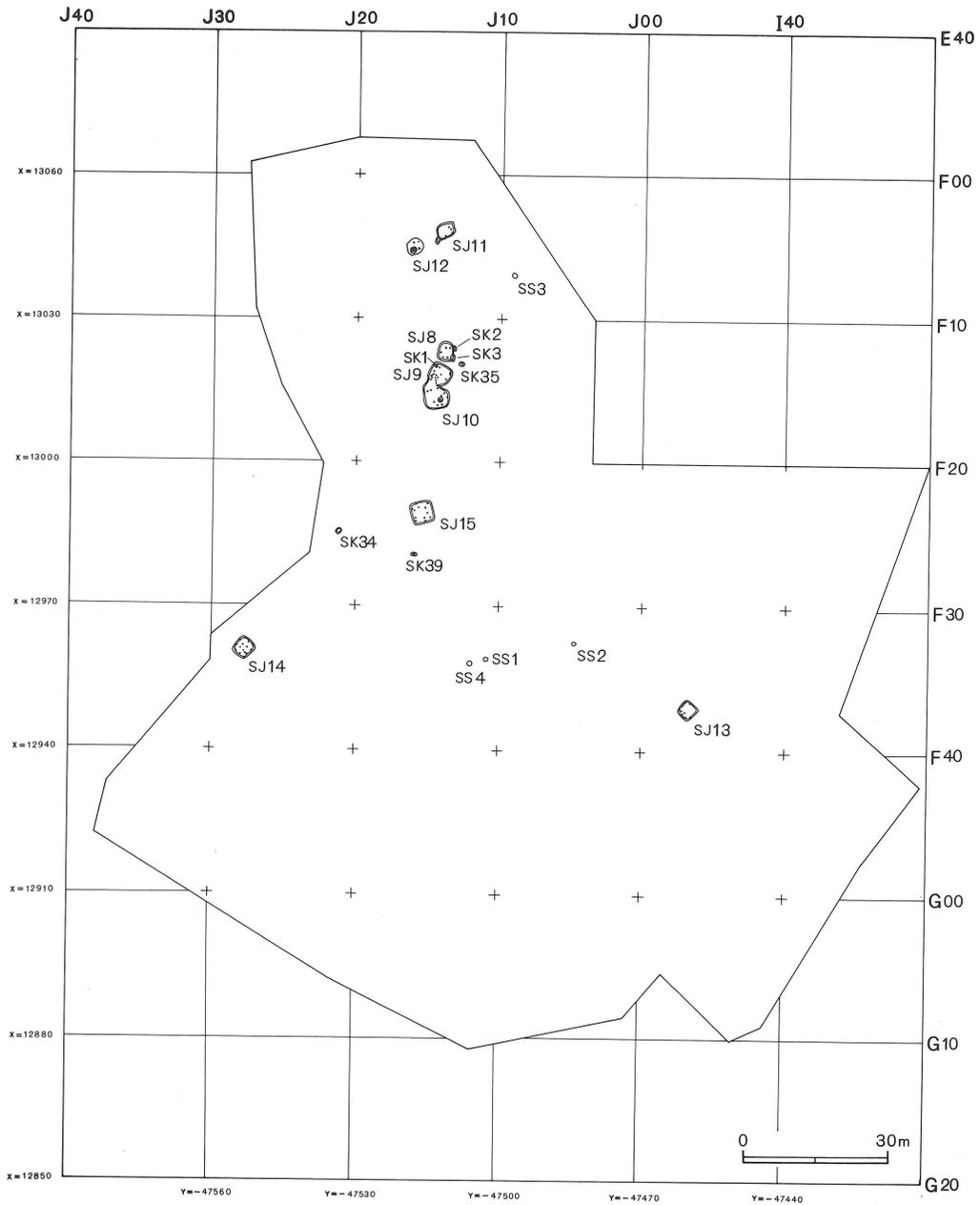
第8図 草創期の遺物 (2)

四反歩遺跡南地区

(2) 撚糸文期の遺構と遺物

第8号住居跡 (第10図～第13図)

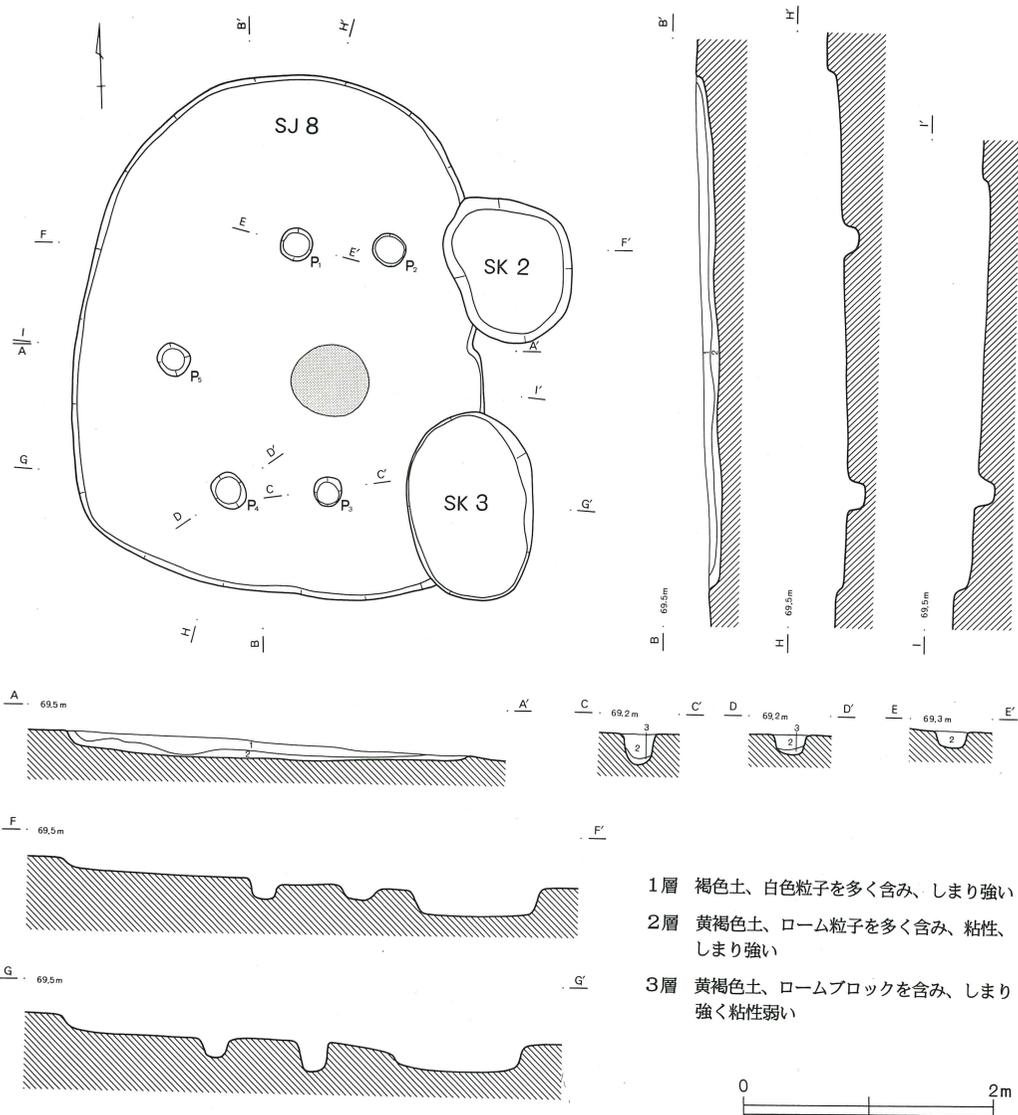
F1J1区に位置する。撚糸文期の第2号、第3号土壇と切り合うが、土壇のほうが新しい。住居跡のプランは南北に長軸をとる不整の楕円形を呈し、長径4.16m、短径3.28m、深さ約15cmを測



第9図 撚糸文期の遺構

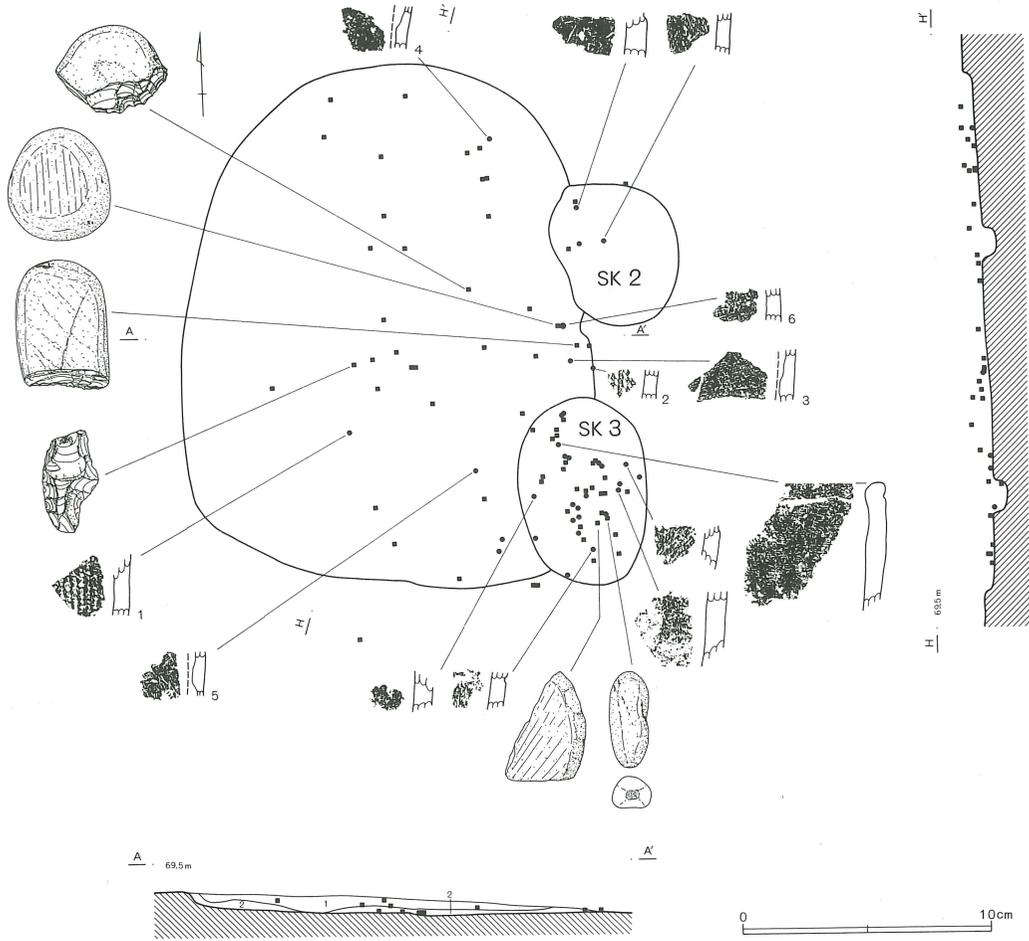
る。床面は東南方向に若干傾斜するが、比較的平坦面で、壁の立ち上りは緩く皿状を呈している。炉は地床炉であり、中央部やや東寄りに位置する。炉は焼土を残す程焼けてはおらず、焼土粒子と炭化物が集中している程度である。柱穴は5本検出されたが、炉を囲み住居跡の中央部に配置されており、深さはP 1 = 14cm、P 2 = 10cm、P 3 = 28cm、P 4 = 16cm、P 5 = 15cmを測る。覆土は、1層が比較的しまりが強い褐色土で、白色の粒子を多く含んでる。2層は1層よりしまりは無いが粘性の強い黄褐色土で、ローム粒子を多量に含む。また、若干の炭化物も含まれていた。第2号、第3号土層とはプラン確認時に既に切り合い関係が判然としていた。

遺物は53点出土しており、土器の細片が11点、石器が42点である。出土状態は、炉を中心にしてまんべんなく分布していた。土器は細片のため型式帰属の判断が困難なものも多く、中でも良



第10図 第8号住居跡

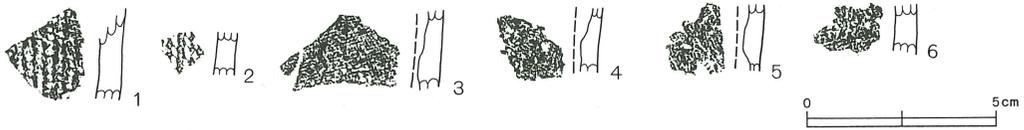
四反歩遺跡南地区



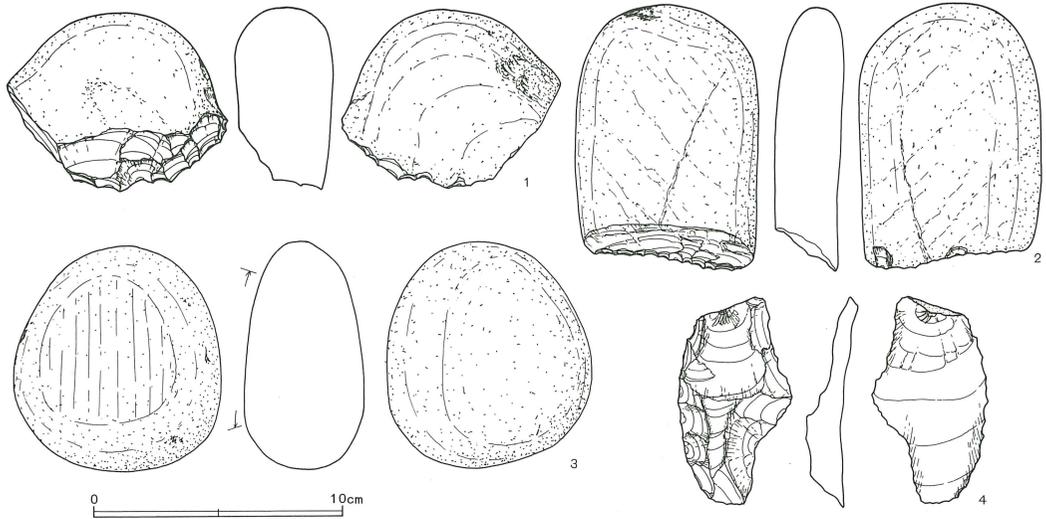
第11図 第8号住遺物分布図

好なものを第12図に示した。1は比較的粒の細かい縄文LRを施文し、条が縦走する。器壁は6mm前後を測り、胎土に白色細砂粒を多く含んでいる。色調は明褐色を呈する。2は撚糸Rを施文する細片である。撚糸文は深く明瞭に押捺されており、比較的細い撚糸文であるが、条の間隔がやや開いている。器壁は6mm前後を測り、細砂粒を少量含み、赤褐色を呈する。3～6は無文土器で、胎土に暗赤褐色の細砂粒を多く含み、白色粒子も若干含まれる。器面が丁寧に研磨されており、焼成が良く、赤褐色を呈する堅緻な土器である。1、2は夏島式から稻荷台式に相当すると思われるが、3～6は明らかに東山式である。重複する土壌が東山式期のものであるから、住居跡はそれ以前となるが、出土遺物からでは判然としない。有文土器が殆ど出土していないことから、住居跡は東山式期の所産と推定される。

石器の製品は図示したものが全てである。他は殆どが破碎された礫で、少量の剥片類が出土している。1、2は礫器である。1は比較的厚くて丸い礫を素材とし、片面からの調整剥離で刃部を作出しており、刃部は2側縁加工に近い丸い形状を呈している。刃部の剥離角度は部分的には垂直に



第12図 第8号住出土土器



第13図 第8号住出土石器

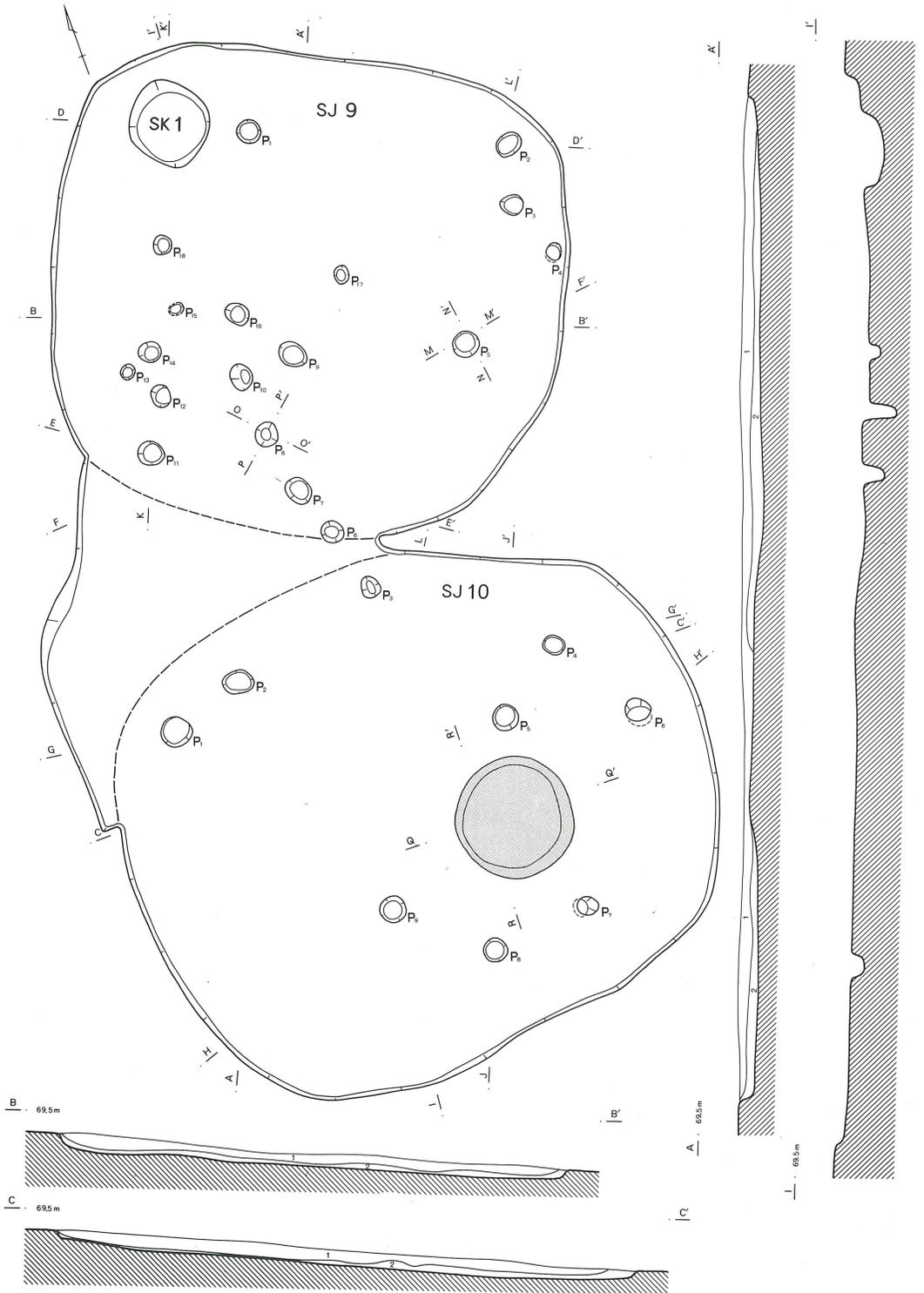
近い角度を持つ。2は扁平の長楕円礫を素材としており、長軸の一端を刃部に加工している。刃部は1回の大きな剥離で成形し、細かな調整剥離を施して刃部を整えており、鋭い刃部を備えている。3は拳大の大きさの磨石で、平坦面のみを使用している。4はチャート製の縦長剥片である。石器としての形状は整えられていないが、搔器として使用された可能性もある。

第9・10号住居跡 (第14図～第20図)

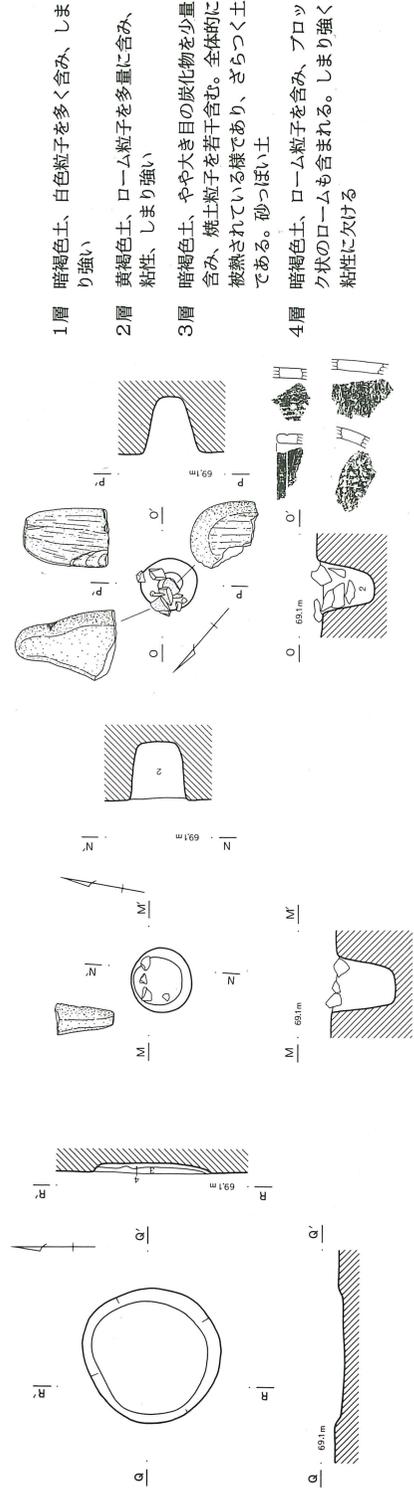
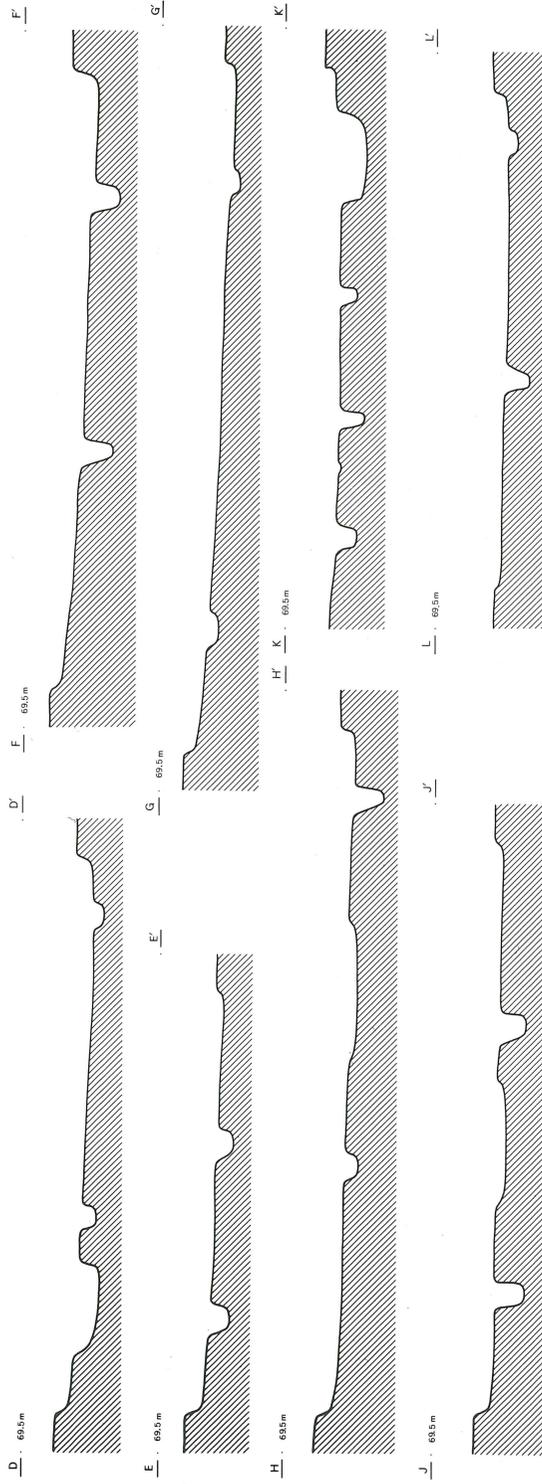
F1J1区に位置する。第1号土壌と重複するが、住居跡の方が新しい。住居跡は第8号住居跡の南側に、およそ50cm離れて接する様に位置する。第9・10号住居跡は一部重複するため、全体のプランが不明瞭である。

第9号住居跡は東西に長軸をとる隅丸長方形もしくは楕円形を呈し、長径4.76m、短径4.40mを測る。深さは深い部分で約25cm前後を測り、浅い部分で約15cmを測る。床面は凹凸が認められ、東南方向へ若干傾斜する。柱穴は18本検出されており、P1=12cm、P2=9cm、P3=9cm、P4=17cm、P5=23cm、P6=12cm、P7=14cm、P8=24cm、P9=9cm、P10=23cm、P11=17cm、P12=14cm、P13=27cm、P14=20cm、P15=25cm、P16=9cm、P17=19cm、P18=14cmを測るが、配置は規則性がなく不揃いである。Pit5、Pit8からは遺物が出土している。炉は検出できなかった。

第10号住居跡は第9号住居跡と同様に東西に長軸をとり、隅丸長方形か長楕円形を呈する。長径

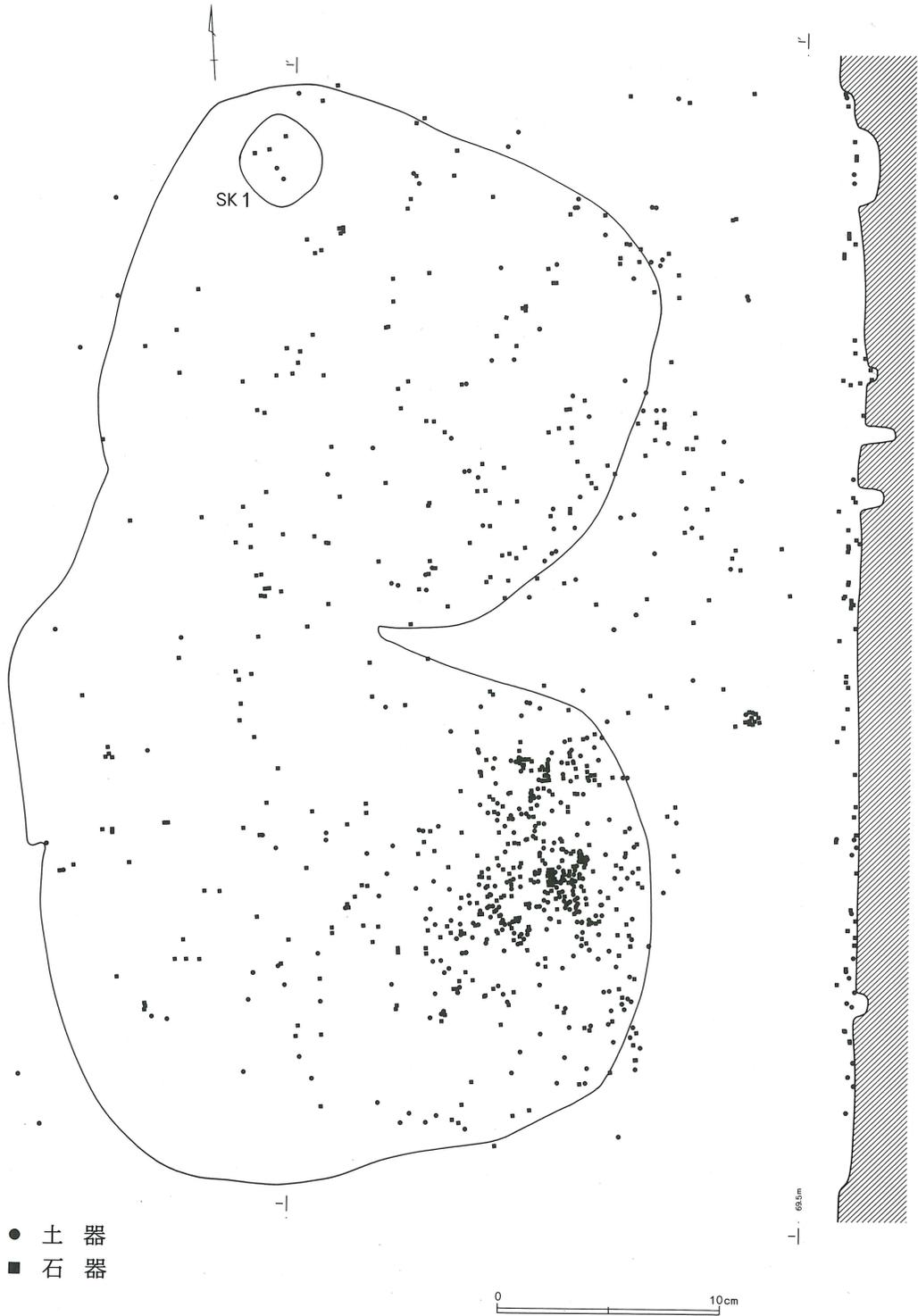


第14图 第9・10号住居跡

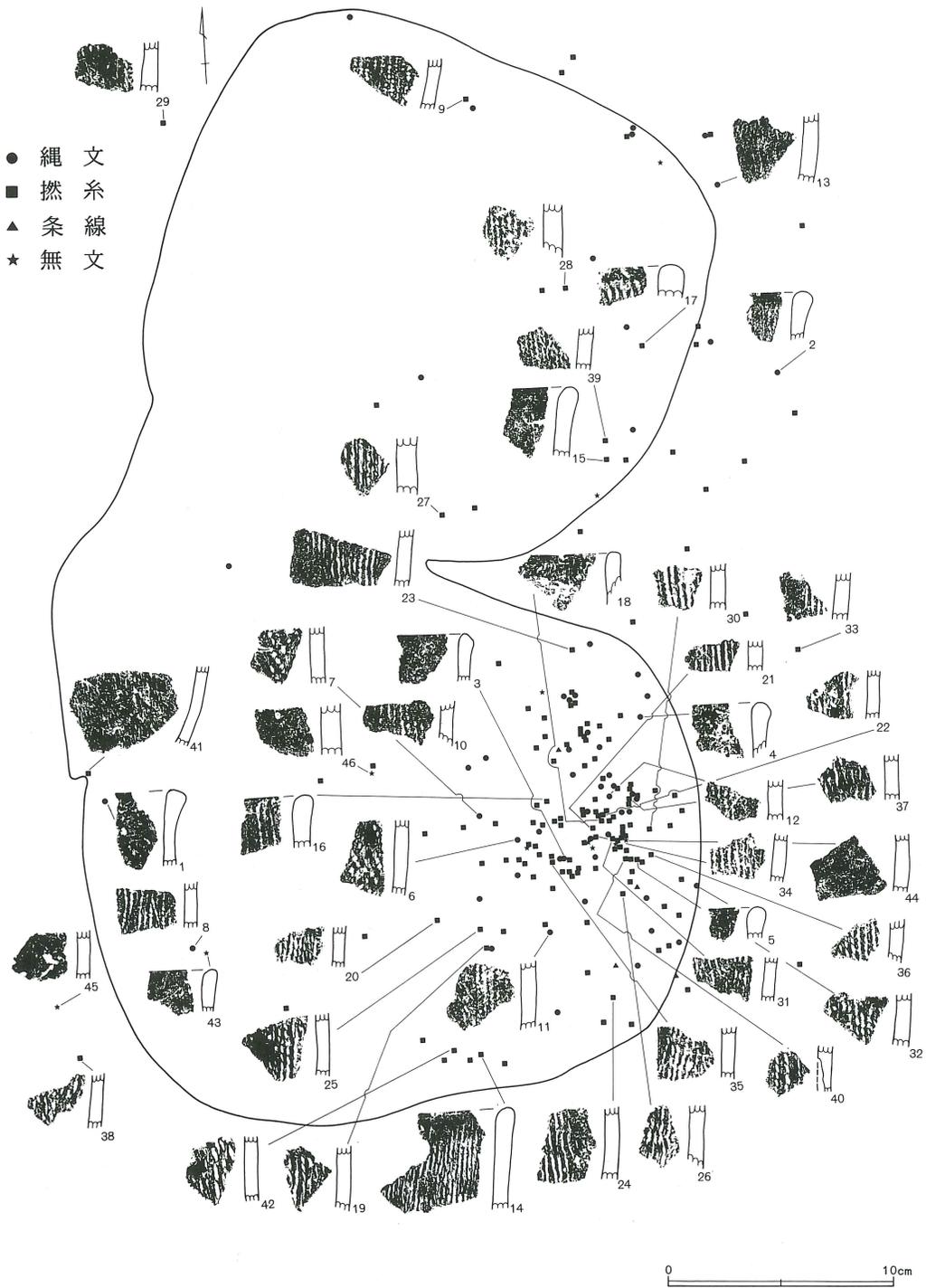


- 1層 暗褐色土、白色粒子を多く含み、しまり強い
- 2層 黄褐色土、ローム粒子を多量に含み、粘性、しまり強い
- 3層 暗褐色土、やや大き目の炭化物を少量含み、焼土粒子を若干含む。全体的に被熱されている様であり、さらつく土である。砂っぽい
- 4層 暗褐色土、ローム粒子を含み、ブロック状のロームも含まれる。しまり強く粘性に欠ける

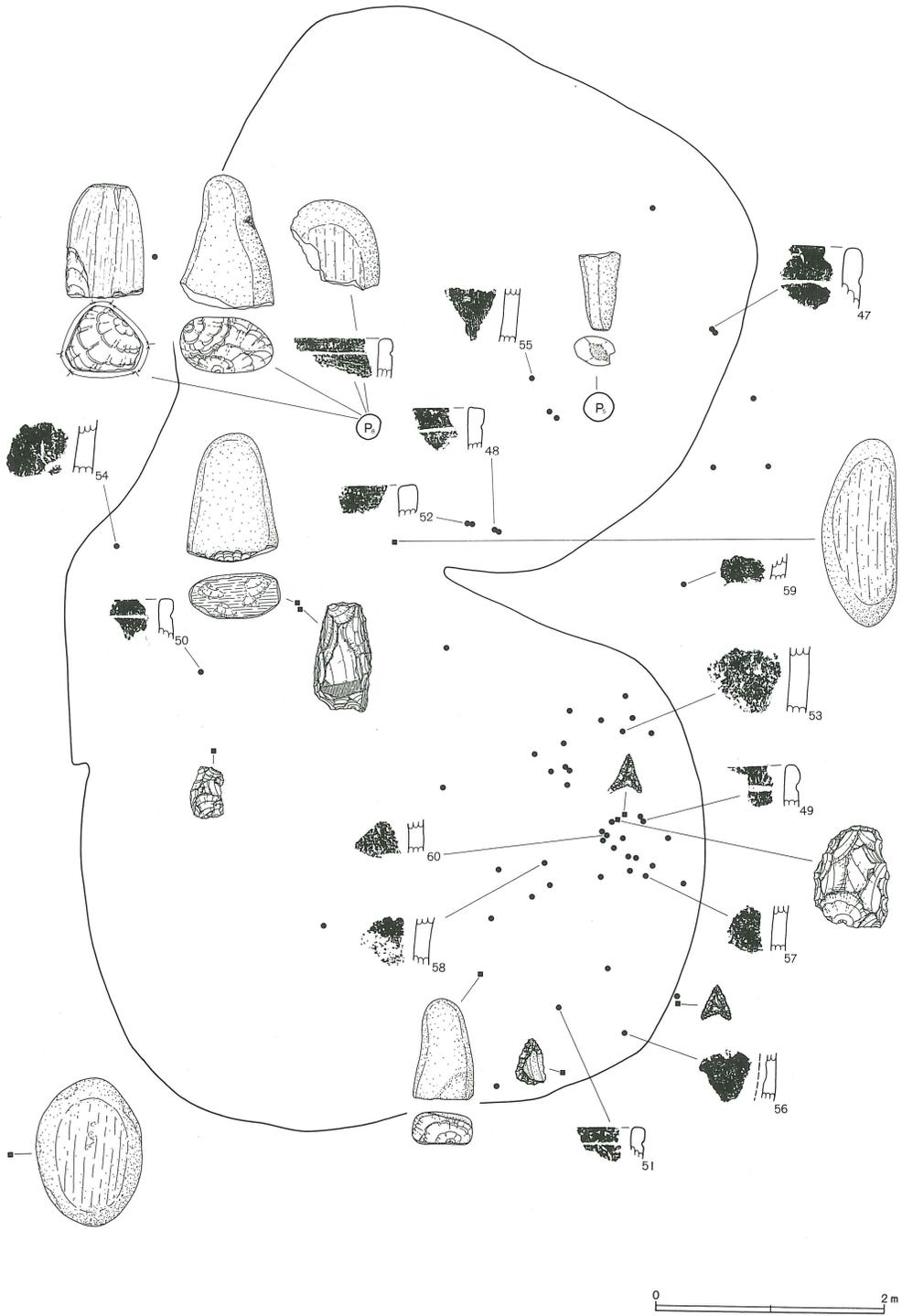




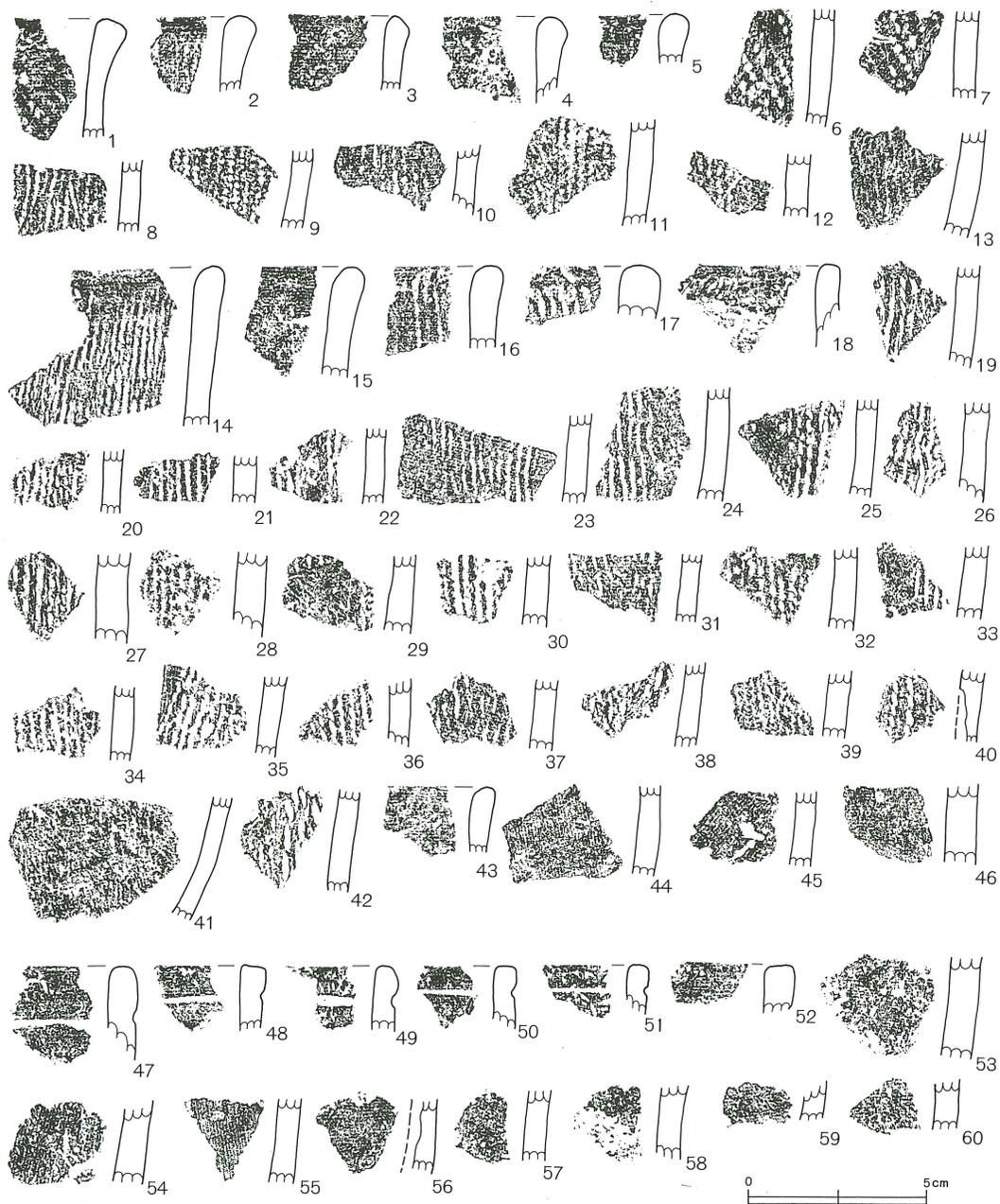
第15図 第9・10号住遺物分布図 (1)



第16図 第9・10号住遺物分布図 (2)



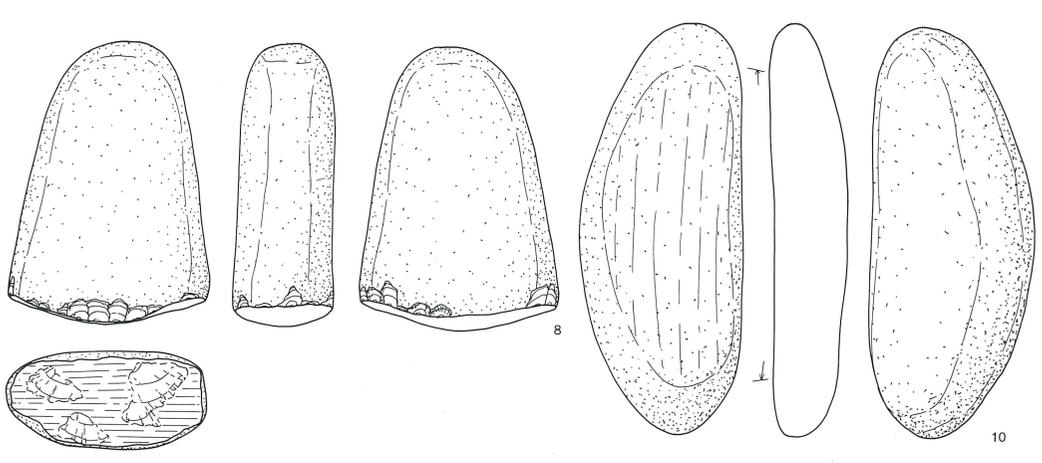
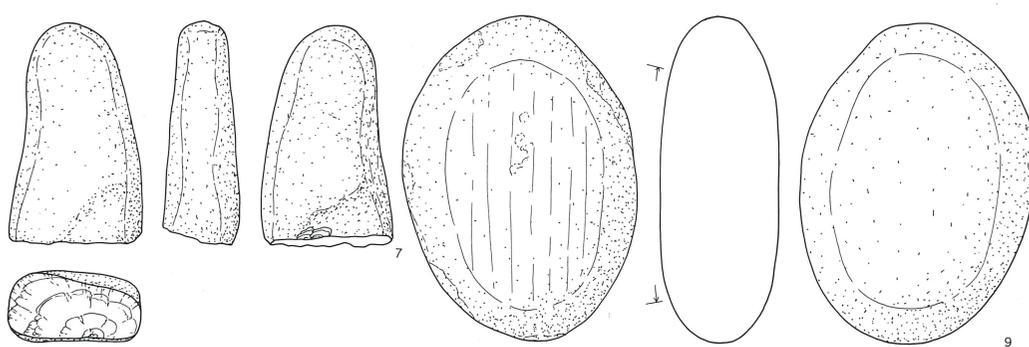
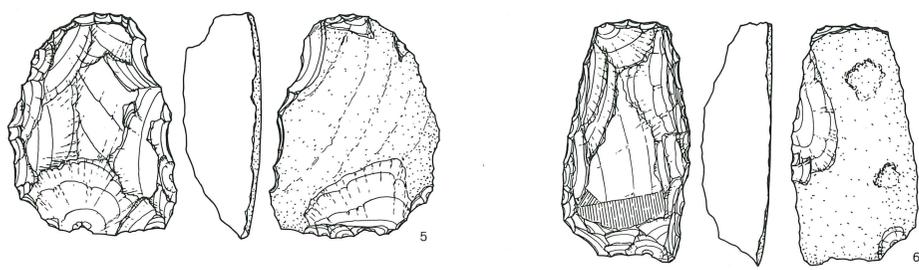
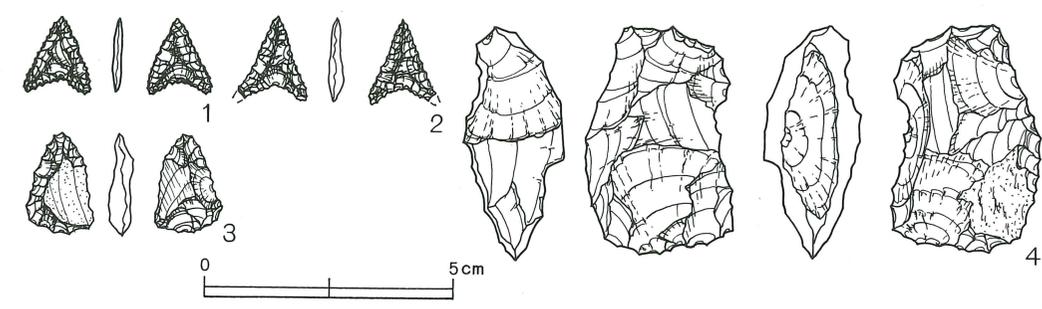
第17図 第9・10号住遺物分布図 (3)



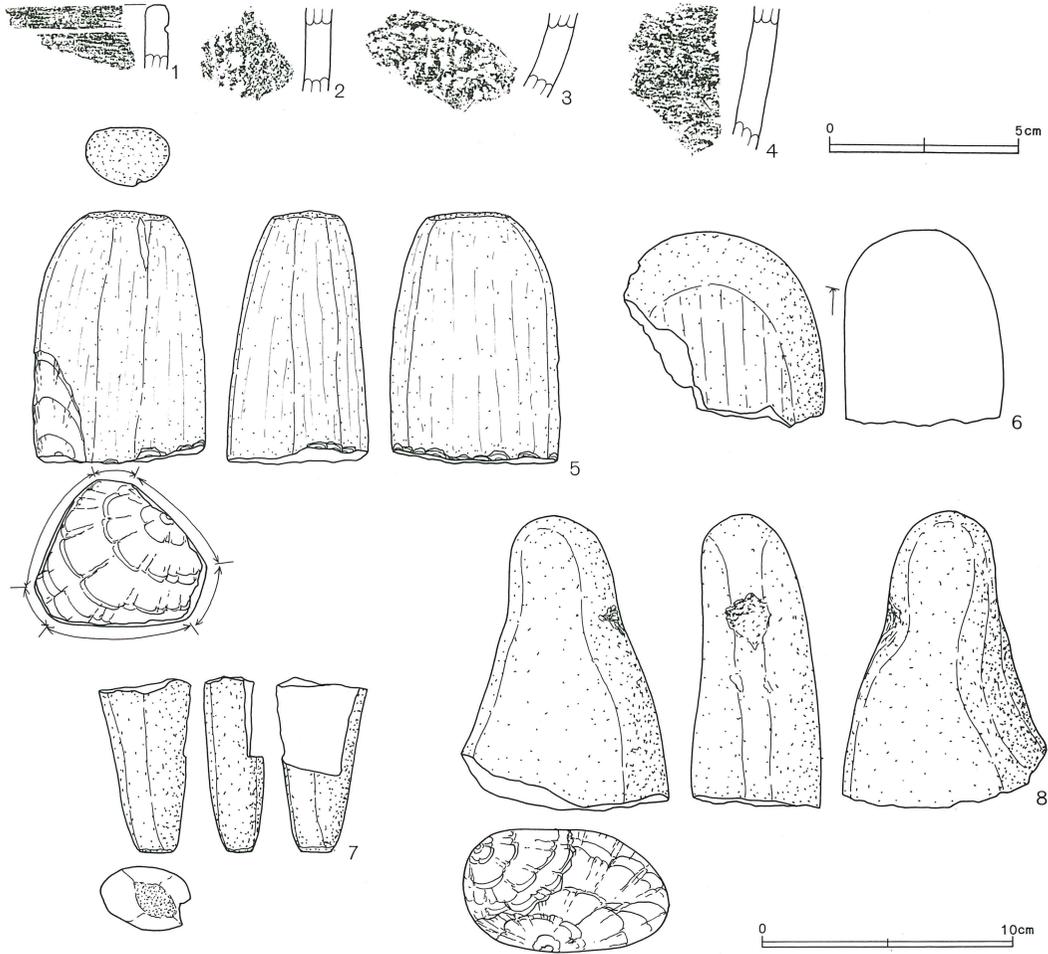
第18図 第9・10号住出土土器

5.48m、短径4.62m、深さ15cm前後を測る。床面には凹凸が認められ、東方向に緩く傾斜している。柱穴は9本検出されており、P 1 = 8cm、P 2 = 11cm、P 3 = 19cm、P 4 = 6cm、P 5 = 20cm、P 6 = 24cm、P 7 = 48cm、P 8 = 24cm、P 9 = 12cmを測る。およそ炉を囲む様に配置されている。炉は住居跡の中央部よりやや東に位置し、径1m余りのほぼ円形を呈する。地面が赤色化する程被熱しておらず、焼土が若干と炭化物が散布している程度である。住居跡の覆土は第9号住居跡と殆

四反步遺跡南地区



第19图 第9・10号住出土石器



第20図 第9号住 Pit 出土遺物

ど同一で変化なく、切り合い関係は不明であった。1層はしまりのある明褐色土で、白色粒子を多く含んでいる。2層はローム粒子を多量に含む黄褐色土である。

遺物は両層から出土しており、第10号住居跡では炉を中心として分布する傾向にある。遺物は両住居跡合わせて総数865点出土しており、土器391点、石器474点であった。土器は縄文施文、捺糸文施文、条線文施文、無文土器と東山式土器が出土している。第9号住居跡は有文土器と東山式土器が出土しているが、柱穴から東山式土器が出土していることから、東山式期所産と把握される。また、第10号住居跡も両者が出土しているが、夏島式新期所産と捉えられる。

第9号住居跡の Pit からの出土遺物(第20図)は、Pit 5からは土器4点(1~4)と、石器3点(5、6、8)、Pit 8からは石器が1点(7)出土している。1は口縁部下に1本の沈線文を巡らせる東山式土器であり、角のとれた角頭状の口唇部を呈し、内彎気味に立つ。2は白色粒子を多く含み、捺糸Rを施す。3は底部付近の破片で、原体は不明瞭であるが縄文を施文する。4は条痕文系土器であり、繊維を若干含む。5、8はスタンプ形石器で、5は磨石を転用している。6は欠損す

四反歩遺跡南地区

る磨石である。7は欠損しているが、長礫の端部を使用した磨石である。

覆土出土土器（第18図）は全て撚糸文系土器群で、1～13が縄文施文土器、14～42が撚糸文施文土器、43～46が無文土器で、47～60が東山式土器である。

1～5は肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、1、2は縄文施文後に口唇部を撫でて成形するものであり、3は口唇外端部に強い成形を施す。1は口唇部が一部剥落しており、その痕跡から、板状の口縁部に粘土を丸く被せて肥厚させているのが理解され、一部隙間が存在している。3～5は口唇部を整形した後に、口唇部下の口縁部から縄文を施文するものである。縄文は条を垂下する様斜位に施文するが、10～13の様に器面がかなり湿っている状態で施文するものがあるため、その後器面が撫でられた様な状態になり不鮮明となるものがある。原体は細く硬いものが一般的であるが、節よりも繊維痕が目立つものが多い。6、7は同一個体で、比較的太い原体を使用している。原体は不明なもの以外全てRLである。殆どの破片が、白色粒子と細砂粒を多く含むが、緻密で堅緻な胎土である。色調は明るい褐色を呈するものが多い。

14は口唇部があまり肥厚せず、内削状を呈し、やや開く器形を呈する。撚糸文は口唇部を整形した後に施文し、口唇からやや間隔を開けて施文を始めている。15は口唇部が肥厚するが、撚糸施文は14と共通する手法である。16、17は口唇部が若干肥厚して開く器形を呈し、口唇直下から施文した後、口唇部を整形している様である。撚糸文は41が比較的細密であるが、他は細目の原体をやや間隔を開けて絡めて施文するものも多く、23～25の様に帯状に施文するものもある。42は太くて撚りの緩い原体である。

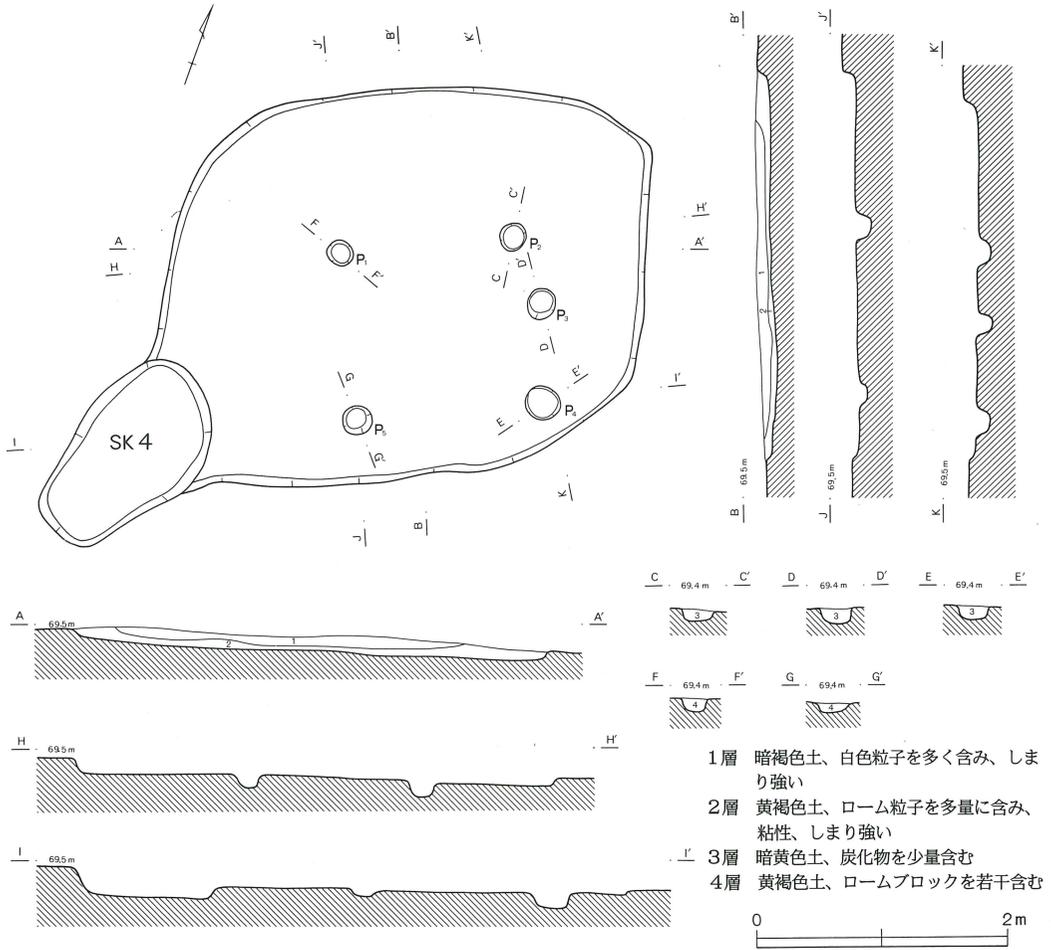
43は若干肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、粗い撫で状の整形を施す。44～46は無文土器であるが明るい褐色を呈し、細砂粒を多く含む、東山式の胴部破片とは明確に識別される。

47～52は口縁部に沈線文が1本巡る東山式土器で、47、49は口唇部がやや丸味を帯びている。沈線文も深く明瞭なものも多く、口唇下1cm前後に施文されるものが多い。殆どが赤褐色を呈し、暗赤褐色の粒子を含み、良く研磨され、堅緻な土器である。

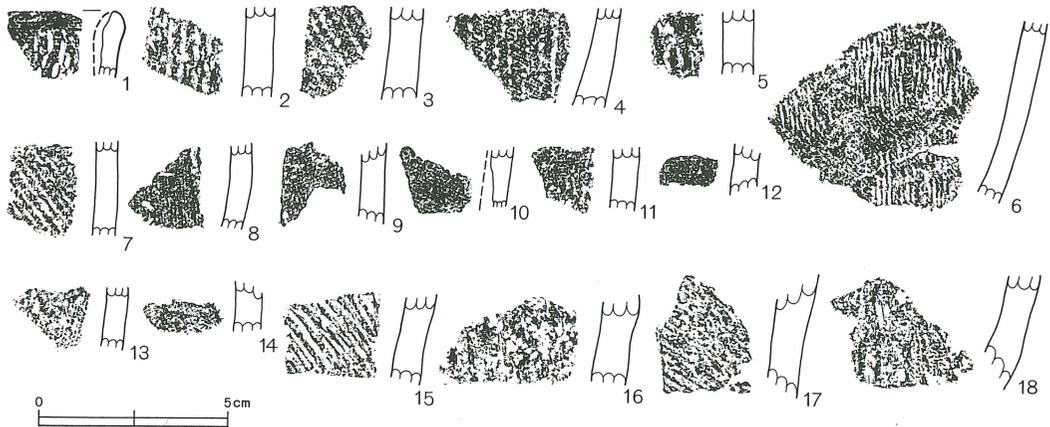
石器（第19図）は石鏃3点、石斧2点、磨石7点、有溝砥石1点が出土した。1～3は黒耀石製の石鏃で、3は未製品である。4はチャート製の楔形石器である。5、6は石斧であり、両者とも片面に自然面を多く残す。6は刃部を磨く局部磨製石斧であるが、再生を行っている。7、8はスタンプ形石器であり、両者とも側面からの調整剥離は施されない。7は分割されたままの底面を持ち、8は底面から垂直の細かな剥離痕がみられ、底面に使用による摩耗痕が認められる。8、10は磨石で片面のみを使用し、9には叩きによる窪み状の浅い痕跡が認められる。

第11号住居跡（第21図、第22図）

F0J1区に位置する。第12号住居跡の北東約3.5mに位置する。第4号土壇と重複するが、土壇は条痕文期所産であり、住居跡より新しい。住居跡は東西方向に長軸をとる隅丸長方形を呈するものと思われる。西壁のラインがやや崩れているが、土壇が重複するためと思われる。長径3.38m、短径3.10m、深さ約12cm前後を測る。床面はやや凹凸がみられ、東側にやや傾斜し、壁は緩く皿状に立ち上がる。柱穴は中央部南寄りに5本検出され、P1=11cm、P2=10cm、P3=13cm、P5



第21図 第11号住居跡



第22図 第11号住出土土器

四反歩遺跡南地区



第23図 第11号住遺物分布図

= 6 cmを測る。炉は検出されなかった。

遺物は113点出土しており、土器が73点、石器が40点である。土器は殆どが細片であり、やや大きめのものを図示（第22図）した。1～14は捺糸文系土器群である。1は口縁部破片であるが、裏面が剥落しており、口唇部の肥厚度合が不明である。口端部に施文がかからないが、口唇部は良く整形されているため、施文の後整形を施したものと思われる。原体は捺りの緩いRで、やや条間を開けて施文する。2は器面が荒れているが、原体はやや太いRである。3、4は同一個体で原体が不鮮明であり、捺糸Lと判断されるが、縄文の可能性もある。縄文の場合RLとなる。5はやや太いR、7は細いRを施文する。6は細密Rを帯状に間隔を開けて施文する。8～14は無文土器であり、9、11、12、14は赤褐色を呈し、暗赤褐色の鉱物を含み、磨きが施されていることから、東山式と判断される。

15～18は繊維を含む条痕文系土器群であり、15は内外面に条痕文を施文し、16、17は擦痕文を施文する。18は底部付近の破片であり、繊維を多く含む。

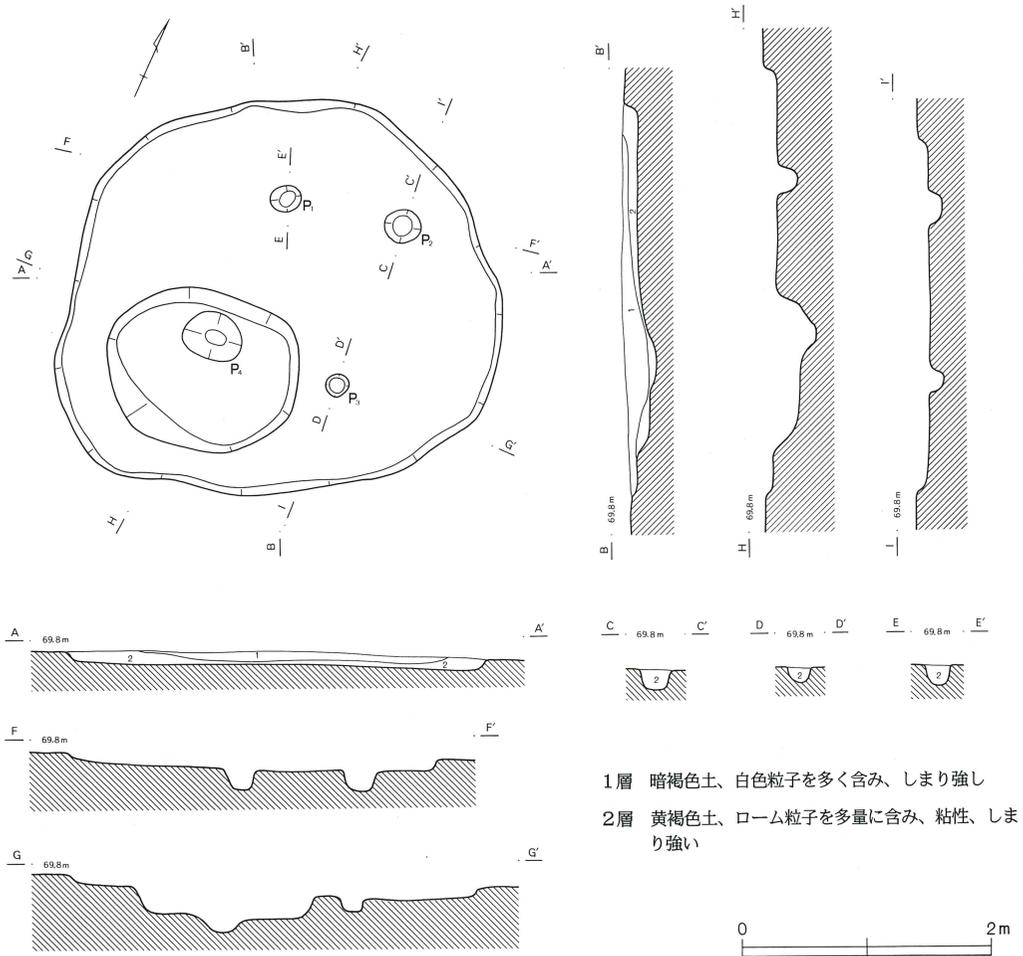
石器は剝片と礫が殆どで、磨石の破片が2点出土したのみである。

住居跡の所属時期は、細片であるが有文土器より無文土器が多く含まれ、柱穴の配置等からみて東山式期の可能性が高いものと思われる。条痕文土器は土壌と重複するための混入であろう。

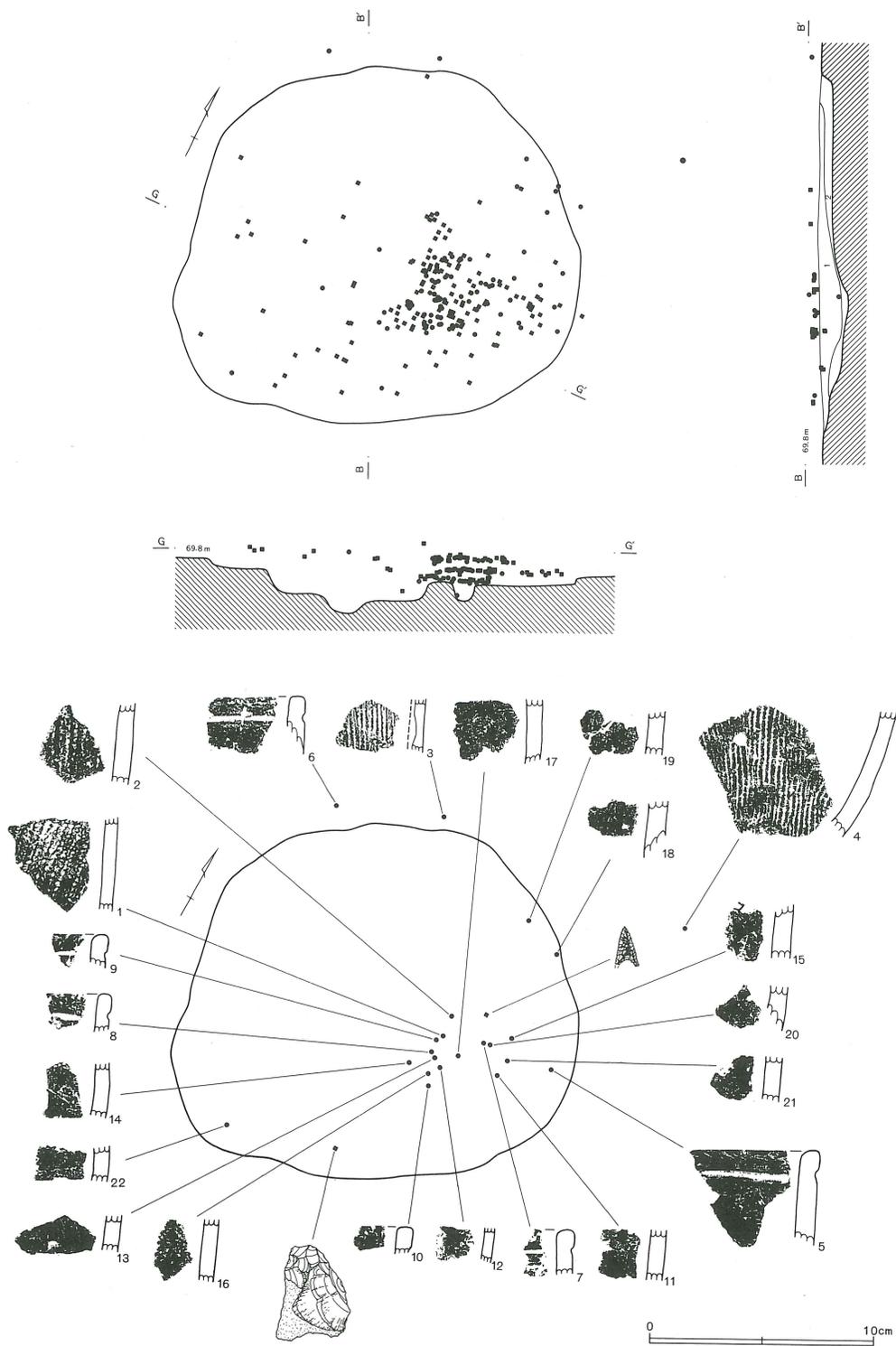
第12号住居跡 (第24図～第27図)

F 0 J 1 区に位置する。第11号住居跡の南西で、3.5m 程離れて位置する。住居跡内の南西部分に攪乱状の掘り込みが存在する。住居跡は東西方向に長軸をとる台形状の楕円形を呈し、長径3.52 m、短径3.14m、深さ約15cmを測る。床面は攪乱部分を除くと比較的平坦面を形成し、壁は緩く立ち上がる。柱穴は4本検出され、P 1 =16cm、P 2 =16cm、P 3 =12cm、P 4 =28cmを測る。炉は検出されなかった。覆土は第12号住居跡とほぼ同様であり、1層がしまりの強い暗褐色土で、白色粒子が多量に含まれる。2層は粘性、しまりが強くローム粒子を大量に含む黄褐色土である。住居跡の所属時期は東山式期である。

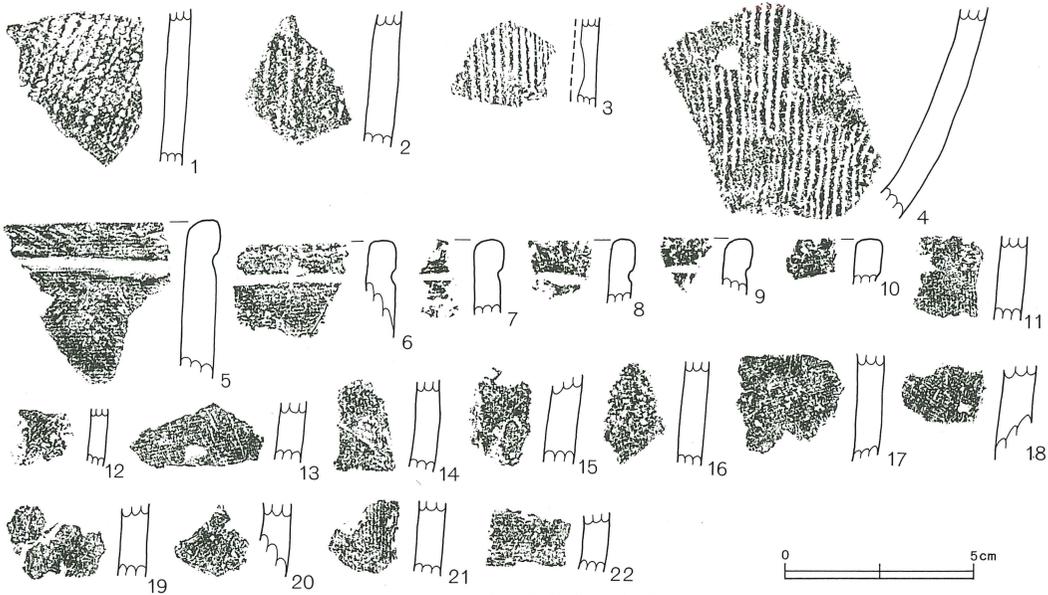
遺物は住居跡の南東部分を中心にして分布しており、合計215点出土した。土器(第26図)が76点、石器(第27図)が139点である。土器は細片が多く、有文土器よりも、無文土器が圧倒的に多い。出土土器は全て擦糸文系土器群であるが、有文土器は図示したものが殆どである。1は縄文Rを施文する胴部破片で、暗褐色を呈し、暗赤褐色の粒子を多く含むが、緻密で堅緻な土器である。



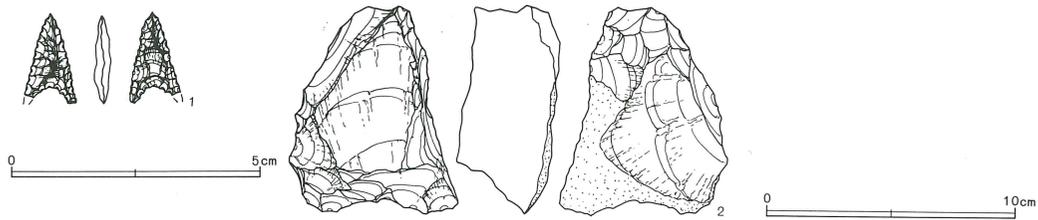
第24図 第12号住居跡



第25図 第12号住遺物分布図



第26図 第12号住出土土器

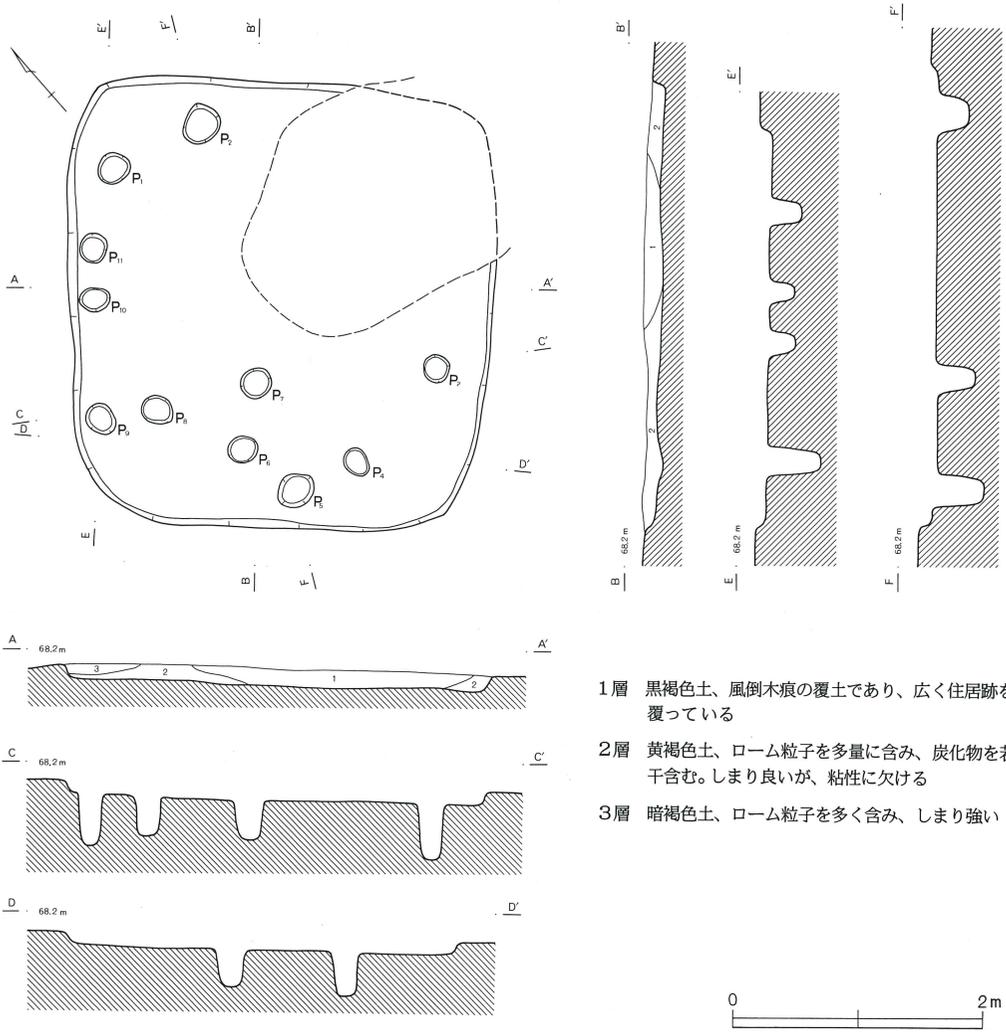


第27図 第12号住出土石器

2は撚糸文か縄文か判然としないが、撚糸Rの可能性が高い。赤褐色を呈し、白色粒子と石英、長石類の細砂粒を多量に含む。3は裏面が剥落しているが、細密な撚糸Rを深く施文する。明黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。4は底部付近の破片で、細い撚糸Rを若干間隔を開けて施文する。黄褐色を呈し、白色粒子を多く含む。

5～22は撚糸文系土器群終末期の東山式土器である。1は内削状で角頭状を呈する口唇部が、若干開き気味に立つ器形を呈し、口唇部より胴部のほうが若干器壁が肥厚し、1cm前後を測る。口縁部に巡らされる沈線文は幅広の凹線状を呈し、口縁部に条痕状の整形を施してから、撫で整形を行っている。胎土に白色粒子と細砂粒を多く含む。6は角頭状の口唇部が立つ器形を呈し、口縁部の沈線文は丸頭状工具で施文している。細砂粒と暗赤褐色粒子を多く含む。7～10は細片であるが、やや角のとれた角頭状口縁を呈し、それぞれ断面が丸い沈線文を施文する。いずれも赤褐色を呈し、胎土に暗赤褐色粒子を含むが、堅緻な土器群である。11～22の胴部破片も、器壁が1cm前後を測るものが多く、口縁部と同じ特徴的な胎土、色調を呈している。

石器は大半が剥片と礫類であるが、石鏃1点、礫器1点が出土した。1はチャート製の石鏃で、片足を一部欠損する。2は礫器で、背面に自然面を残し、礫表側から上下左右の側辺に調整剥離を

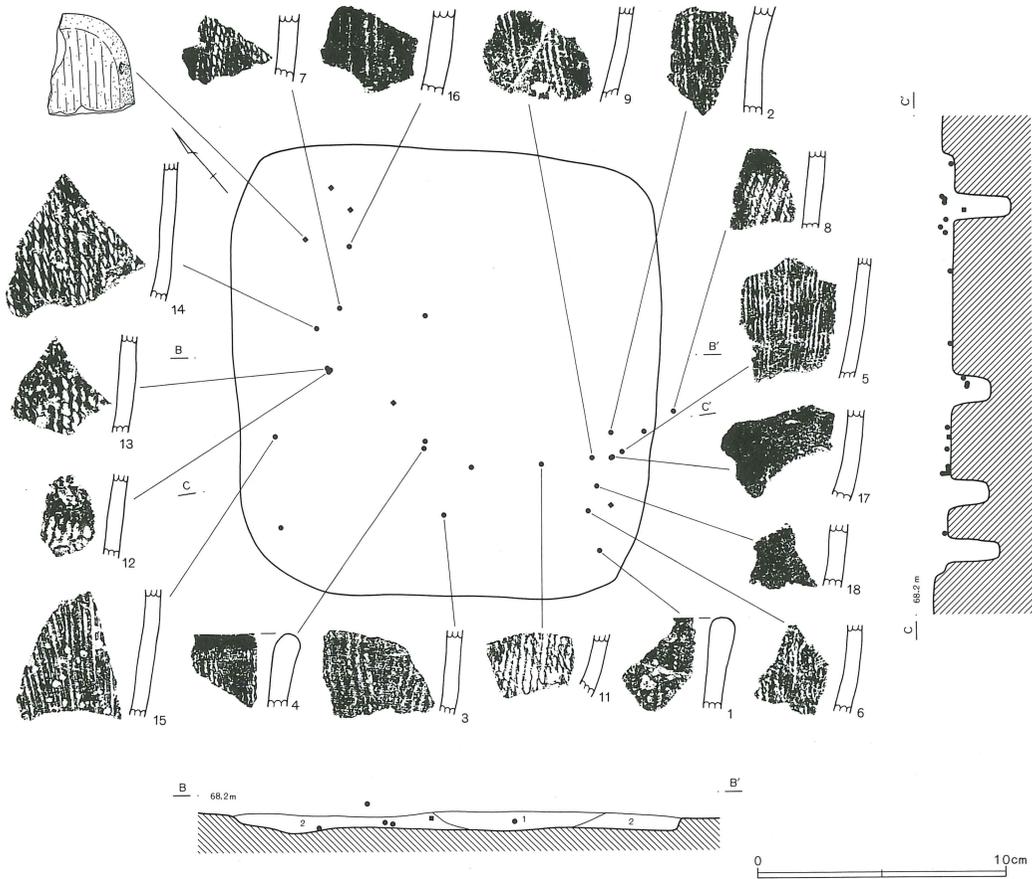


第28図 第13号住居跡

施している。刃部はやや彎曲する直刃で、礫表との刃角は垂直に近い。

第13号住居跡 (第28図～第31図)

F 3 I 4 区に位置する。周囲に縄文時代の遺構はなく、南東約20m程のところの弥生時代の第4号住居跡が存在する。住居跡東のコーナーが攪乱を受けているが、ほぼ隅丸の方形を呈し、長軸が北から約45度東に振れている。長径3.56m、短径3.42m、深さ約15cm前後を測る。床面はおよそ平坦面を呈し、壁は急に立ち上がる。柱穴は11本検出され、攪乱部分があるため配列は不明瞭であるが、壁に沿って並ぶものと思われる。深さは P 1 = 26cm、P 2 = 24cm、P 3 = 46cm、P 4 = 35cm、P 5 = 40cm、P 6 = 28cm、P 7 = 32cm、P 8 = 32cm、P 9 = 42cm、P 10 = 22cm、P 11 = 20cmを測り、比較的深い柱穴が揃っている。覆土は3層で、1層は攪乱に伴う黒褐色土である。2層はしまりは



第29図 第13号住遺物分布図

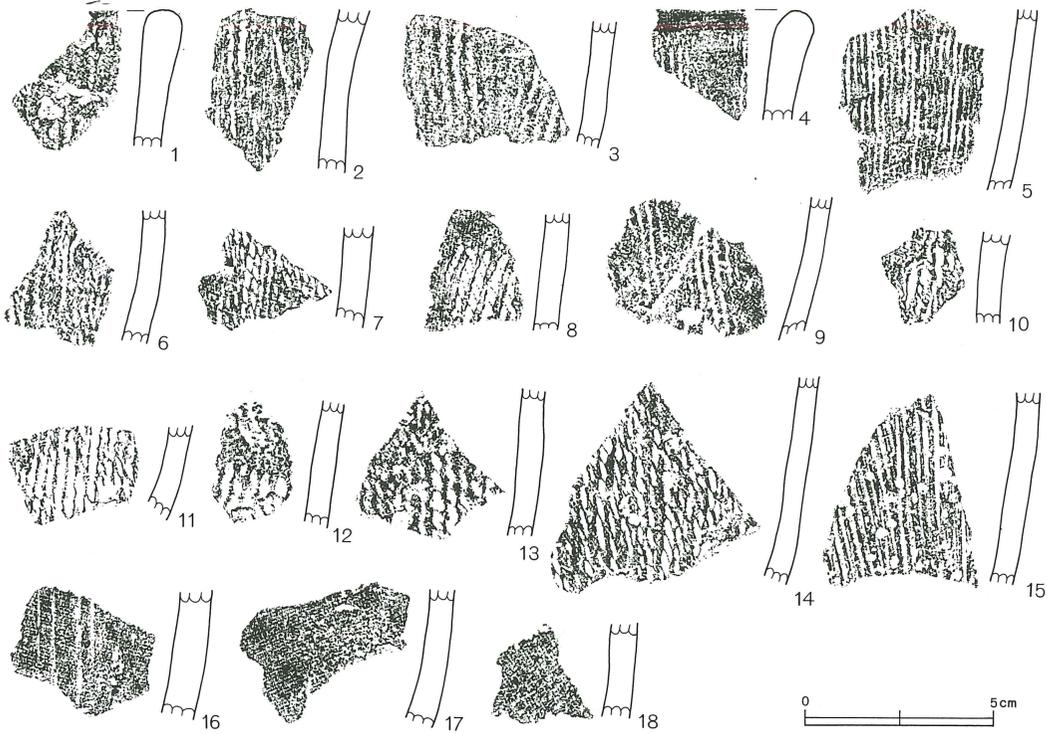
良いが粘性に欠ける、ローム粒子を多く混入した黄褐色土である。3層は部分的に堆積している層で、しまりが強くてローム粒子を多く含む暗褐色土である。遺物は、殆ど2層から出土している。住居跡の所属時期は稻荷台式期である。

出土遺物は合計32点で、土器（第30図）が27点、石器（第31図）が5点であった。土器は、全て撚糸文系土器群で、1～3は縄文施文、4～14は撚糸文施文、15、16は条線文施文、17、18は無文土器である。

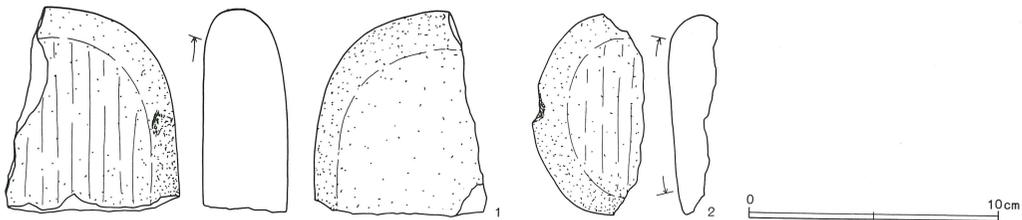
1は丸く肥厚する口唇部がやや開く器形を呈し、器面が荒れているため口唇部整形と縄文施文の先後関係は不明瞭であるが、口唇部は全面に撫で整形を行い、縄文はRLで、条が縦走する様に施文する。胎土に細砂粒を多く含むが、緻密である。2は口縁部下の破片であり、器形の反りがみられる。縄文の原体はRLで、条が縦走する。節の圧痕より繊維痕が明瞭なため、一見撚糸文的である。3は比較的太い縄文を施文するが、器面が湿っている状態での施文のため原体は不明瞭である。2、3ともに砂粒及び小礫を含むが堅緻な土器であり、暗赤褐色を呈する。

4は口唇部が丸く肥厚してやや開く器形を呈し、撚糸文施文後、口唇部に撫で整形を程す。原体は細いが撚りの緩いRで、口端部から施文する。白色粒子及び長石等の細砂粒を多く含む。裏面に

四反歩遺跡南地区



第30図 第13号住出土土器



第31図 第13号住出土石器

丁寧な調整を施し、明赤褐色を呈する堅緻な土器である。5、6は比較的細密な撚糸文を施文するもので、原体は撚糸Rである。胎土に石英等の細砂粒を多く含み、堅緻な土器であるが、器面が荒れている。7～9は撚糸文を帯状に施文するもので、やや太い原体が使用される。8、9は白色粒子及び細砂粒、小礫を多く含み、明赤褐色を呈する。10～14は比較的太い撚糸文を施文するもので、原体は全てRである。11、12はあまり砂粒は目立たないが、13、14は細砂粒を多く含み、白色粒子が目立つ。いずれも明赤褐色を呈し、堅緻な土器である。

15、16は撚糸文原体を使用し絡条体条線文を施文するもので、15は条がやや太いが密な条線文で、16は条が細く間隔の開いた条線文である。15は器壁が7mm前後で薄く、砂粒の少ない胎土であり、16は9mm前後とやや厚く、細砂粒及び白色粒子を多く含む。両者とも赤褐色を呈する。

17、18は無文土器で、17は純粋に近い胎土で橙褐色を呈し、18は細砂粒を多く含む、暗赤褐色の堅緻な土器である。

石器は石皿と磨石の破片が1点ずつ出土している。1はおよそ4分の1程が現存する石皿で、扁平な閃緑岩を使用したもので、擦り面は殆ど窪まず平坦面を呈している。2は磨石で、片面を欠損するが、擦り面は平坦である。

第14号住居跡（第32図～第36図）

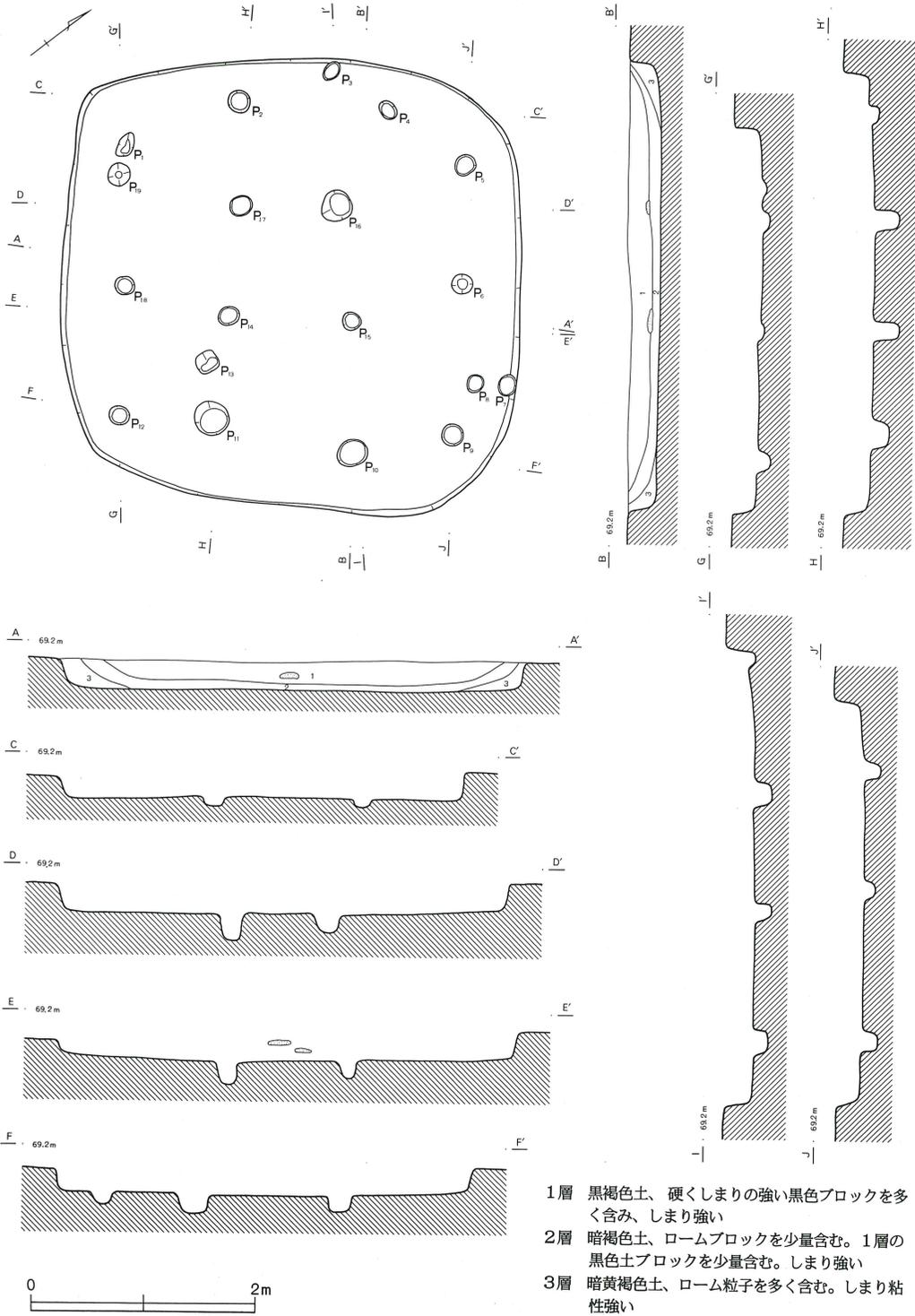
F3J2区に位置する。遺跡を横切る道路の南側地区に位置する唯一の遺構であり、周囲に縄文時代の遺構はない。住居跡は隅の丸いほぼ方形を呈し、長軸が北から約45度西へ振れている。長径4.12m、短径4m、深さ約30cm前後を測る。床面は中央部付近で小さな凹凸がみられるが、概して平坦である。壁は直に立ち上がる。柱穴は合計19本検出され、P1=4cm、P2=9cm、P3=8cm、P4=8cm、P5=14cm、P6=11cm、P7=16cm、P8=7cm、P9=15cm、P10=15cm、P11=18cm、P12=11cm、P13=23cm、P14=23cm、P15=16cm、P16=17cm、P17=24cm、P18=5cm、P19=8cmを測り、全体的に浅い傾向にある。柱穴は中央部に4本配置され、それを囲む様に壁際に3～4本配置されている。中央の4本を中心にして、それぞれの柱穴が井形に組まれている様であり、南北のラインは柱穴が通る様であるが、東西方向は柱穴の通らない部分もある。炉は丹念に調査したが、検出することはできなかった。覆土は3層から構成され、1層は硬い黒色土ブロックを多く含む黒褐色土で、しまりが強い土である。遺物の大半はこの層から出土している。2層は1層よりも黒色土ブロックを少なく含み、ローム粒子を少量含み、しまりが強い。3層はローム粒子を多く含み、しまり、粘性ともに強くなる土である。住居跡の所属時期は、出土遺物から稲荷台式期である。

遺物は108点出土しており、土器が46点、石器が62点である。出土土器は全て撚糸文系土器群であり、1層中に出土しているものが多いが、住居跡周辺出土土器も含まれる。

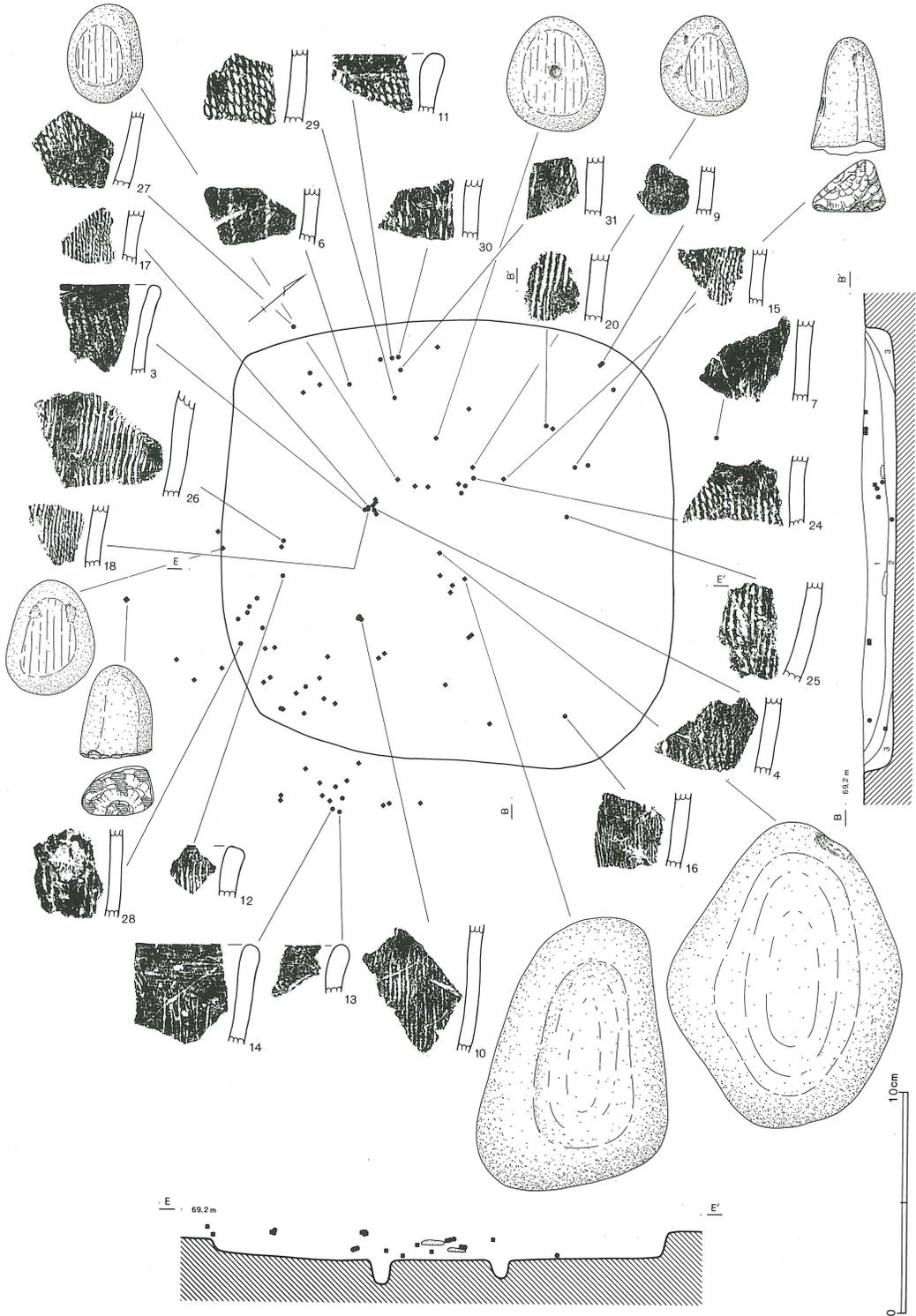
1～10は縄文施文土器である。1、2は肥厚した口唇部がやや開く器形を呈し、口端部から縄文RLを施文した後、口唇部全体に撫で整形を施すものである。3は丸頭口唇部がやや外反気味に開き、口唇部からやや間隔を開けて縄文RLを施文する。器面に凹凸を若干残す。4～10は胴部破片で、全て単節RLを施文する。4は器面が湿った状態で施文するため、縄文が不明瞭である。5は撚りの硬い縄文で、節よりも繊維痕が明瞭である。6、7は条の間隔が開く。10は砂粒が少なく、器壁の薄い土器で、細かな縄文を施文する。

11～32は撚糸文施文土器である。11は肥厚する口唇部が開く器形を呈し、太い撚糸Rを施文した後に口唇部全面に撫で整形を施す。太いが条間が詰まった撚糸Rを施文する。12はやや肥厚する角頭状の口唇部が開く器形を呈し、口端部下から撚糸Rを施文する。13は若干肥厚する角のとれた角頭状の口唇部が開き、口縁部に無文部を設けて撚糸文を施す。14は13同様に若干肥厚する口唇部が開く器形を呈するが、口唇部下に緩い括れが巡る。口唇直下から括れ部にかけて左右の強い条痕状の整形痕が残り、細くて間隔の開いた撚糸Rを無文部下から施文する。他は胴部破片で、15～18は細密な撚糸文を施文しており、15はやや帯状施文である。19～22は細くやや間隔の開く撚糸文で、23～25、27～29はやや太めの撚糸文を施文する。26は帯状施文で、30～32は条間の開いた撚糸文である。いずれも原体は撚糸Rである。33は無文土器で、白色粒子を含み暗赤褐色を呈する。

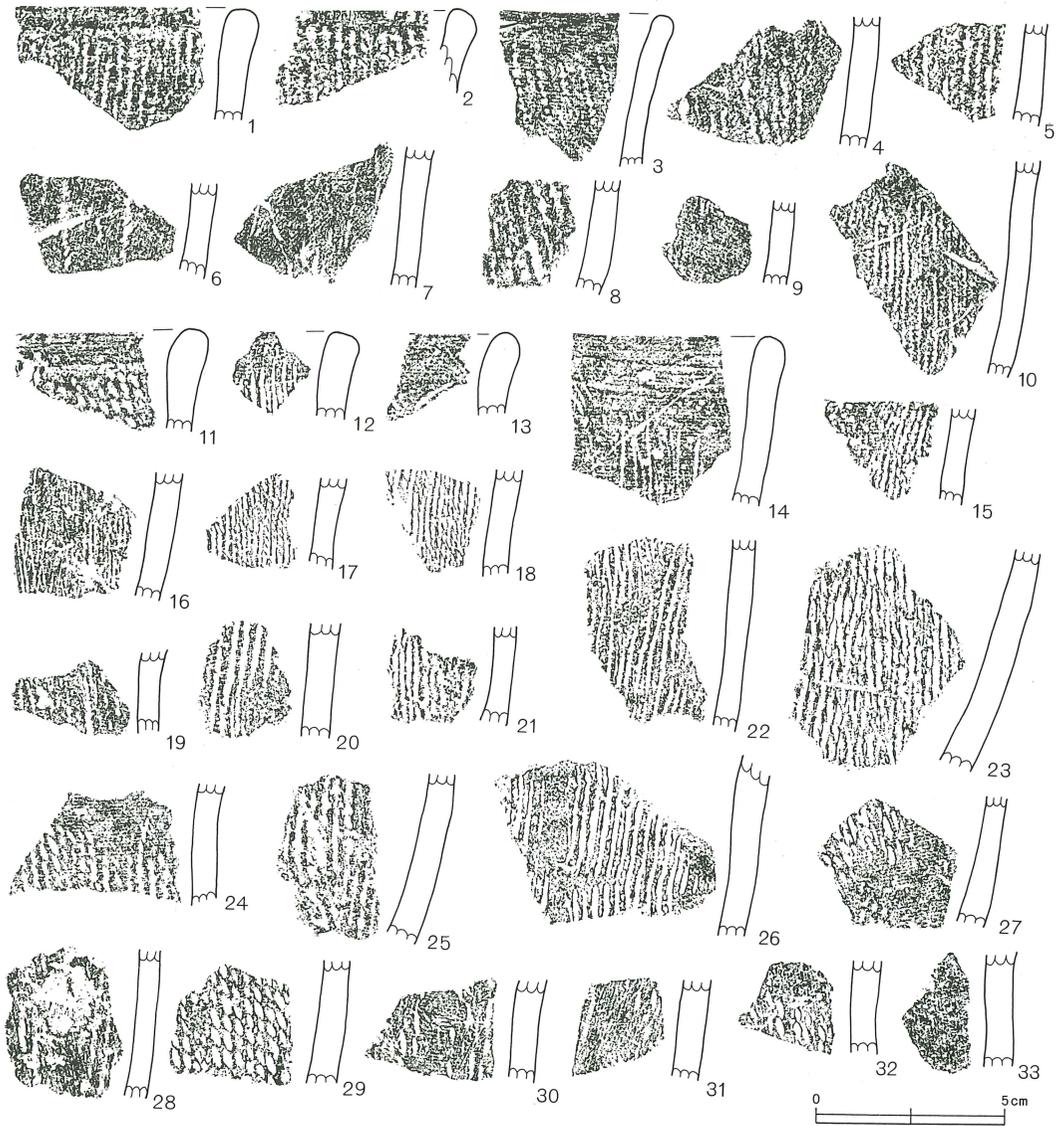
四反歩遺跡南地区



第32図 第14号住居跡

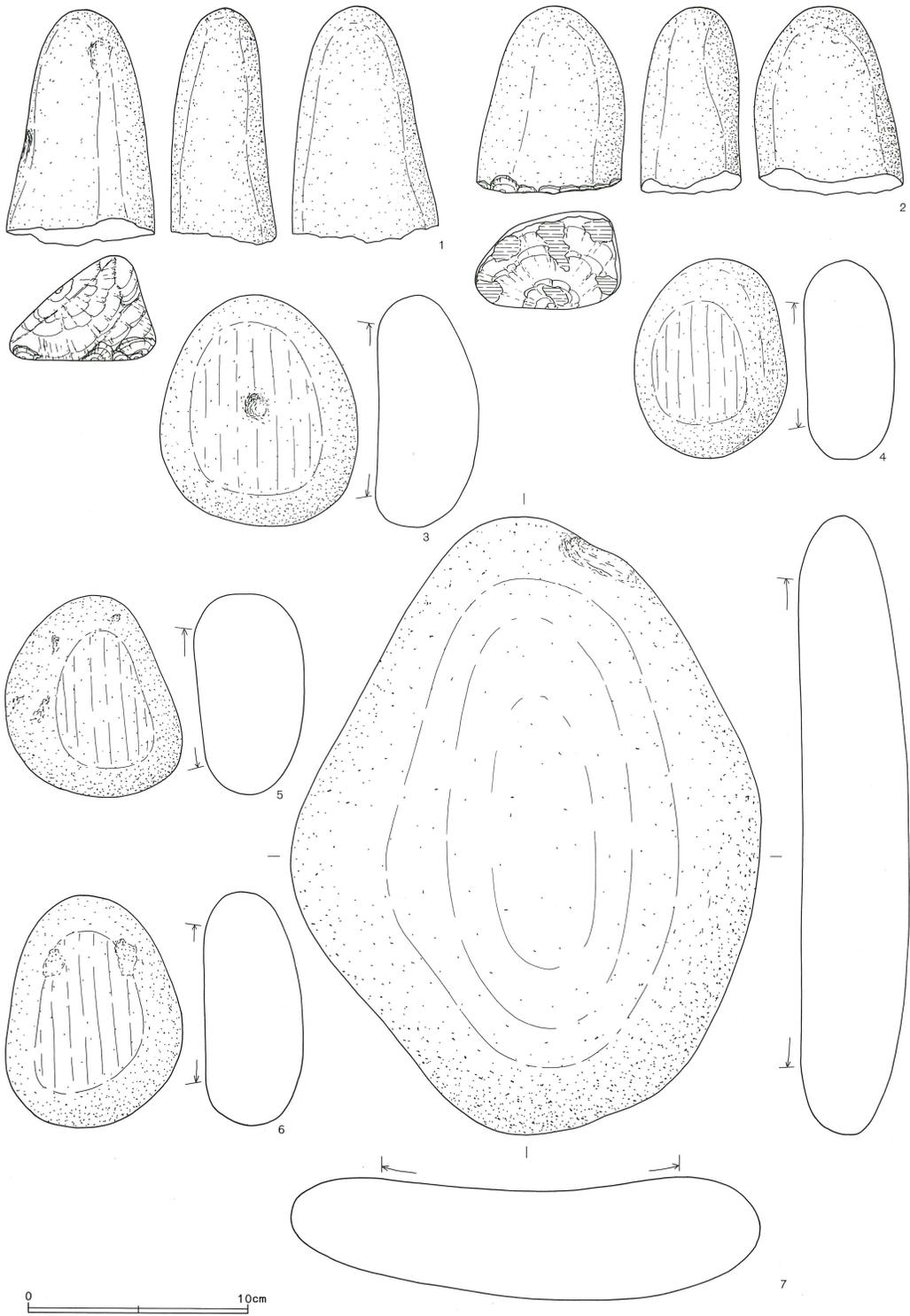


第33图 第14号住遺物分布图

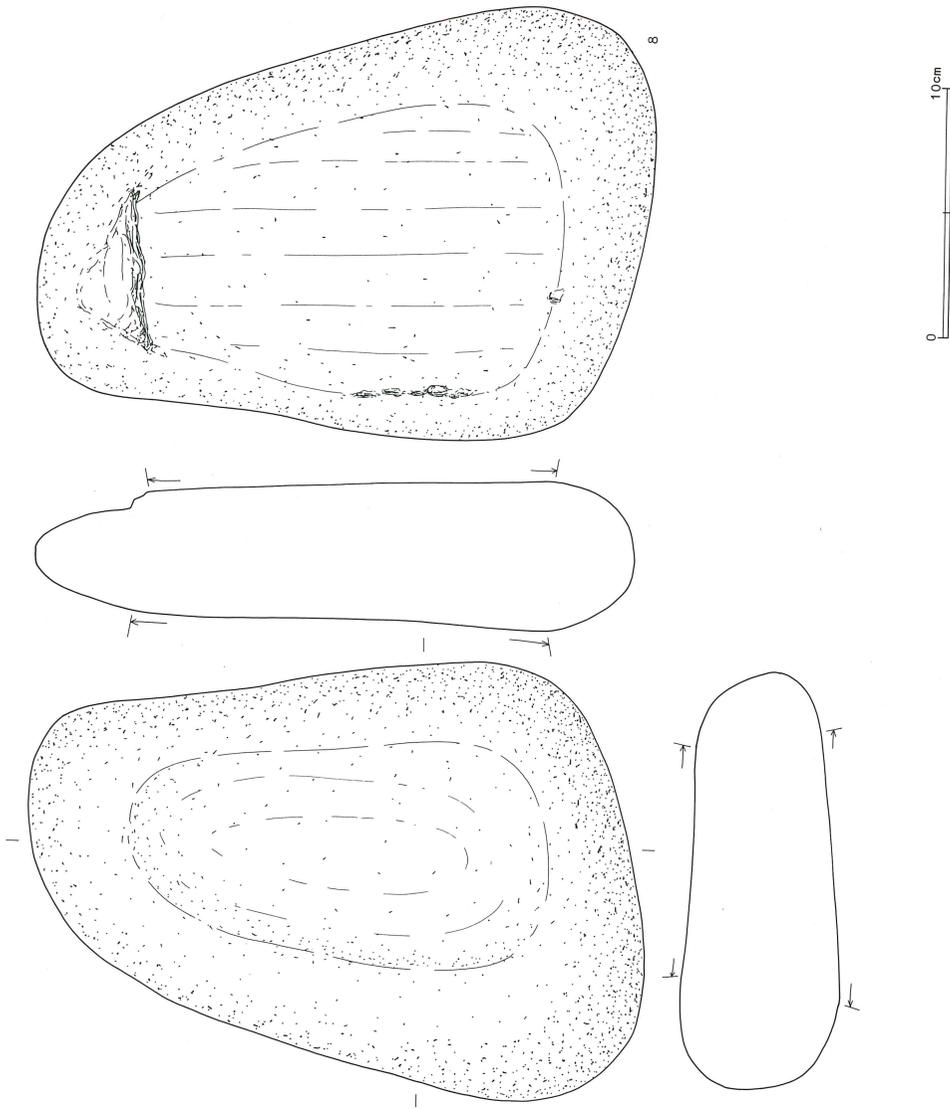


第34図 第14号住出土土器

石器は礫、剥片が圧倒的に多く、磨石が4点、スタンプ形石器が2点、石皿が2点出土した。1、2はスタンプ形石器で、1は分割された底面に調整剥離を施す。2は底面から使用による垂直の細かな剥離がみられ、底面は摩耗した部分が存在する。3～6は磨石で、片面のみを使用するものが多い。7、8は閃緑岩製の大型の石皿で、住居跡のほぼ中央部に廃棄されていたものである。両者とも自然な形状をそのまま使用しており、扁平な7には凹面がみられ、厚身の8は両面を使用し若干の凹面がみられる。



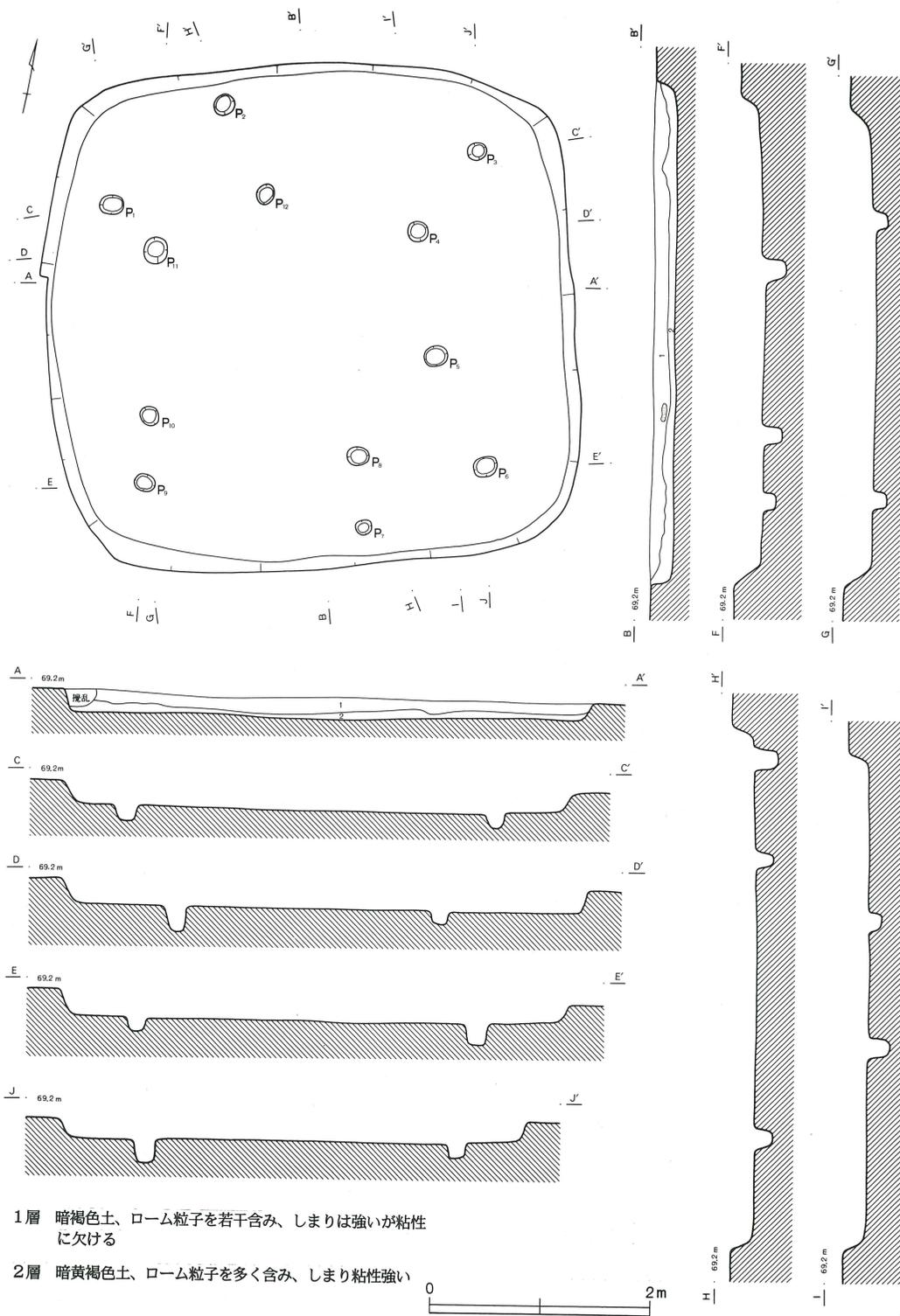
第35图 第14号住出土石器 (1)



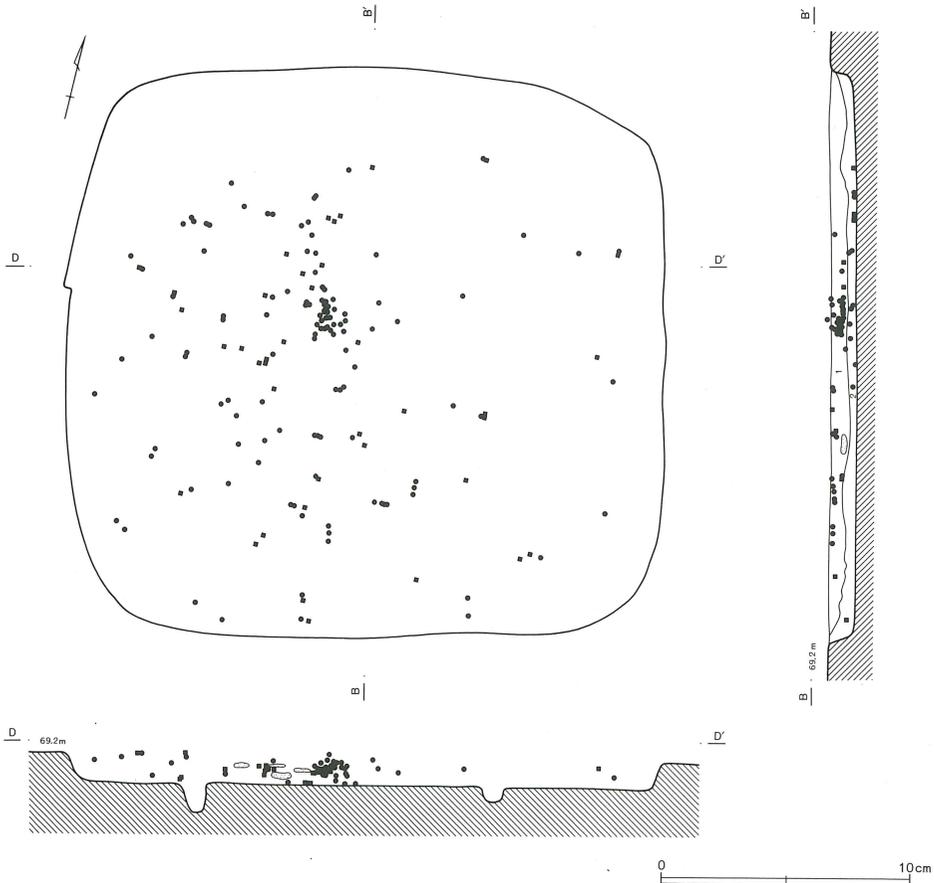
第36図 第14号住出土石器 (2)

第15号住居跡 (第37図～第44図)

F 2 J 1 区に位置する。住居跡の北側約10m程に、条痕文期の土壌群が存在する。また、南側5m程に第39号土壌が存在する。住居跡は南北方向に長軸をとり、北から約5度程東に振れ、ほぼ隅丸の方形を呈する。長径4.82m、短径4.60m、深さ約20cm前後を測る。床面はほぼ平坦面を形成し、壁はやや緩く立ち上がる。柱穴は12本検出され、中央部と壁際の2重に配置される様であるが、第14号住居跡程整然としていない。Pitの深さは、P 1 = 14cm、P 2 = 22cm、P 3 = 14cm、P 4 = 12cm、P 5 = 20cm、P 6 = 20cm、P 7 = 13cm、P 8 = 18cm、P 9 = 12cm、P 10 = 16cm、P 11 = 22cm、P 12 = 18cmを測る。住居跡の覆土は2層を形成し、1層はローム粒子を若干含みしまりの強い暗褐色土で、粘性の乏しい土である。2層はローム粒子を多く含み、しまりの強い黄褐色土であ



第37図 第15号住居跡



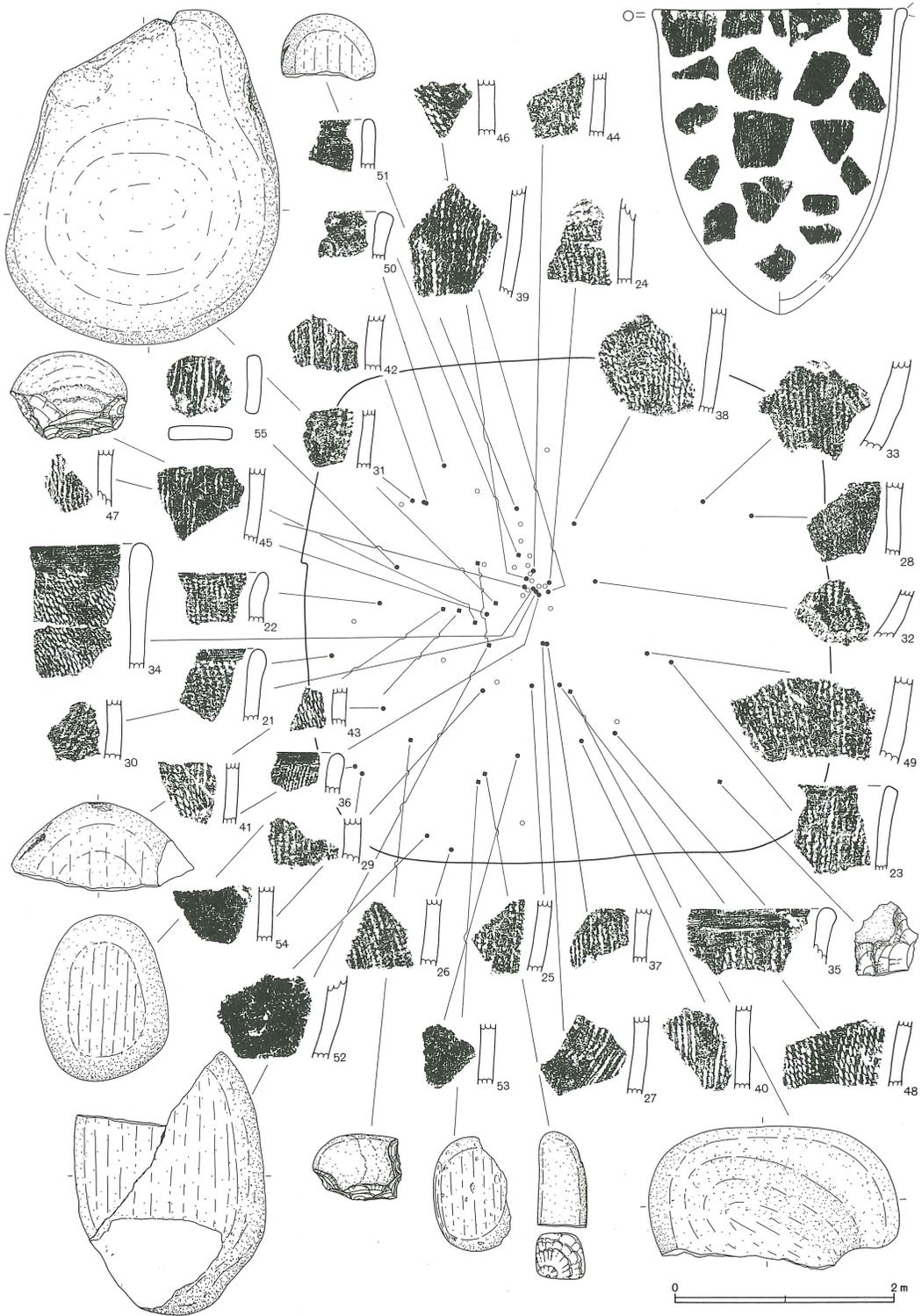
第38図 第15号住遺物分布図 (1)

る。遺物は中央部から西側にかけての1層中に多く出土する傾向があり、第14号住居跡と同様中央部に石皿が廃棄されていた。

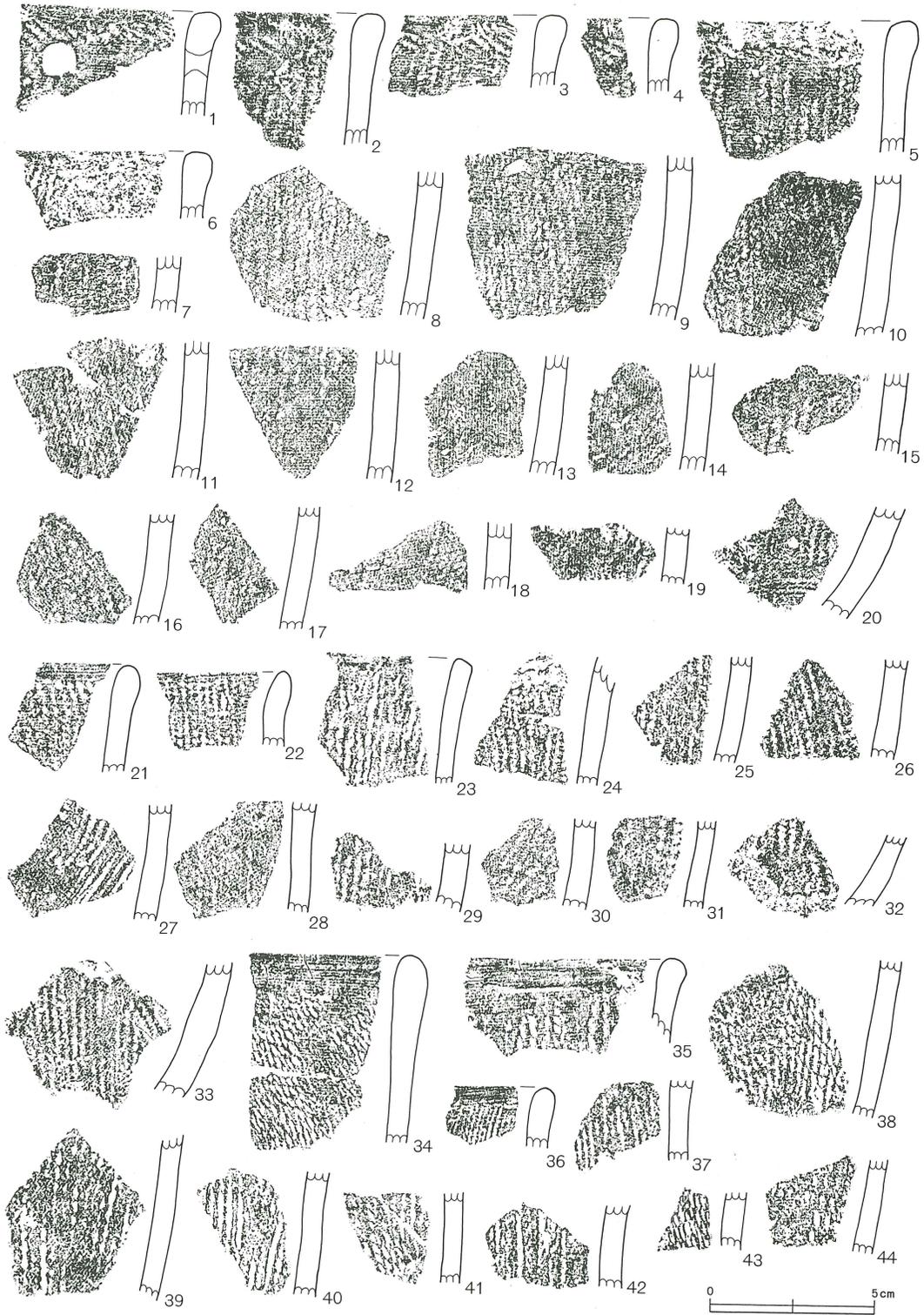
遺物は合計163点出土しており、土器(第40図、第41図)が120点、石器(第42図～第44図)が43点である。土器は全て撚糸文系土器群である。

1～20は同一個体である。推定復元図が第42図1であり、推定口径約23cmを測る。1～6は口縁部破片で、丸く肥厚する口唇部が開く器形を呈する。口唇部整形後、胴部に縄文を施文し、最後に口端部に1段横位の縄文を施文する。口端部施文は上面にかかるものではなく、外端部に施文するもので、施文幅は1cm内外である。原体はRLで、器面が湿っている時に施文しているため、胴部破片等では原体の圧痕が浅く、節よりも繊維痕のほうが目立っている。器壁は8mm前後を測り、比較的厚い。20の底部付近の破片では、横位の条痕状の擦痕が観察される。胎土は細砂粒を多く含むが、緻密であり、橙褐色を呈する堅緻な土器である。胴部には部分的にすすが付いている。

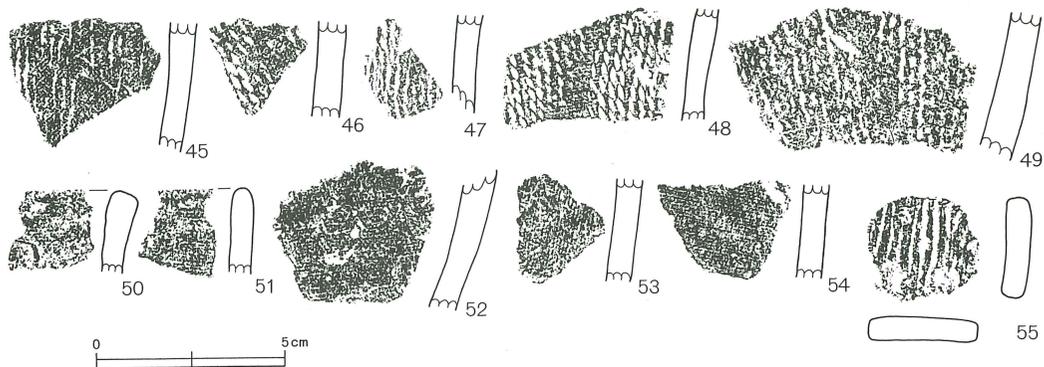
21～33は縄文施文土器である。21はやや肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口端部から縄文を施文した後、口唇部に撫で整形を施す。細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。原体はRLである。22は若干肥厚する口唇部が尖り気味に開き、口唇部整形後、口端部から縄文RLを施文する。黒色の



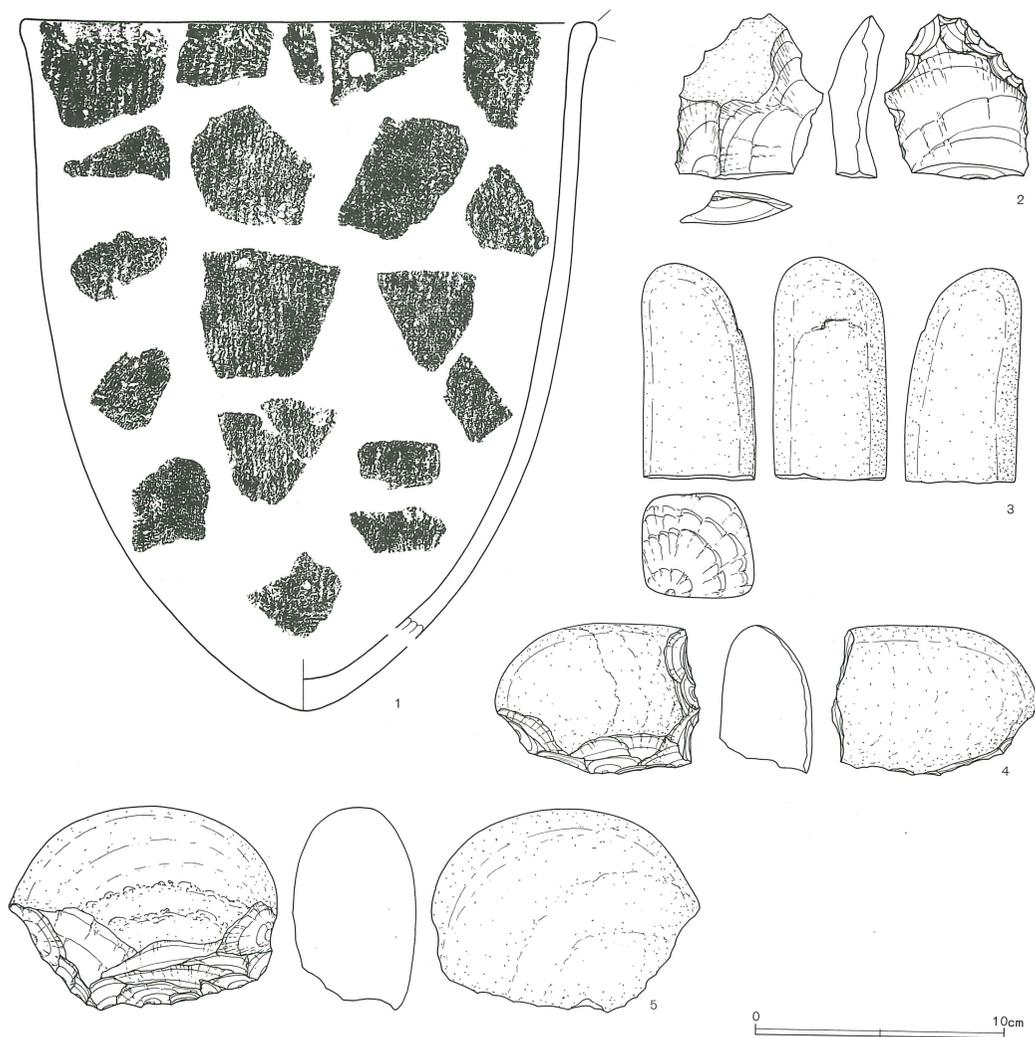
第39图 第15号住遺物分布图 (2)



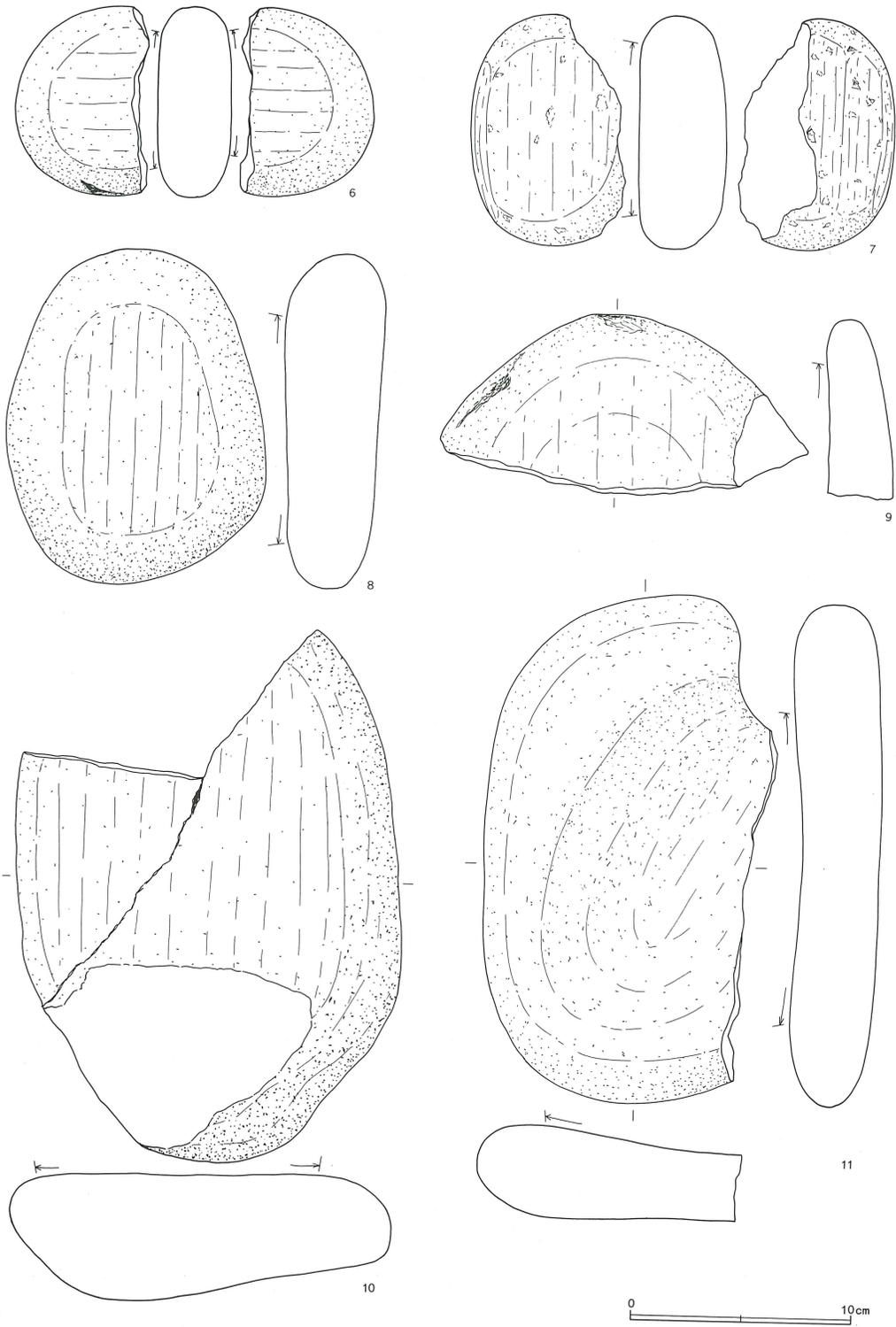
第40图 第15号住出土土器 (1)



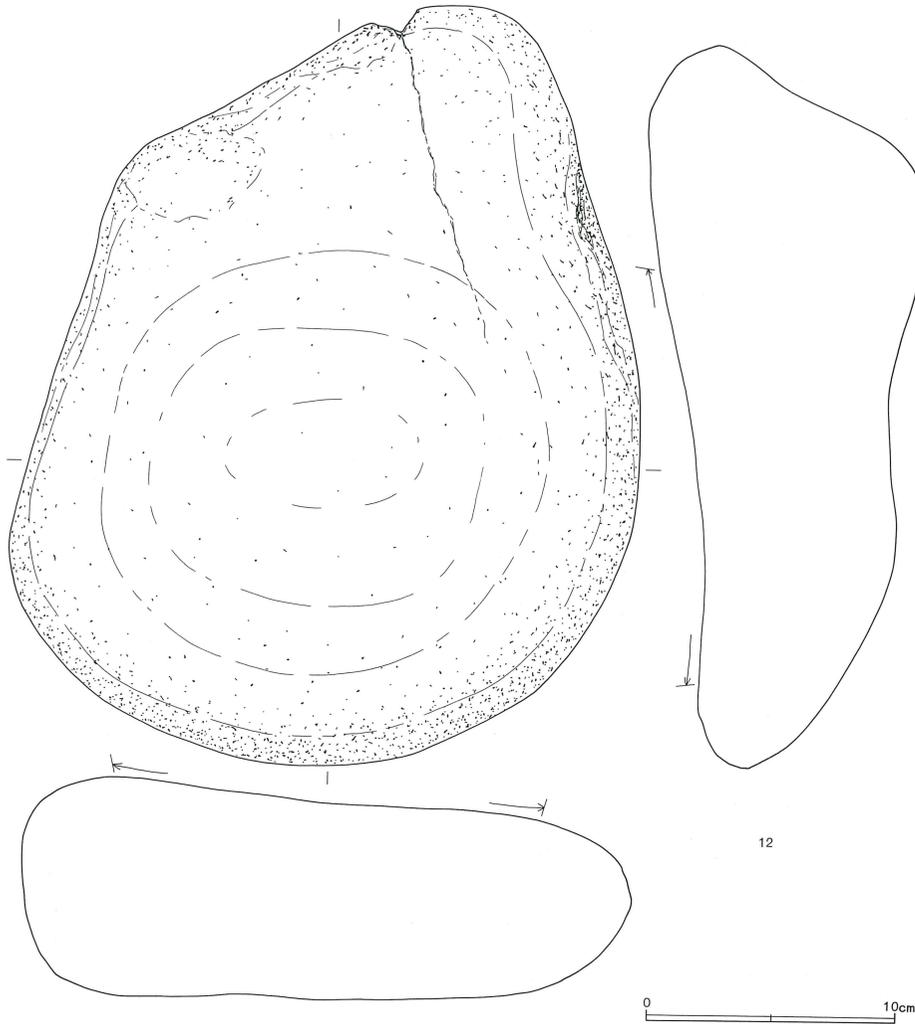
第41図 第15号住出土土器 (2)



第42図 第15号住出土石器 (1)



第43图 第15号住出土石器 (2)



第44図 第15号住出土石器 (3)

雲母粒子と暗赤褐色の粒子を多く含み、橙褐色を呈する。23は肥厚しない角頭状口唇部が開く器形を呈し、撚りの緩い縄文RLが施文される。口唇上は平坦に整形されるが、口唇部整形と縄文施文の関係は不明である。口縁裏面には、横位の撫で整形が明瞭である。細砂粒、小礫を含むが堅緻である。24～33の胴部破片は縄文の施文が浅い傾向にあり、殆どが縄文の節よりも繊維痕が目立つ。原体は全てRLであった。

34～49は撚糸施文土器である。34は肥厚する口唇部が若干開く器形を呈し、口唇下から撚糸文を施文し、最後に口唇部全面に撫で整形を施している。原体は細密の撚糸Rである。砂粒をあまり含まず堅緻な土器で、暗赤褐色を呈する。35は丸頭状に肥厚する口唇部が開く器形を呈し、口唇部下に太い撚糸Rを施文する。白色粒子、小礫を含み、赤褐色を呈する堅緻な土器である。36は無肥厚の丸頭状口唇部がやや開く器形を呈し、細密の撚糸Rを施文した後口唇部に整形を施している。

四反歩遺跡南地区

白色粒子を多く含む緻密な土器で、橙褐色を呈する。胴部破片では細密の撚糸文は少なく、やや間隔の開いた太めの原体を施文するものが多い。原体は撚糸Rである。45～49は撚糸文を帯状に施文するものである。

50～54は無文土器で、50は角頭状で肥厚する口唇部が開き、51は丸頭状の口唇部がやや内彎状に立つ器形を呈する。52、54は胎土に暗赤褐色の粒子を多く含み、53は細砂粒を多く含む。いずれも橙褐色を呈する。

55は土製円盤である。1点のみ出土した。撚糸Rを施文する土器の胴部破片を利用しており、隅丸方形に近い円形を呈する。胎土に白色粒子、細砂粒を多く含み、橙褐色を呈する。

石器は搔器1点、礫器2点、スタンプ形石器1点、磨石6点、石皿7点が出土した。2は粘板岩製の大型剝片を利用した搔器で、縁辺部に粗い調整剝を施したものである。3はスタンプ形石器で、角柱状の礫を半割したものである。側縁からの調整剝離は施されず、1度の加撃で底面の平坦面を形成している。4、5はフォルンフェルス製の礫器である。4は円礫の2側縁に調整剝離を施すもので、剝離は片面から行われる。5は3側縁に調整剝離を施すものであるが、刃部は円形状となる。剝離は1方向からのみ行われる。

6、7は磨石である。両者とも欠損するが、6は両面を、7は片面を使用する。8～12は石皿である。いずれも自然石の平坦面を使用するが、11、12はやや深めの凹面を呈する。10は接合する破片で、擦り面は平坦面である。12は大きな磨石で、重量が10kgあまりもある。

第1号土壌（第45図、第46図1、2）

F1J1区の第9号住居跡内に位置し、住居跡よりも古い。プランは円形を呈し、長径0.80m、短径0.74m、深さ18cmを測る。覆土は1層が炭化物を若干含む暗黄褐色土、2層が粘性の強い黄褐色土である。遺物は5点出土している。1は器壁が1cm前後を測る胴部破片であり、やや太めで間隔の開く撚糸Rを施文する。胎土に石英類の砂粒と小礫等を多く含むが、器面は良く研磨されており、堅緻な土器である。色調は暗赤褐色を呈する。2は撚糸文系土器群であるが、器面が荒れているため施文の有無は判断されない。

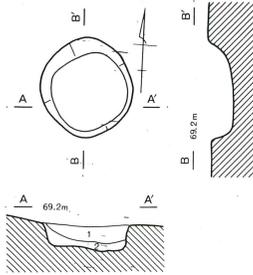
第2号土壌（第45図、第46図3、4）

F1J1区の第8号住居跡と重複して存在し、住居跡より新しい。プランは不整楕円形を呈し、長径1.20m、短径0.90m、深さ24cmを測る。覆土は1層が白色粒子を多く含むよくしまった暗褐色土で、2層が炭化物を若干含む暗黄褐色土である。3層はロームブロックを多量に含む黄褐色土である。所属時期は東山式期である。遺物は6点出土しており、3は口縁部破片で口唇部を欠くが、口縁部に沈線文を巡らす東山式土器である。4は胴部破片である。

第3号土壌（第45図、第46図5～9、第64図16、19）

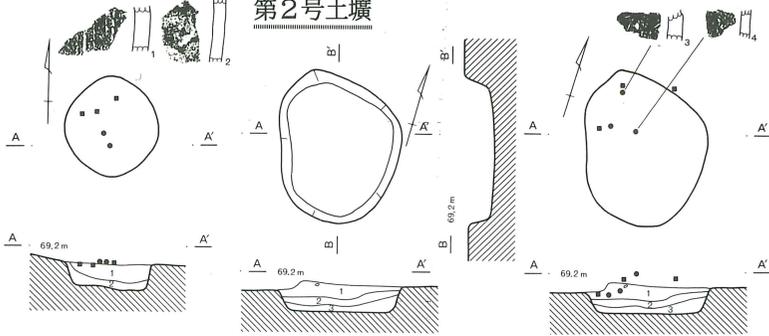
F1J1区の第8号住居跡と重複して存在し、住居跡より新しい。プランは長楕円を呈し、長径1.52m、短径1.02m、深さは最深部で約30cmを測る。覆土は第2号土壌と同様である。遺物は46点

第1号土壙



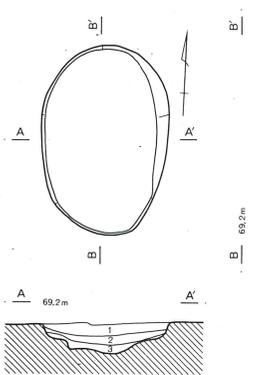
1層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む。ローム粒子を多く含む
2層 黄褐色土、粘性は強いが1層よりしまり弱い。ローム粒子を基本とする

第2号土壙



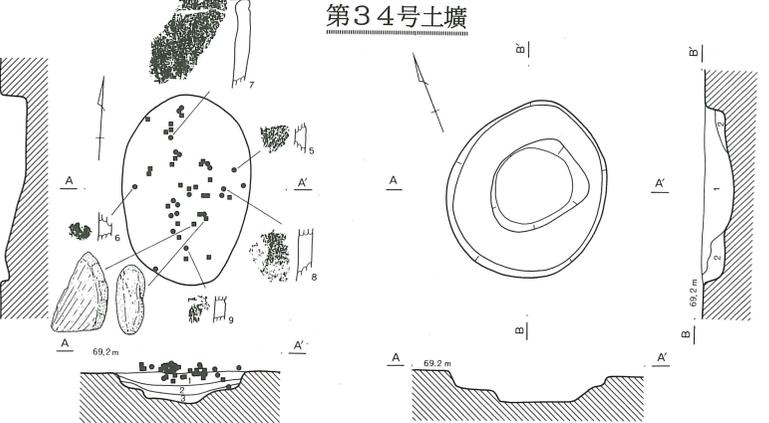
1層 暗褐色土、炭化物を若干含む。しまり強く白色粒を少量含む
2層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む。1層より色調が明るい
3層 黄褐色土、ロームブロックを多く含む。しまり強いが粘性に欠ける

第3号土壙



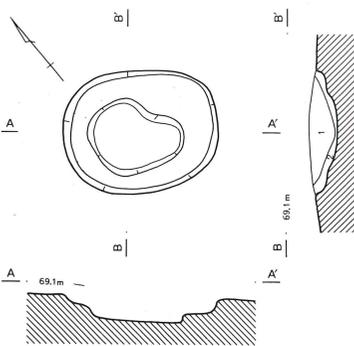
1層 暗褐色土、炭化物を若干含む。しまり強く白色粒を少量含む
2層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む。1層より色調が明るい
3層 黄褐色土、ロームブロックを多く含む。しまり強いが粘性に欠ける

第34号土壙



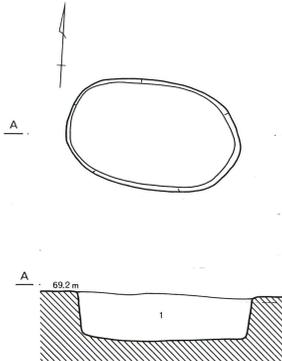
1層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む
2層 黄褐色土、粘性は強いが1層よりしまり弱い

第35号土壙

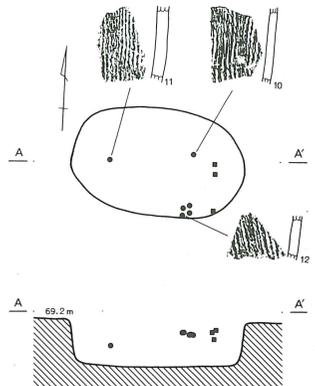


1層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む
2層 黄褐色土、粘性は強いが1層よりしまり弱い

第39号土壙

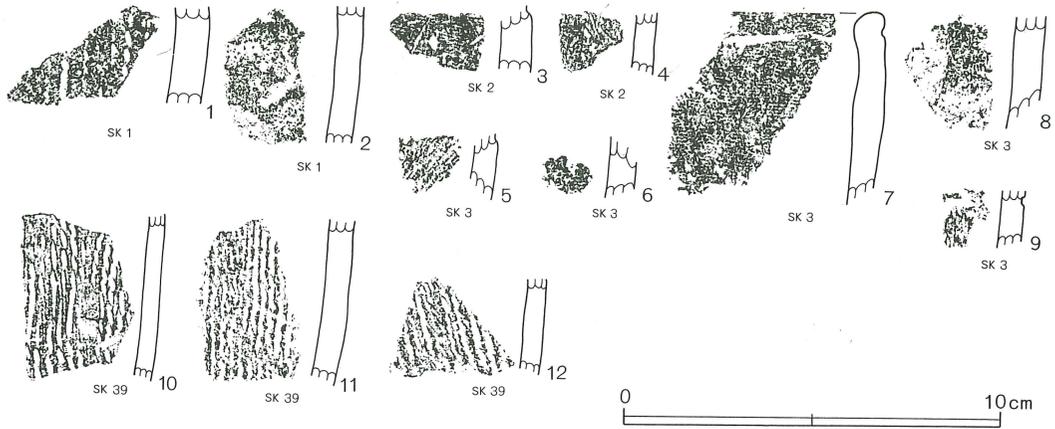


1層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む。



第45図 撚糸文期の土壙

四反歩遺跡南地区



第46図 撚糸文期土壇出土土器

出土した。土器は細片が19点出土しており、全て東山式土器である。7は丸頭状を呈する口唇部が内湾して立つ器形を呈し、口唇下に継ぎ足しの浅い沈線文を施文する。9にも沈線文が一部存在している。石器は16が磨石で、19が敲石である。

第34号土壇 (第45図)

F 2 J 2 区に位置する。プランは楕円形を呈し、長径1.42m、短径1.28m、深さ25cmを測る。覆土は1層がしまりの強い暗黄褐色土、2層が粘性の強い黄褐色土である。

第35号土壇 (第45図)

F 1 J 1 区に位置する。プランは楕円形を呈し、長径1.26m、短径0.98m、深さ27cmを測る。覆土は1層が炭化物を若干含む暗黄褐色土、2層がしまりの強い黄褐色土である。

第39号土壇 (第45図、第46図10~12)

F 2 J 1 区に位置する。プランは長楕円形であり、長径1.40m、短径0.88m、深さ35cmを測る。覆土は暗黄褐色土の1層であり、遺物は9点出土している。10~12はいずれも撚糸Rを施文する。所属時期は稻荷台式である。

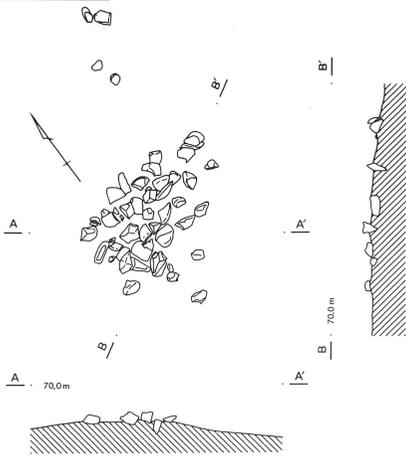
第1号集石 (第47図)

F 3 J 1 区に位置する。約0.70m×0.60mの範囲に集中して存在し、102個の石で構成される。石は殆どが破碎礫で、被熱されたものが多い、土器は出土していない。

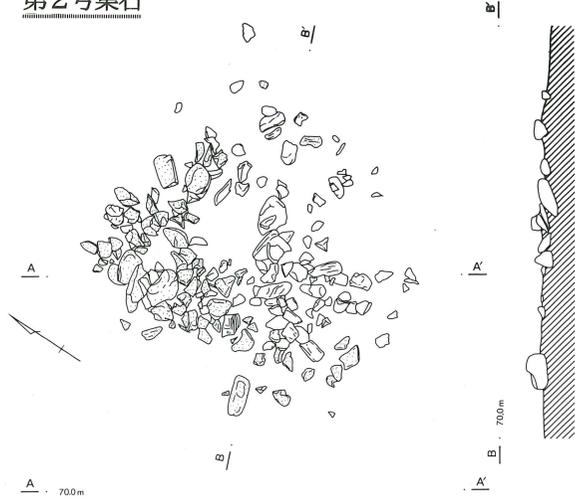
第2号集石 (第47図)

F 3 J 0 区に位置する。径約1.30m程の範囲に集中して存在し、191個の被熱破碎礫で構成される。大形の礫も含むが、土器は含まれない。

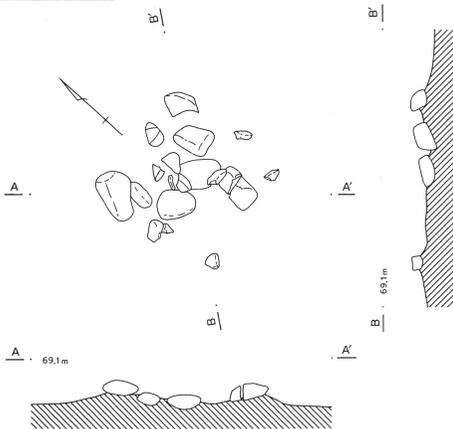
第1号集石



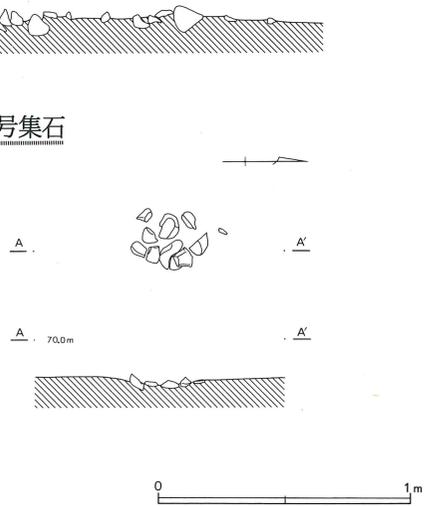
第2号集石



第3号集石



第4号集石



第47図 撚糸文期集石遺構

第3号集石 (第47図)

F 0 J 0 区に位置する。径約0.60m程の範囲に集中して存在し、19個の礫で構成され、大形礫を多く含む。大形の礫は被熱されていない。土器は出土していない。

第4号集石 (第47図)

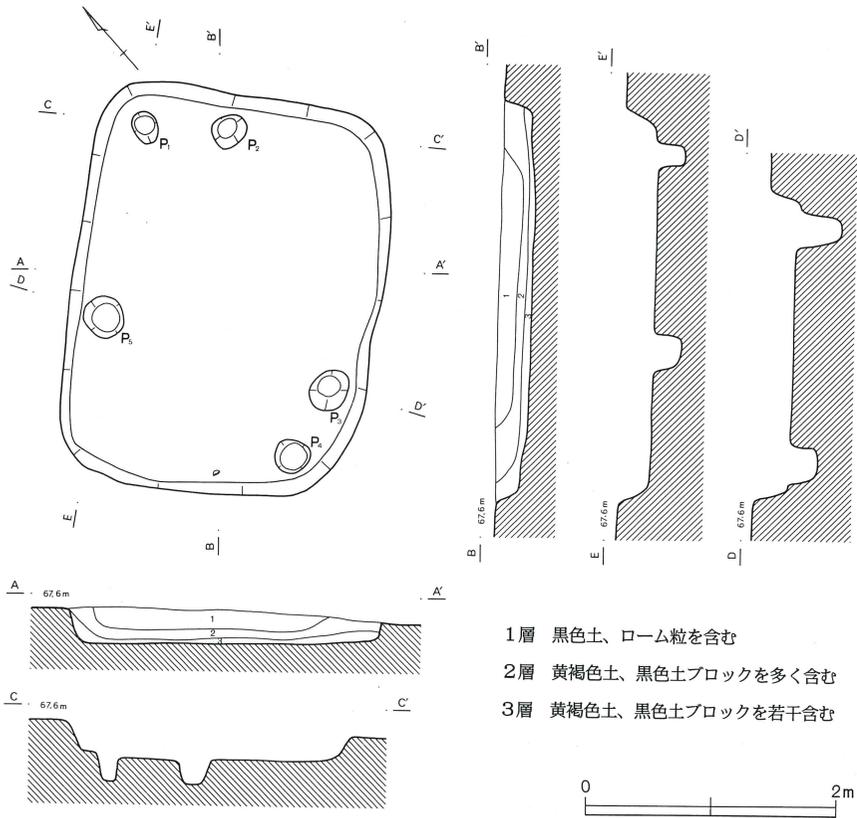
F 3 J 1 区に位置し、東に第1号集石が隣接する。径約0.30m程の範囲に集中しており、12個の礫で構成されている。礫は大形の破碎礫が多いが、被熱されているものは少ない。土器は出土していない。スタンプ形石器状の半割礫を含んでいる。

(3) 沈線文期の遺構と遺物

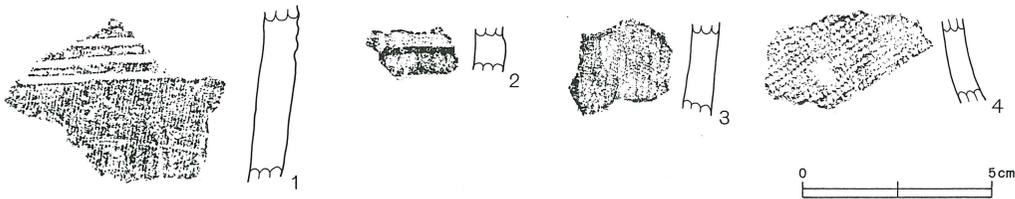
第1号住居跡 (第48図、第49図)

F 2 I 3 区に位置する。周辺に縄文時代の遺構は無く、西約15mに弥生時代の第2号住居跡が存在する。南北方向に長軸をとり、長径3.20m、短径2.48m、深さ約30cmを測る長方形を呈する。床面は平坦面を呈し、壁はやや緩く立ち上がる。柱穴は5本検出され、P 1 = 22cm、P 2 = 20cm、P 3 = 34cm、P 4 = 12cm、P 5 = 22cmを測る。覆土は1層が黒色土、2層が黒色土ブロックを含む黄褐色土、3層がローム粒子を多く含む黄褐色土である。所属時期は早期の田戸下層式期である。

遺物は若干出土しており、1、2が床面から出土している。1はよく研磨された器壁に横位の沈

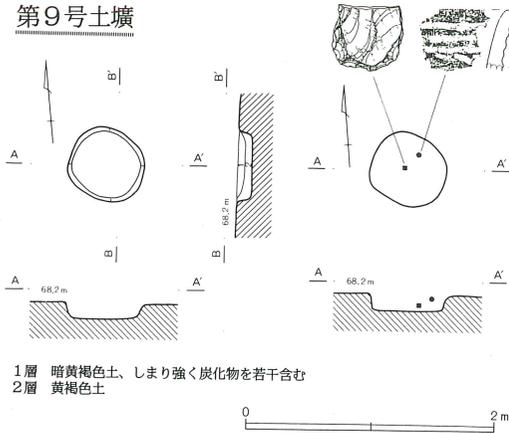


第48図 第1号住居跡



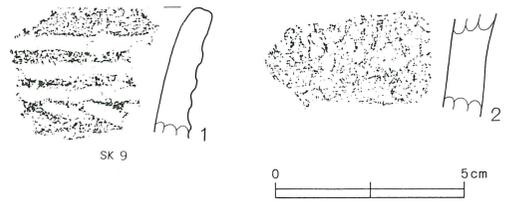
第49図 第1号住出土土器

第9号土壙



1層 暗黄褐色土、しまり強く炭化物を若干含む
2層 黄褐色土

第50図 第9号土壙

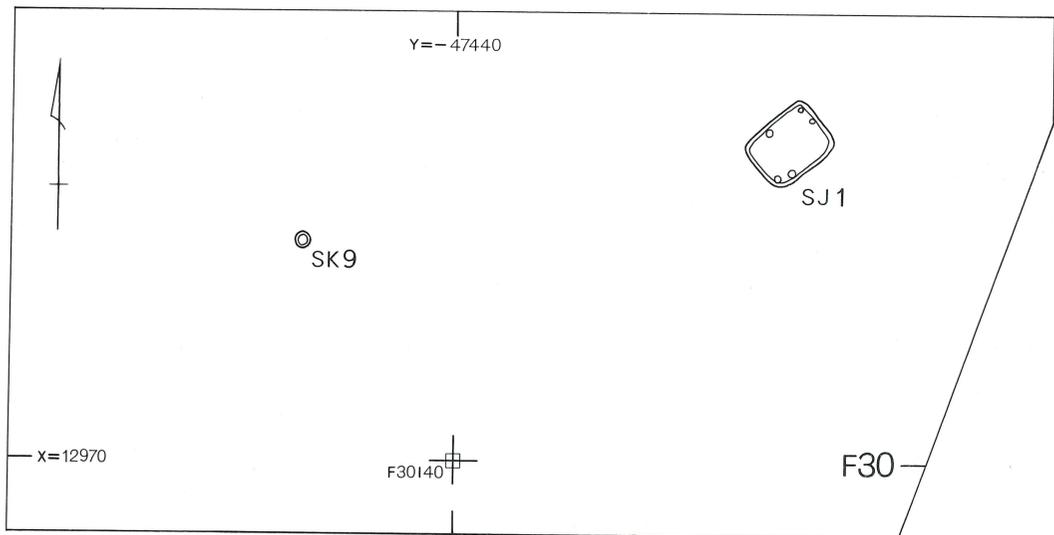


第51図 第9号土壙出土土器

線文を3本施文する。2は太い凹線状の沈線文を施文するものである。両者とも赤褐色を呈し、胎土は緻密で、堅緻な土器である。3は無文土器であるが、同時期のものである。いずれも田戸下層式に比定される。4は混入した弥生時代の吉ヶ谷式土器である。

第9号土壙（第50図、第51図、第63図7）

F2I4区に位置する。第2号住居跡の北壁に隣接して存在する。プランはほぼ円形を呈し、長径0.64m、短径0.60m、深さ約15cmを測る。覆土は1層が炭化物を含む暗黄褐色土、2層がローム粒子を多く含む黄褐色土である。所属時期は田戸下層式期である。遺物は若干出土しており、1は角頭状の口唇部が開き、継ぎ足し状の凹線文を横位に施文する田戸下層式土器である。2は単節縄文RLを施文し、時期は不詳である。第63図7は打製石斧であり、頭部側の半分を欠損する。刃部は片側からの剝離のみで整形される。

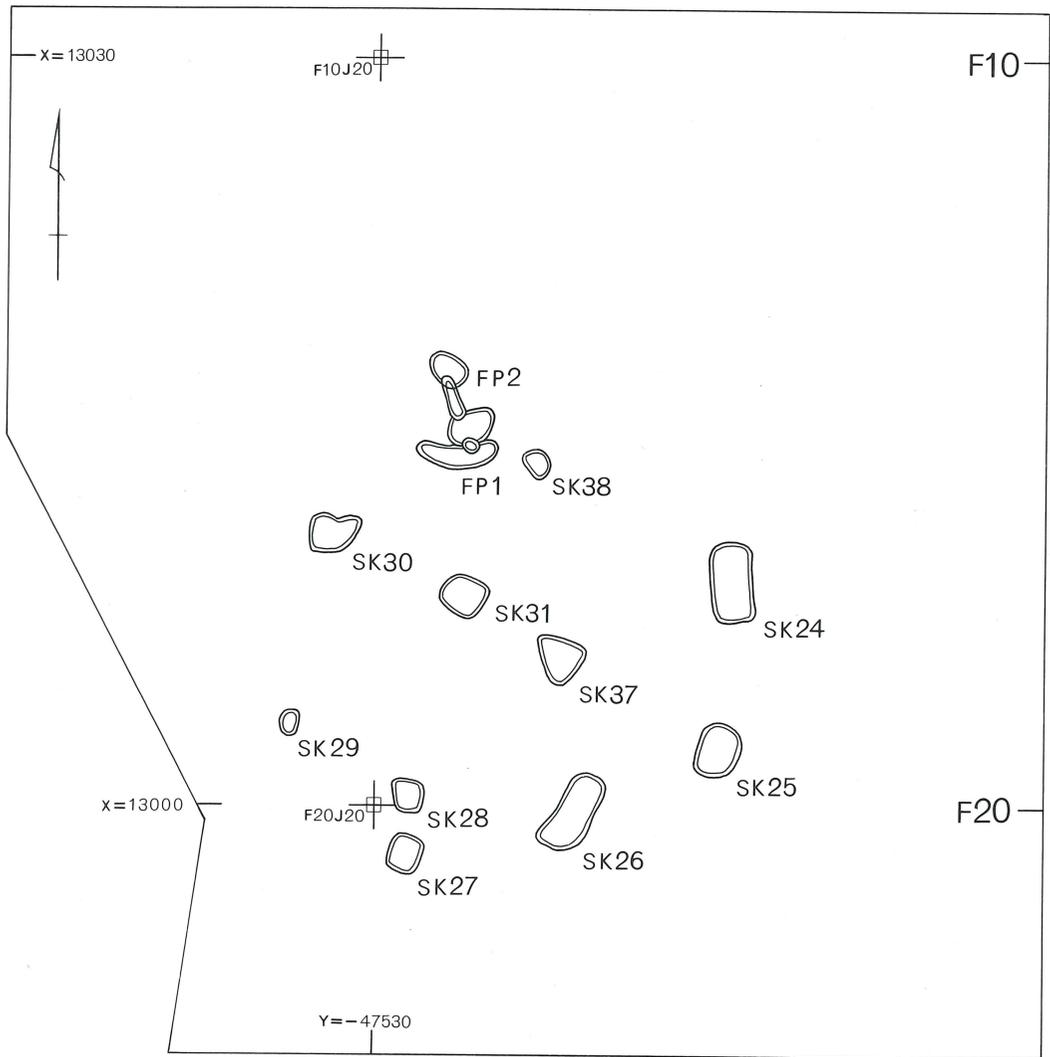


第52図 沈線文期の遺構

(4) 条痕文期の遺構と遺物

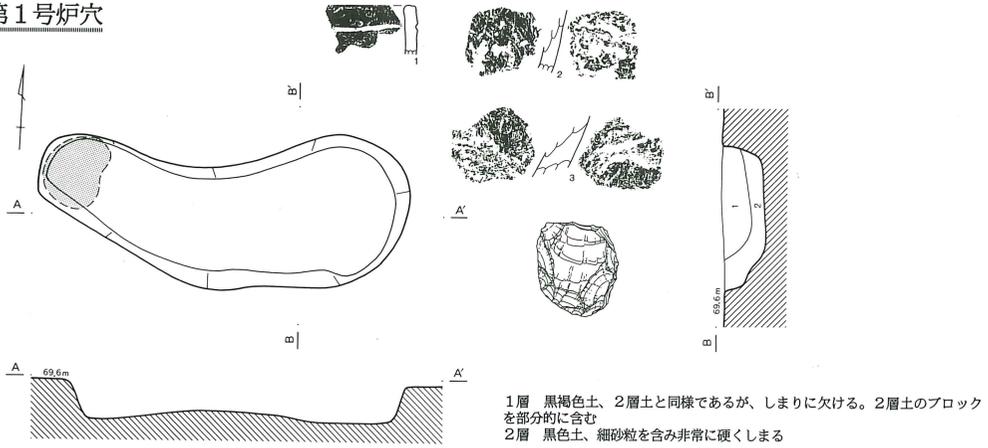
第1号炉穴 (第54図、第60図1～3、第63図10)

F1J1区に位置する。第2号炉穴と重複するが、第1号炉穴の方が古い。プランは東西に細長い楕円形を呈し、長軸3.00m、短径1.00m、深さ約36cmを測る。西壁部に炉床があり、やや深く掘り込まれ、よく焼けている。覆土は1層が非常に硬い黒色土のブロックを含む黒褐色土、2層が細砂粒を含み非常に硬くしまる黒色土で、炭化物、焼土粒子を若干含む。出土土器は第60図1～3である。1は角頭状の口唇部が立つ器形で、口縁部に沈線文を巡らす東山式土器であり、混入品である。2は胴部、3は底部近くの破片で、粗く条痕文を施すもので、2は繊維と砂粒を多く含み、3は白色粒子を多く含む。第63図10は片面に自然面を残す礫器で、周縁部から調整隔離を施し丸い刃部を形成する。

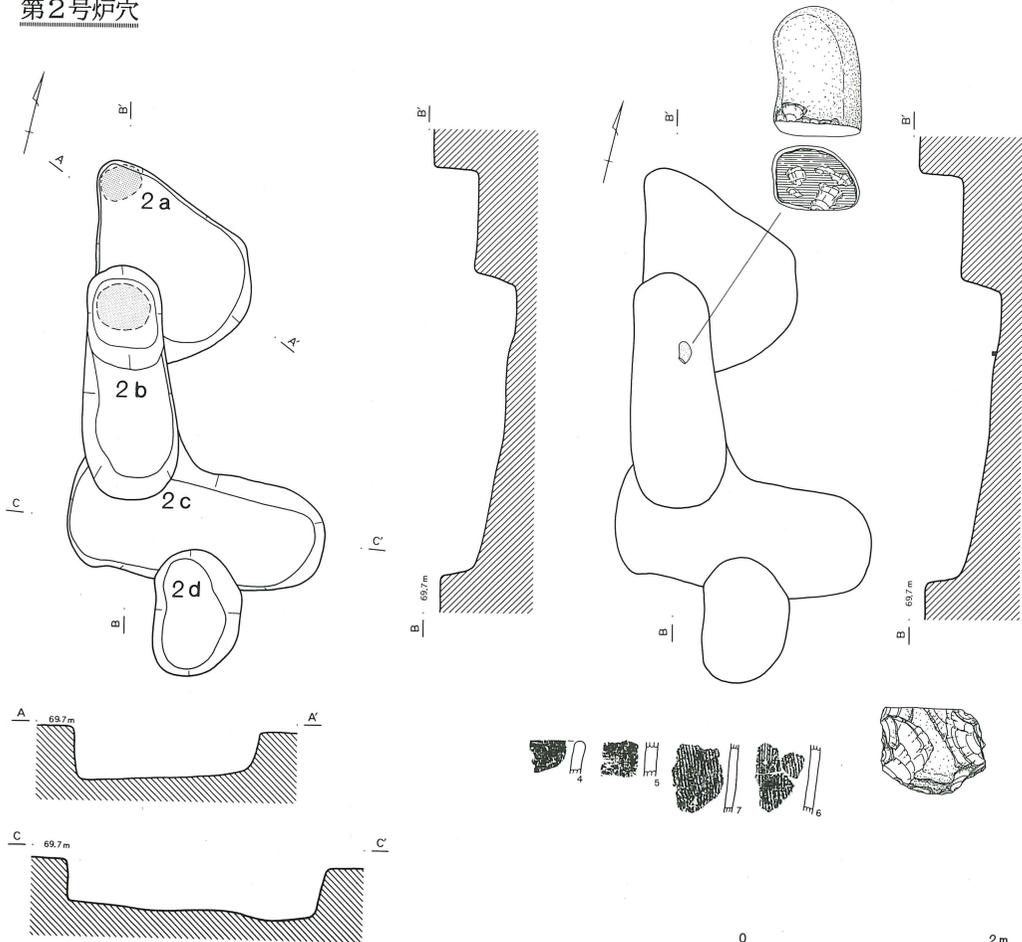


第53図 条痕文期の遺構

第1号炉穴

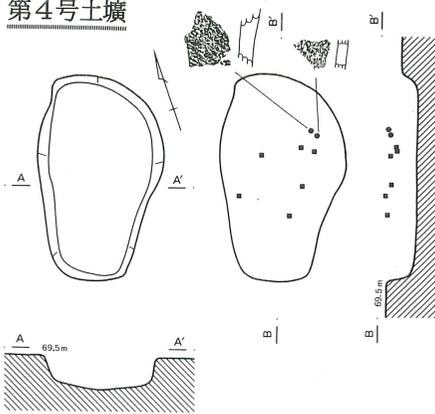


第2号炉穴

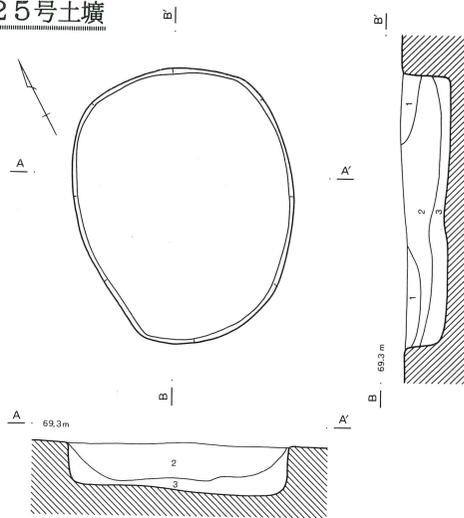


第54図 条痕文期の炉穴

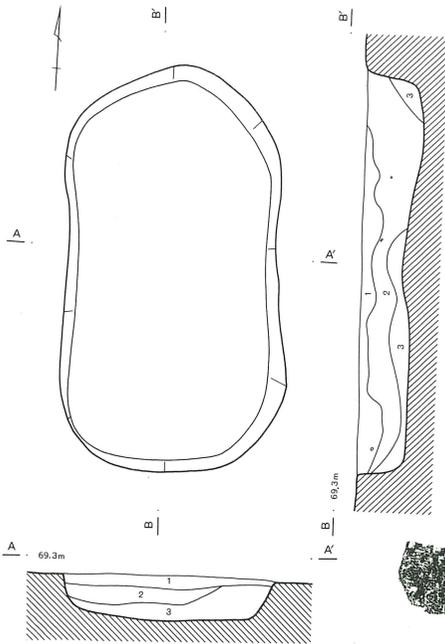
第4号土壇



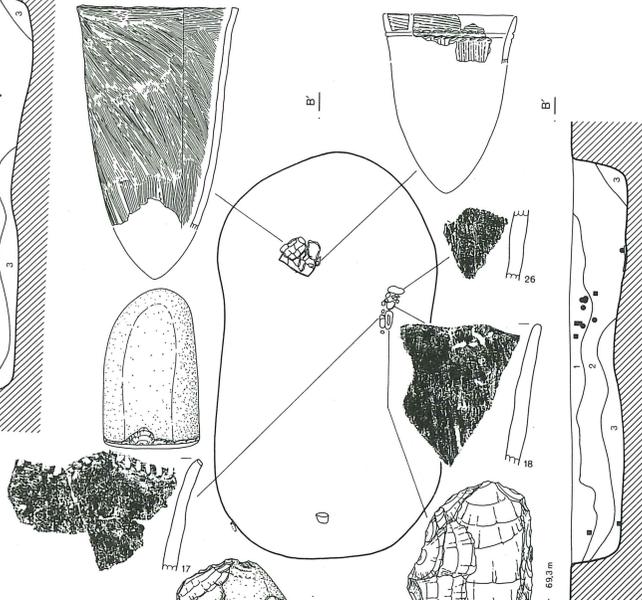
第25号土壇



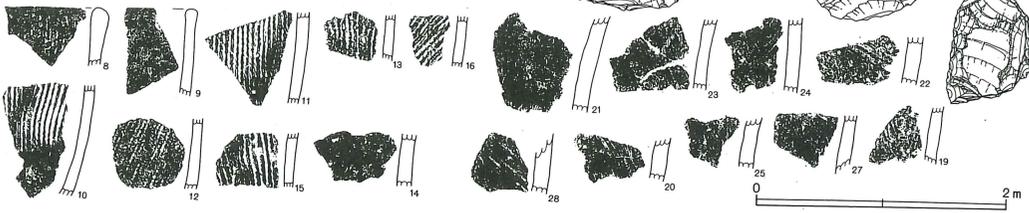
第24号土壇



- 1層 黒褐色土、2層土と同様であるが、しまりに欠ける。2層土のブロックを部分的に含む
- 2層 黒色土、細砂粒を含み非常に硬くしまる
- 3層 ロームを主体とし、2層土のブロックを含む



- 1層 黒褐色土、2層土と同様であるが、しまりに欠ける
- 2層 黒色土、細砂粒を含み非常に硬くしまる
- 3層 ロームを主体とし、2層土のブロックを含む



第55図 条痕文期の土壇 (1)